

---

# 異世界からホームステイ？

滝底

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界からホームステイ？

### 【Nコード】

N8012V

### 【作者名】

滝底

### 【あらすじ】

庭に落ちてきた美形異世界人と女子大生（夏季休暇中）のある夏の攻防劇。……と見せかけて、無自覚にイチャっていると思えないお話。『異世界のかけら』から連載に移行しました。

## 一夏 壁ではなくイキモノでした

。 実家に帰ると、見知らぬ外国人 いや、異世界人が居た

大学2年の夏、8月に入り暑さもいよいよ増して来た頃、私は約二ヶ月という長い夏休みを利用して田舎の実家に帰省することにした。都会のあまりの暑さから逃げたとも言っ。

ビルの建ち並ぶ都市は、日陰も多いがアスファルトや磨かれた窓からの照り返しも強い。鉄板の中に放り込まれたようだと思っのは、私がまだ都会に慣れない田舎者だからだろうか。

蝉は煩いけれど、緑が涼しげに木陰を作り、玄関や窓を全開にしても犯罪の欠片も起きそうにない実家が恋しい。エアコンの冷たさよりも風の涼に惹かれるのは、やっぱり私が田舎者だからだろうか。実家の縁側で団扇を片手にアイスを齧るのは、私にとって外せない小さな夏のイベントだ（日常的過ぎるとか言わないで！）。齧るものはスイカになったり桃になったりする。汗だくで汁だくなのがいいよね。……。私だけ？

それに、暫く実家を離れていたことで、母があれやこれやと世話を焼いてくれるのも嬉しい。

この間無事に成人も迎えたので、今年は父と酒でも酌み交わそうと秘かにお酒のお土産を用意していたりする（発想が男くさいとか言わないで！）。

受験に受ければ来年の春に晴れて高校生になる予定の弟が小うるさいのが玉に瑕だけれど、私は実家に帰るのが楽しみだった。

そうして母の愛情に甘え、父との交流という名目でお酒を飲み、自堕落に休みを謳歌しようと思っていた私が、帰省した先で思いもよらないものに遭遇するとは誰が思っただろう。

「ただいまーっ。お母さ」

慣れた仕種で簾を<sup>すだれ</sup>払いのけて入った先、玄関には何故か見たことも無い白い壁が。

怪訝に思ったのは一瞬で、反射的に見上げた先で出合った“色”に私はポカンと間抜けに口を開けて立ち尽くした。

「は？」

白い肌、

白金の髪に、

同色の睫毛に縁取られた瞳は宵闇の<sup>あお</sup>藍で、

星屑みたいな銀の虹彩がいくつも瞬くように散っている。

銀河を凝縮したみたいな瞳だ。

少し<sup>ふし</sup>節のある鼻は過ぎない程度に鼻梁が高く、

その下に鎮座する唇は薄くも厚くもない。つまり最適な厚みについて。

それらのパーツを黄金率のように乗せた顔が、頭一つ分以上も上にある。

その上、頬はファンデも付けていないのにきめ細かくさらりと綺麗だなんて。

私は一歩半という至近距離にあったソレに驚愕し、慌てて簾を押

し退けるようにして後退した。

え？ は？ ええっ？

遮っていた壁が遠のき少しだけ開けた視界の隅に、熊のような虎のようなわけのわからない刺繍のついた草臥くたひれた水色の手提げ袋が見える。巷ちまたで少し前から流行り出したエコバッグというやつだ。田舎では前から存在していたそれは、年季が入りすぎて薄汚れている。それを男はお綺麗な手にぶら提げていた。

いや、待て。

似合わないさ過ぎるだろう。

しかも、よく見ればその金髪頭の着ているＴシャツは父のもので、綺麗に筋肉の乗った身体に窮屈そうにぴったりと張り付いている。腹筋硬そう。って違う。

下に穿いているハーフパンツには見慣れない紐が。黒のハーフパンツには真新しい真っ白な紐が随分と映えている。どうやら上はパツパツなのに、ウエストは緩々で、母が苦肉の策を弄したらしい。Ｔシャツやハーフパンツから覗く手足はすらりと長く、筋肉もすっかりとついているのに身長の対比の所為か細く見える。つまり、

何だろう、このイキモノ。

「姉ちゃん何やってんの？」

私を自失から救ったのは弟の小生意気な声だった。丁度いいところに……、っていやいや待て待て、何をそんなに冷静に！ 『何やってんの？』はこっちの台詞だ。

まずはこのイキモノの説明をしろ！ というか、『おかえりなさい、お姉さま』と言え！

って違うっ。

こんな不思議生命体、うちには居なかったはずだぞ絶対に！ 弟よ！

首を傾げてこちらを見下ろしていたイキモノが何故か納得顔で頷いているのを横目に、私は高速で弟を手招く。手首が痛い。あ、ちなみにこの手招きは上から下へじゃなく、下から上へ、ね。アメリカンな感じで。どうでもいいか。

かなりの混乱状態になりながら、近寄ってきた弟を力一杯引き寄せる。『痛い！』とか聞こえたが、私の手招きスタイルよりもどうでもいい。

『ちよつと、孝太！ あのイキモノは何っ！？』

数歩先で静かにこちらを見つめているイキモノを極力視界に入れないようにしながら、小声で弟を詰問する。引き寄せた弟が『姉ちゃん近い暑い痛い』とか言っているが、私の手招きスタイルよりも（略）。

怪現象を目の当たりにしたかのような私の様子に弟は溜息一つ（生意気な）。

「あー、アッシュだよ。アシユール……ヒヤカスバーラだっけ？」

後半はきらきらしい不思議生命体に向かって言う。不思議生命体はこっくりと頷いた。日本語わかるのか。

すごいな勉強したのか、と驚く私を尻目に、弟はもつと私を驚愕に陥れることをポロツとサラツとアツサリ言い放った。  
曰く。

「一週間くらい前に庭に落ちてきたんだ」

莫迦を言え。

## 二夏 現実なのにファンタジー

「アッシユはさ、異世界から来たらしいよ」

我が弟君は、私から出来る限り離れようと上半身を引き気味にして（言っておくけど私が臭いとかじゃないから！）そんなことを宣<sup>のたま</sup>った。

その言葉を聞いて、私はすごく納得した。  
なるほどね。

まさかとは思ったけれど。

要するに、これが彼<sup>か</sup>の有名な

“受験ノイローゼ”というやつですね。わかります。

そんなに受験が大変だったなんて。まだ半年以上あるのに……。

だからあれほど、日々の勉強を怠るなど言っただんだ、私は。サッカーばかりやっているからこういうことになる。今どき、スポーツ選手だって頭が良くないとやっていけないんだぞ。センスだけで活躍できるのは本当に才能がある人だけだ。日々の勉強から頭の回転を早くする努力というものをだな……って、何の話だ。脱線しすぎた。

説教染みたことを考えながら、私も孝太と同じように僅かに上半身を引いて受験苦という病に侵された弟の顔を半眼で見つめる。も



ちろん腕は離さないけど。逃がすもんか。正気に戻れ。

孝太は私の言いたいことを察したのか慌てたように言い募る。

「マジだって！ 母さんに聞けばわかる！ いや、父さんの方がいいか、父さんが言えば姉ちゃんも信じるだろ！」

半ば叫ぶようにして言った孝太の顔は必死だ。

どうやら弟の受験ノイローゼは重程度らしい。今現在も視界にチラつく金髪男を 本気で 異世界人と言い、我が家の庭に落ちてきたのだと言っている。

かわいそうに。高校受験でそんなんじゃあ、大学はどうするんだ、弟よ。大学受験の方がもっと大変なのに。

と言いつつ、まあ万が一にもあの頭の堅いお父さんが孝太の言うことを肯定したら、信じてやらないこともない。努力はしよう。有り得ないだろうけど。

「とにかく、一先ず中に入れよ、母さんも父さんも奥に居るし。

アッシュ、買い物は後だ。姉ちゃん帰って来ちゃったから、先に説明する」

帰って“来ちゃった”とはどういう意味だ莫迦もん。いやそれより、仮にも一週間前に“落ちて来た”とかいう“異世界人”をお遣いに出すとか、うちの家族おかしくない？ おかしいよね？ まさか受験ノイローゼの弟を抱えて育児ノイ なわけないか。流石にね。

私が居間へ顔を出すと、父は趣味の盆栽の本を読み、母はお昼御

飯の支度をしていた。母は私の顔を見、後ろから黙ってついてきた金髪男を見、一言。

「あら六花<sup>むつか</sup>、帰って来ちゃったの」

「……」

私も一言言ってもいいだろうか。

帰って“来ちゃって”ごめんなさいね！

弟といい、母といい、何なんだ一体。正月以来久しぶりに見る娘（姉）の顔より、金髪男の方が大事なのか。確かに目の保養にはなるが、それよりもっと娘を歓迎して！ “帰って来ちゃった”とか酷くない！？

かなりイジケた気分に陥りつつ、促されてテーブルにつく。母はもうすぐ御飯が出来るからと言って台所に戻ってしまった。

私は御飯の準備が整うまでの間に、父から事情を聞くことにした。

そして、父の話を要約するところだ。

“ある日突然、庭の上空2〜3メートルほどのところに穴が開き、そこから金髪男が落ちてきた。事情を聞いてみると、どうやら魔導とかなんとかでの移動時に座標を間違えたらしい。直に迎えが来るようなので、それまで面倒を見ることになった”

一通り説明を聞いた私は思ったよ。

何そのファンタジー。

普通に有り得ないでしょう。何でそれをうちの家族は簡単に受け入れちゃっているんだ。怪し過ぎるっていうのに。

しかも、怪しさを冗長するのは金髪男が日本語をわかることだ。どういう原理かはわからないが、聞き取りは出来て、でも話すことは出来ない。

じゃあ“魔導”云々とか、“直に迎えが来る”とかっていうのをどうやって聞いたのかというと、金髪男が絵で説明してくれたらしい。

実物を見せてもらったんだけど、これがまた妙にリアルで……、本気で上手すぎる。何処の絵描きさんですか？　と思わず聞いてしまいたくなったね。聞かなかったけど。

それはそうと私はその無駄に丁寧に描かれた絵の中にいた、従者っぽい濃紺色の髪の毛の人が気になった。眼鏡を掛けていたんだけど、異世界とかいうところにも眼鏡というものは存在するんだね。

ところでそのインテリ男がかなり私の好みなのだけど、迎えとはその濃紺髪の従者が来るのかね。こっちはしっかり聞いておいた。私的に重要なので。金髪男は首を傾げていたけど。どっちなんだ。はつきりしろころ。

私が見事な絵（主に濃紺髪の男）に見入っていると、父は笑いながら言った。

「まあ、異世界とは言え外国人が“ほーむすてい”に来たと思えばいいんじゃないか？」

……。

何そのイイ笑顔。

ホームステイくらい綺麗に発音しようよ。

私が頭の堅いはずの父の意外な柔軟性に驚いているうちに、母が居間へと料理を運んで来て家族プラス一の団欒のお昼御飯が始まった。

「アツシュ、今日のトマトはとっても甘いから食べてご覧」

「……」

「アシュール君、わさびはどうだ、君の世界にも似たものはあるのかい？」

「……」

「アツシュ、後でサッカーしようぜ」

「……」

いやいやちよつと待ちたまえよ、我が家族たち。金髪男はどれだけチヤホヤされているんだ。久しぶりに帰った娘の影が薄すぎる！  
そもそも、落ちて来て一週間という金髪男、馴染み過ぎじゃない？  
あ。わさびでツーンとなってる。ざまをみる。

母はせっせと金髪男の前に料理を差し出し、父は昼間からお酒を勧め、弟は勉強についてやサッカーについてあーでもないこーでもないと喋り続けている。一々律儀に金髪男は反応を返しているが、何なんだろう、この和気藹々感は。

異世界人が庭に落ちてくるって、普通の出来事じゃないよね？  
むしろ異世界とかいうものが存在することが奇跡だね？ もつとこう、戸惑いとかないの？ 金髪男は金髪男で何普通に和食とか美味しそうに食べてるの、外見に合わなさ過ぎる。

何よりも家族が何の違和感もなく受け入れているのが違和感あり

過ぎるよ！

私は納得いかない思いで悶々としたけれど、

とりあえず。

「アシユールさん、お醤油取って」

### 三夏 鳴り響くコング

「どうもありがとう」

「」

「あ、これ？ 食べてみる？」

「」

「御飯とかとも合うんだけどねー。あ、種あるから気をつけてね」

「……。 ツッ！！！？？」

「アハハハ、酸っぱかった？ それ、梅干って言うんだよ」

私はそうめんのつゆに梅干を入れるのが好きだ。しその葉とかもいいけど、やっぱりここは梅干だね。そうめんを啜ったときに時々梅干の果肉が入ってきて、うひゃっ酸っぱ！ ってなるのが好きなの。

あ、何の話かって？

いやね、アシユールさんがお醤油を取ってくれたときに私の手元を不思議そうに見ているから何かと思ったら、梅干を見ててね？

和食中心の我が家でこの一週間のうちに一度も遭遇しなかったのかと不思議に思ってたんだけど、まあ偶々機会が無かったのかもしれないし、折角だからと勧めてみたわけ。そしたらまあ、予想通りリアクションが面白いの何のって！アハハハハ。

いやいや、その恨めしそうな顔、堪えないね！（私は断じて“えす”じゃないよ！）

ん？ それより私も家族のことなんて言えない、馴染み過ぎだ、って？

……まあ、あれです。

私、すごく空気を読む子なんです。

どう考えても、既にアシユールさんはうちの家族にすっかり受け入れられているわけで。その家族が異世界だ庭の上空に穴だと胡散臭いことを言っていたとしても、アシユールさんという人物がここに存在することは事実だ。

最初はあまりに簡単に信用しているから、一瞬“洗脳”という言葉が頭を過ぎったけど、よく考えてみたらそんなこと有り得なかった。だって、洗脳するなら“異世界”とか“庭の上空に穴”とか、そんな聞くからに怪しげな単語、真っ先に記憶から消すよね？ それでもって、もっと尤もらしい理由を捏造するはずだもん。

そして、常識的に考えて有り得ないことを洗脳するでもなくすっかり信じ込ませるような技術を持った人物を相手に、私がどう足掻いたところで事態が変わるかどうかは怪しい。何せ、堅物なはずの父に信用され、且つイイ笑顔まで引き出しちゃった人なんだ、アシユールさんという人は。

我が家では一応、父とは絶対の存在なのである。父が灰色を白と言ったらそれは白に他ならず、快晴でも雨と言ったら雨なのだ。つまり、父がこの人は異世界人ですが面倒見ます、と言ったらそうするしか無いのである。

孝太の話なんて信用していなかったけど、父がアシユールさんを受け入れている以上は、私も右に倣えというわけだ。

だから、ここは場の空気に流されてみようと思ったのです。場というよりも、父の周りの空気だけだ。

まあ、万が一にも彼が私の家族に危害を加えるような怪しい行動を取れば、私だって死ぬ気で抗ってみせますとも。家族を守るために。愛でもって！ 勇気を持って！ アーン、パーンチッ！

結局のところ、害が無いならどうでもいいかなあ、と。そう思ったのは否定できないけど。この親にしてこの子あり、的な部分が無いとは言えないけれども。いやいや、田舎者は心が広いんですよ。

そんなわけで、私と家族とプラス一の不思議な夏休みは始まったのでした。

「あ、お母さん、ここにお刺身入れてー。うん、それとそれー」

「」

「……」

「お刺身つまー。次はそうめん、そうめん！……。　　ッッ

！……」

な、なんで！！？　　どうして私のめんつゆの中に大量のわさびが

……っ！！！？？

ぎゃーっ！　　鼻にくる！　　目にくる！　　なんか色んな汁が出るー

ー！！　　し、死ぬ……！！！！

少し目を離れた隙に、何故か私の梅干入りのめんつゆが大量のわさび入りめんつゆに入れ替わっていた。

私は海苔を入れるのも好きで梅干入りのめんつゆにも大量に入れる。わさび入りのめんつゆにも同じだけ海苔が浮いていたから、つゆの色のおかしさに気づかず思いつきりそうめンを嚙ってしまった。……いやちよつと、マジで。鼻痛い。

ヒーヒー言いながら、何とか落ちていたとき涙目のまま周りを見渡すと、アシユールさんが口元を押さえているのが目に映った。目が笑ってる。さらに手元には、わさびのチューブ。その隣では弟が隠すことなく爆笑していた。



私は空気を讀んだ。いや、察したね。

孝太め！ アシユールさんに入れ知恵したな！！！！

そのとき私は本気で弟を締めようと決めた。孝太、後で裏庭に來い。來なかつたら潰す。來ても潰すけど。何を、とは言わないが。ナニを、だ。

大体、私がアシユールさんに梅干を勧めたときも黙って見ていたくせに！ 同罪じゃないの！？

しかも、アシユールさんもアシユールさんだ！！ そういうキャラだったの、この人！？ 虫も殺さなそうな綺麗な顔して……！ 仮にもか弱い乙女に仕返しとか…… 紳士にあらず！

このとき、私のアシユールに対する態度の方向性は決まった。もう“さん”なんかいらねえ。呼び捨てで十分だ、アシユール！ 容赦しねえ！ …… あ。か弱い乙女としたことが、ちよつと言葉遣いが。

とにかく。

覚悟しろよ！

……。

いやいや。てへ。

## 四夏 第一ラウンド、川

「暑い！　だがそれも良しッ！！」

唐突に叫んだら、“何を言ってるんだコイツは”的な白い目で見られてしまった。金髪アシユールに。まあ、当然と言えば当然だけども。

でもそんな冷たい目など私は気にしない。だって、

直射日光！

緑！

蝉！

汗だく！

温水！

まさに夏！

みたいな、この状況が嬉しくてたまらないんだもの。

みんなね、夏の暑さを嫌い過ぎだと思っの。もっと楽しめばいいのに。汗だって水で流せば済む話。仕事をしていたらそうはいかないのもわかるけどね。

私はダレるくらいに暑い中で、ぐったりしてるのが好き。汗だくで夏のイベントを楽しんで、お風呂に入ってさっぱりする瞬間が好き。夏の子だから。

夏は何故か滾るものがあるのだ。汗湧き肉踊る、みたいな？  
違うか。はは。

ぐったりしているのが好きとは言ったけど、今実際にぐったり夏を満喫しているかというところ、そういうわけでもない。

何故かお昼御飯の後、アッシュが買い物に行き損ねたのは私の所為だから一緒に行って来なさい、と母に言われ（私悪くないよね？ 偶の帰省をした娘に酷くない？）、アッシュを引き連れて、徒歩20分ほどのところにあるスーパーに向かっているんだ。

結構距離があるから自転車でも良かったんだけど、久々の実家周辺でもあるし、暑さに負けそうになる中でスポーツドリンク片手に歩くのもいいかな、と思ったんだ。完全に私の都合だけど、アッシュは黙って隣を歩いている。……まあ、日本語喋れないから黙ってるだけかも知れど、たとえ歩くのが嫌でもそんなの私は知らん。ぶっちゃけ、今は家族を横取りされたような気分でもあるし、お昼のわさびめんつゆ事件をすっかり根に持っているので、ざまあみろ、としか言えない。私、性格悪い子なんだ。

それに、そもそもアッシュ自転車乗れないしね。

「あー、暑い。暑すぎて干からびそう。土から出てきたミミズのよう。だがそれも良しッ！ いや、それは良くないか」

ジリジリと照りつける太陽と玉のように浮かぶ汗にニヤニヤしていたら、アッシュが再び頭の可哀相な子を見るような目でこちらを見てきた。何だコノヤロウ、と視線で対抗してやれば、それを見たアッシュはひょいと片眉を上げて肩を竦め、また視線を前に戻した。一々嫌味なほどに仕種が様になっているじゃないか。気に入らん。

それにこの人、意外に表情豊かだ。目は口ほどにものを言うとは言うけれど、アッシュは日本語を喋れなくても、表情を見れば十分に何を言いたいかわかる。会ってまだほんの数時間ほどだけど、何故かおおよその意思の疎通は出来ていた。嬉しくはない。

それにしても、白い目を隠すことなく乙女に向けるのはどうかと。

私は至って正常だぞ。君は見るからにこの田舎では異常な存在だけだな。

実家から10分ほど歩くと、ちよつとした川がある。幅は十メートルくらいで、深さは私の腰くらいまでかな。流れが緩やかで水も綺麗だから、絶好の涼ポイントだ。

ということで、当然、寄るよね。寄っちゃうよねー。

私が急に脇道へ逸れると、水色のエコバック的な、実はただの手提げという似合わなさすぎる袋を片手にアシユールが慌てて追い駆けてきた。

「ちよつと寄り道しよう」

振り返って満面の笑顔で言うと、立ち止まったアシユールは呆れ顔になって溜息まで吐きやがった。何だよ、ちよつとくらいの寄り道はオツケーでしょ？ 融通を利かせようよ、融通を。

緩い坂を下って目的の川へ辿り着く。水辺だからやっぱり少し空気がひんやりと感じる。水の流れるささやかな音も、照りつける太陽の中で涼を呼ぶ。最高だ。

川べりへ行き、一も二もなくサンダルを脱ぎ捨てると直ぐに足を水に浸した。歩いて火照った足先が、冷たい川水で冷やされて本当に気持ちいい。

ホッと息を吐いてペットボトルのドリンクを飲んでみると、ジャリツと隣で細かな石の擦れる音がした。早足で坂を下りてきた私と違いアシユールはゆったり歩いていたら、今頃追いついてきたらしい。

私は隣で突っ立っているアシュールを見上げる。白金色の髪が夏の日差しを反射して眩しい。10分も歩いているから当然アシュールも汗だくなんだけど、何故か暑苦しさの欠片も無く涼しげに見える不思議。

ハリウッドの俳優とか、有名なスポーツ選手とか、カッコイイ外人さんは山ほどいると思うけど、そういった人たちともまた違う綺麗さがアシュールにはある。少なくとも私が今まで見た中では、群を抜いて整った顔立ちをしている。

だからこそ、大学でだって外人さんなんて沢山見ていた私が、アシュールを見たときは本当に驚いたんだ。それを思うと、異世界人だという理解し難い事実も何となく頷いてもいいような気が……いやいや、私くらいは正気を保たないといかな。

「……」

「……」

眩しいアシュールをなんとなくぼんやりと眺めていた私だけど、川をじつと見つめるヤツを見ていて不意にいいことを思いついた。

煌く水面。

煌く金髪。

やつちゃう？ やつぱりここはやつちゃうとこだよね？

にやける顔を隠しながら私は川から足を上げ、しゃがみ直した。

直ぐ隣にあったアシュールの足をペシペシと叩いて、川の中を指差す。どうでもいいけど脛毛すねけも金色なんだね。

促されて私の仕種を見たアシュールはというと、黙って同じように川べりにしゃがみ込んだ。それから指差す方へと視線を投げる。

私は首を傾げているヤツの後ろへとこっそりと周り。

ドンッ！！

「ッー！」

バシャ　　ンツッ！

声を上げる間もなく盛大な水しぶきを上げ、落ちた。　　当然、アシユールが。

「あははははは、ははははは　　けほっ！　　あはははははは！」

大爆笑である。　　当然、私が。

あまりの豪快なダイブに川べりでお腹を抱えて笑っていると、ほどなくしてアシユールがかめつ面で川から上がってきた。全身ずぶ濡れだ。白金の髪も、お父さんのＴシャツもびったりと肌に張り付いている。それでも絵になるんだから、小癪なヤツである。どこかに隙は無いものか。

アシユールは随分と不機嫌顔だ。川に突き落とされればそれも仕方ないんだろうけど。多少深さのある川だから怪我はしていないだろう。

いやあ、それにしても可笑しい。笑える。あんなに簡単に騙されるなんて。意外と素直だね、アシユール。

そして私、イイ仕事したわ。惜しむらくは、アシユールが背中を押された瞬間の焦る顔が見られなかったことくらいかな。きつと切れ長の目もまん丸になっていたことだろう。

いやはや、見事な前転ダイブであった。

満足顔でアシユールを見ていたら、水分を含んで少し色の増した白金の髪を鬱陶しげに掻きあげていたアシユールが、スツとこちら

に鋭い視線を投げてきた。

な、なんだねその怖い顔は。

じりじりと後ずさる私に、じりじりと距離をつめるアシユール。

何をする気だ、やめてよ？ やめなさいったら！

慌てて身を翻そうとしたけれど、間に合わず。

「ッ！ー！！」

ドッパアアン      ツ！ー！！

一気に間合いをつめたアシユールに俵担ぎにされた私は、そのま  
ま川へと放り投げられた。

いやマジで大人げないよ、アシユール！ 乙女に俵担ぎとか、投  
げ飛ばすとか……許すまじ！！

そうして、私とアシユールの川での攻防はしばらく続いた。

私は20歳です。嘘じゃありません。アシユールの年齢は知らないけど。

## 五夏 優しさのかけら

「  
……」

……正直、やりすぎたかな、とは思う。たぶんアシュールも同じことを思ってる。自分の姿を見下ろして渋い顔をしてるから。

かなりの時間、水の掛け合いやら沈め合いやらをしていたので、いまや私もアシュールも頭の天辺から足の先まで満遍なくぐっしょりびっしょり濡れネズミだ。対抗意識を燃やしすぎた。私としたことが。

ああホント、携帯を忘れてきていてよかったよ。もし持って来ていたら今頃ただの四角い物体になっていた。あ、ちなみに、お財布の入ったエコバッグは川べりに置いてた（というかアシュールがダブするときに放り出した）から無事だったよ。

それにしてもどうしたものか。

よく考えると……いや、よく考えなくてもこれからスーパーへ行く予定だったのに、こんな姿じゃ流石にお店の中に入れない。常識的に考えて、非常識的すぎるもんね。

夏だから乾かそうと思えばあつという間に乾くだろうけど、やっぱり多少、川の生臭さがある気がする。それで食品のお店に入るのは……ねえ？

こんな状態なのがアシュールだけなら、お店の外でちょっと待っててもらえばいいだけだったのに、アシュールが大人気なく仕返し



なんてしてくるから！　そうだ、全てはアシユールの所為！

とにかく。……面倒だけど、やっぱり一度家に戻るしかないかなあ。でも手ぶらで帰ったらお母さんにはこっ酷く叱られるだろうなあ。

そんなことを徒然と川遊びでちよつと体力を使いすぎた私がぼうつと考えていると、

べちっ

「わぷっ」

突然頭の上に何かが降って来たもんだから、私は慌てた。得体の知れないものに焦りつつ、急いで顔から引き剥がし目の前に広げてみる。

それは白いＴシャツだった。……湿ってる。

視線を上げると、目の前には上半身裸のアシユールが。一瞬、何だコイツ頭おかしくなったか？　とか思ってしまったけど、今私が生きているモノがアシユールが着ていたお父さんのＴシャツだと直ぐに気づいた。コレを着ろ、ということらしい。……でも何で？　よく見ると何か微妙にアシユールの耳が赤いような。耳の淵辺りが。それに、すぐそばの悪そうな顔をしている。

そっぽを向いているアシユールのそんな横顔を見て、嫌な予感に自分の姿を見下ろした私は、Ｔシャツが投げて寄越された理由を理解した。

……。まあ、うん、アレだ。私、完全に下着が透けちゃっておりますして……。

川の中では全く気がつかなかった。でも着ていたのは淡い桃色のパフスリーブＴシャツだったものだから、そりゃあ濡れればブラも透けるよね……。

流石にコレは私でもちよつと恥ずかしい。

私は慌ててアシユールに渡されたＴシャツを着た。一応、固く絞ってくれたみたいで、アシユールのＴシャツはそれほど肌に張り付くこともなかった。

ああああ、それにしても恥ずかしい！ せつかく水に浸かって下がった体温も、今ので俄然上昇した気がする。

「……………」

この恥ずかしさをどうしたものかとちよつと気まずい思いでいると、アシユールが何かを呟いた。視線を向けると、眉尻を下げて困ったように微苦笑するアシユールの顔。

さっきの呟きはたぶん、“ごめんなさい、六花さま、私が全面的に悪かったです。お許しを”とか何とか言っただんだと思う。……違うか。あはは。

でも申し訳ないと思ってきているのは間違いないと思うんだ。だからここは私も大人にならなきゃいけない。意図せぬシースルー披露は忘れないか。

「気にしないでいいよ。私もちよつとふざけ過ぎたし。それよりちよつと涼しくなつたしよかったよ。」

「……………」とりあえず、このままも何だから一度家に帰ろう」

いやホント、何事も遣り過ぎてよくないよね。……………ははは。

私が乾いた笑いを浮かべていると、アシユールも一つ苦笑を零した。お互い様ということだ。

それからアシユールは川べりに置きっぱなしになっていたエコバッグを拾い上げた。少しだけぎこちなく歩き出したアシユールの後を、私も黙って続く。なんかちよつと、今は隣を歩くのが恥ずかし

い。だからこつそり息を潜めて後ろを歩くことにした。

俯き加減に歩いていた私だけど、ふと視線を上げたところで目に飛び込んで来たものに、ハツとした。

アシュールの背中に細かな擦り傷が出来ている。よく見ると腕にも。どう見てもそれは真新しい傷で、明らかにさっきの度の過ぎた川遊びが原因だとわかる。

そんなに危ない場所だっただろうか。私の身体には傷なんてほとんど出来てない。よく探せばあるだろうけど、傷をこさえている私自身が気づかないほどささやかなものってことだ。

そのことに気づいて、一瞬後には呆然としてしまう。

私はただ、対抗心とかちよつとしたヤキモチで何も考えずに応戦してただけなのに、たぶんアシュールはちゃんと私が怪我をしないように手加減をしてくれていたんだ。

アシュールのことを大人気ないか思っていたけど、遊びの範囲を脱さずに済んだのは偏にアシュールの加減のお陰だった。私は、お互いが子供みたいに張り合っているという気持ちでいたのに、アシュールは私よりずっと冷静に考えながら対応していたんだ。

つまり、さっきの私って、アシュールに遊んでもらっていたようなもの……？

ああ、なんか私今、下着が透けていたときよりずっと恥ずかしいかも……。

アシュールの後ろを歩きながら、急激に顔に熱が集まるのを感じた。そして、アシュールの白い背中に浮かぶ小さな赤い傷を見て、家に帰ったらちゃんと消毒をしてあげようと思った。



六花 騙されるな、私！

「六花、あなたがまたアツシュに悪戯したんでしょう！」

急いで家に戻ると、帰って来た私たち二人を交互に見たお母さんは直ぐに怒り出した。

私はそれを俯き加減で聞きながら、ムツとする。

確かに私が初めに手を出したんだけど、なんかさ、……どうして頭ごなし？

アシュールが発端かもしれないとは思わないの？ アシュールにも原因があるとか、考えないわけ？

決め付け、よくない。まあ、今回は当たってるけど。

「まったく、お遣い頼んだのに、寄り道して買い物もせずに帰って来るなんて！ アツシュは異世界人だけどちゃんと一人でお遣いできるのよ！？」

それなのにあなたは何！？ とか、顔が怖いです、お母さん……。般若もかくやだし。

というか、アシュールはまだこっちの世界に来て一週間だとか言ってたのに、今日が“初めてのお遣い”じゃないんだ……？ 一人でお遣いできるって、そういうことだね？

それって見ようによつては、アシュールが扱き使われてるってこと？ 慣れない世界で一人買い物とか……。同情しちやいそう。

もしかして、実は掃除や洗濯もさせられてたり？ ……何それ、

何てシンデレラ？

そんなことを現実逃避気味に考えている間にも、お母さんはガミガミとお怒りだ。完全にお説教モードに入ってしまったてる。その表情たるや。阿修羅もかくや。

とはいえ私も自分の非は認めているので、初めは黙って聞いていようと思ったんだけど……。お母さんのお説教は何せ長い。全身びしょびしょだし、出来れば着替えてからにして欲しいな……。

ここは私も意地悪な姉役として（アシユールの方が私より年上に見えるけど）、シンデレラを盾に……。！ そう思った私が、どうにかしてくれ、と縋るように隣に居たアシユールを見ると……。

……フィッ

……。

ちょっと？ 何で視線を逸らすのかな、アシユールさんよ？

「こら六花、聞いているの！？」

アシユールの驚きの仕様にポカンとしていたら、またお母さんに怒られた。

シンデレラ使えねえ！

「あなたはいつもいつも！ 都合の悪いことを後回しにしようとするのは駄目と言っているでしょう！？ どうせ今だって“お説教は後にしてよ”とか思ってるんでしょう！？ お母さんはお見通しですからね！」

いえ違います、ウチに来たシンデレラの有用性の無さに驚いていました。……とは流石に言えない。

もう、勘弁してよ……。とりあえず、軽くシャワー浴びて直ぐに  
買い物行くからさ！ お説教はその後……。っ！……。お母  
さん、流石です……。

言った通りの思考を辿ってしまった自分に秘かに心の中で打ちひ  
しがれているとは知らず、お母さんはむしろヒートアップしていっ  
てるみたいだ。何だか声が大きくなったような。

「いくらしばらく家に帰ってなかったとは言え異世界人のアッシ  
ユよりあなたの方がこの辺りのことにも生活にも慣れているんだか  
ら、子供みたいなことしていないでちゃんとお世話をして上げなき  
やいけないって言うのに！」

そもそも……。ああ、ごめんなさいね、アッシユ。貴方は悪く  
ないから、気にしないでいいのよ？ 先にお風呂に入って来なさい。  
直ぐに着替えを持って行ってあげるからね」

って、ちょっと待った！ 何故にアッシユールに責任は無いことにな  
っているんだ！ むしろアッシユールがやり返して来なければ今の  
惨状は無いんだってば！

しかも先に解放するとか……。！ 私の方が女の子で、長時間全身  
ずぶ濡れじゃ身体に良くないでしょう！？

「おか、ー！」

抗議しようとしたのに、それを察したお母さんの鋭い視線で捻じ  
伏せられてしまった。その視線の鋭さといったら。仁王像もかくや。  
しかし発言もさせてもらえないって……。私って可哀相。

可哀相な私に救済を！

私もなんとか解放して欲しい一心で、もう一度アッシユールに視線  
を向ける。アッシユールが言えばお母さんも折れてくれるだろう。

シンデレラ、今度こそ助ける。

眼力を込めて見つめたのに、そして目が合ったというのにつ。ア  
シユールは視線を逸らしはしなかったものの、今度は感じの悪い片  
頬笑いを一瞬浮かべた。

何その顔。

明らかに小馬鹿にしたよね！？

鼻で笑ったよね！！？？

フツとか聞こえた気がした！

この継子！

使えないシンデレラめ！

いやむしろあんたこそシンデレラの姉だよ！

私こそシンデレラだ！

王子様は何処！！？？

かばちやの馬車持って来い！！！

ああもう、さっきちょっとヤツを見直した私の純粋な心を返して  
欲しい。手当てもしてあげようと思った私の優しい気持ちを踏み躪  
るとは……！ 繊細な硝子のハートが砕け散ったよ。嘘じゃない。

まあ頑張れ。みたいな顔をするとはどういうことだ、このやろう！

しかも、それからアシユールは未だに私へのお説教を続けている  
お母さんの脇を通り抜けた後、一度振り返ってにっこり。私に向か  
い軽く手を振って去って行った。もちろんお母さんには見えない位  
置だ。



……。

マジで。

ガチで。

私アイツちょー嫌い！！！！

六花 騙されるな、私！（後書き）

近づいたはずの距離が倍速で遠ざかりました。おかしい。こんなはずでは。

## 七夏 ハイスペックなシンデレラ

翌朝、私は近所のラジオ体操に全力で参加した。  
夏といえばラジオ体操でしょ！

あーたーらしい朝が来た  
それ、いちっ、にっ、さんっ！

え？ ラジオ体操は小学生のイベントだって？  
莫迦を言わないように。

ラジオ体操とは、老若男女問わず身体にいいことの代名詞でしょ。  
アレ、全力でやると本気ですつきりするからね。って言っても、  
私は夏しかやらないけど。だって、ラジオ体操は夏にやってこそ、  
でしょ？ 他の季節にやっても面白くないもの。

とにかくそんな感じで朝から夏のイベントを満喫した私は汗だく  
になった。汗だけでもすつきりした気持ちで家に帰り、直ぐにシ  
ヤワーを浴びた。しっかり汗を掻いた後のシャワーは最高の瞬間で  
あった。うむ。

もちろんヤツとの“お風呂でバツタリ”イベントなんてありま  
せんでしたとも。

しっかり『使用中！』という殴り書きの紙を扉に貼り付けておい  
たので。そういうところは抜かりないのが私だ。  
うっかりシースルー事件どころか、はらりバスタオル事件が起き  
たなんてことになったら、本気で笑えないしね。

……。

あれ？　ところでアシユールって、字は読めるの？　読めなかったら意味くない！？

うわあ！　今さら気づいても遅いけど、今度ちゃんと確認しなくちゃ！

昨日嫌いだということを再確認した件のアシユールは、私が全力ラジオ体操をしている間、お母さんの朝食の準備を手伝っていたらしい。

買い物の次は料理？　娘の私でさえ実家ではやらないっていうのに。

あの人、本当にシンデレラなんじゃないの？　うちに暖炉はないぞ。

午前7時過ぎ、私は受験のために遅くまで勉強していたらしい弟を叩き起こし（比喻じゃないよ）、食卓についた。

孝太め、7時になっても起きて来ないなんて、夏休みだからって気が緩みすぎじゃない？

受験勉強のときこそ規則正しい生活がものを言うと思うんだよね。私が大学受験のときにはきっかり午前0時には就寝し、6時に起きるという生活をしていた。規則正しい生活って、頭の起動を早くする気がする。集中して勉強するには、朝から晩までびっちりより、きちんと休憩をとってやった方が効率もあがるし。

まあでもその辺は人それぞれのスタンスがあるから、あまり口出ししようとは思わないけどね。

ああ、孝太の所為で脱線しまくった。それより御飯、御飯！

食卓につくと、白い御飯とお味噌汁、焼き魚などという完全なる和食が綺麗に並べられていた。心躍る朝食だ。いいよね、和食。

全力ラジオ体操で一汗掻いた私はお腹もぺこぺこで、合掌すると

早々に食べ始めた。

「美味し！」

アジの塩焼きを突きつつ、至福の時間を過ごす。

実家って黙ってても御飯が出てくるからいいよね！

どうしても自炊をさぼってしまう一人暮らしを一年半も続けると、本当に実家の有り難味がわかる。お母さんって偉大だ。般若や阿修羅や仁王の顔を見せても、偉大だ。……うん。

美味しい御飯を作ってくれるお母さんに心の中で感謝しながら、インゲンとゴマの和え物に箸を伸ばす。

……ん？

……何だか視線を感じるんだけど。

和え物を掴む前にちらりと視線を上げると、そこにはこちらをじーっと見つめるアシユールがいた。

何ガン飛ばしてんだこんにゃろめ。

あ、違った。

何をご覧になっっているのかしら、シンデレラ？

昨日の一件をいまだに根に持っている私が満面の嘘笑いでにっこり笑ってやると、目が合ったはずのアシユールは何も言わずにフィッと視線を逸らした。

ちよいと？

それはあれかい？ 昨日の再現かい？

次は片頬笑いでも披露してくれるって？

ついでに笑顔で手も振ってくれちゃったり？

嬉しくないからやめてよね！

嘘の笑顔さえ引き攣らせる私を余所に、アシユールはまた淡々と自分の食事に戻っていった。

ホント、何だったの？

.....。

まさか、今度は和え物にゴマの変わりにからしが投入されているとかじゃないよね！？

私は慌てて周りを見渡した。

よし。

孝太はまだ寝惚けてるし、入れ知恵は無理だな。

「六花、何をしているの？ また変な事考えているんじゃない？」

和え物に箸を伸ばしたまま少しばかり挙動不審な動きをした私を、怪訝に思ったらしいお母さんが窘めるような声で言ってくる。

いや、私いまは何も悪いことしていませんけど。濡れ衣、よくない。

唇を尖らせる私を余所に、お母さんは何かに気づいたように言っ

た。  
「ああ、それ。今日の和え物は、アツシュが作ったのよ。本当、アツシュは呑み込みが早くて」

なるほど。

これ、アシユールが作ったんだ。

どおりで穴が開くほどこっちを見てくるわけだよ。

自分の作ったものの反応を気にするなんて、アシユールも案外可愛いところがあるじゃないの。

ちよつと上から目線でそんなことを思いながら、お母さんのアシユールべた褒め徒然話をスルーしつつ、和え物を口に運んだ。

うん、中々美味しい。

簡単な料理だからそうそう失敗もしないだろうけれど、どうもお母さんが話している内容をちよつとだけ拾うと、アシユールは料理自体が初めて、らしい。それにしては上出来だよね。

いいところは素直に褒めるのが私（嘘っぱいとか言わないで）。ということ。

「美味しいじゃん」

アシユールを見て言えば、何となくホツとしたような、照れたような反応が帰って来た。

あれだね、こんな綺麗な人に、こんなこと思っちゃいけないんだろうけど。

……ちよつと気持ち悪い。

いやいや、私の心の眼がそう見せているだけだとは思うよ？ 一般的には萌える反応なんじゃないかな。相変わらず日焼け知らずで肌は白く肌理細かいし、銀河の瞳は吸い込まれそうな深い色だし。これだけ見目麗しい男が照れてたら、歓喜の悲鳴の一つも上がるだろうと思う。

……でもなあ。

私からすると、昨日の性格悪そうな片頬笑いが頭から離れなくて、

今さら照れとか見せられても、みたいな。

どう反応すべきか私が悩んでいる間にも、アシユールは照れを誤魔化すようにアジの塩焼きに箸をつけている。

あれ？ そういえば、アシユールって箸も使えるの？

不思議に思っただけ聞いてみたら、何故かお母さんが答えてくれた。  
曰く、初日に教えて、翌日にはマスターした、と。

……。

コイツどんだけハイスペック。

箸使うのって、そんな一朝一夕で出来ることじゃないよね？ それをやったのけちゃうって……。

買い物だって、慣れない世界の道を直ぐに覚えたわけでしょう？  
もう何か、呆れるしかないというか。生まれ持った才ってやつですかね。はん。

何事もああでもないこうでもないで試行錯誤しなくちゃ出来ない私はちょっぴりやさぐれた気持ちになった。



## 七夏 ハイスペックなシンデレラ（後書き）

六花以上にちょー空気ですが、お父さんも食卓に居ます。  
一人黙々と御飯を食べています。父ペース。

## 八夏 異世界人は働き者？

全力ラジオ体操で朝から体力を消耗した私だけど、半年近く使っていなかった自分の部屋を掃除し、午前中も精力的に過ごした。…まあ、お母さんに無理矢理させられた、とも言えるけど。

涼しいうちに活動するのもまた夏を感じるよね。  
そして暑さの増す午後のはんびりするのだ。

ということで、午前中の間に一仕事終えた私は、お昼ごはんの後には縁側でぐったりと横になっていた。

傍らには蚊取り線香を置いて、時折庭の緑の隙間から青い葉の香りと一緒に涼しげな風が吹いてくるのに目を細める。ミンミンと一生懸命鳴く蝉と吊るした風鈴が奏でる心地のいい音色をBGMに、微睡む。

まさに私の大好きな時間だ。

ああ本当に。

The 夏！

って感じだなあ。

もう少し気温が上がったら、扇風機でも回しながらアイスを齧ろう。

そんな計画をぼんやりと頭の中で立てていると、不意に閉じた瞼に陰が差した。

心地のいい時間を邪魔され渋々目を開け見上げると、随分背の高いシンデレラの姿が。

うーん、本当にドレス着て女装しても似合いそうだね、アシュ

ールって。顔だけは綺麗だし。性格悪いけど。

「……」

私の枕元に立っているアシユールが、じつとこちらを見つめてくる。

今度は何だ？

俯いている所為で銀河の瞳は陰になっていて、アシユールが何を考えているのかわからない。

とりあえず、そんなところに立っていられると落ち着かないんだが。嫌がらせでもしに來たんだろうか。

じつとこちらの見つめてくるアシユールに、私も負けじと見つめ返す。にらめっこなら負けないんだからね。

一向に立ち去らないアシユールを見ていて、突然頭に閃くものがあった。

まさか、ヤツの目的は……！

こ、この場所は譲らないんだからね！

夏の縁側は私のものと決まっているの、我が家では！

アシユールは大人しく屋根裏にでも行っとなさい！　ウチに屋根裏なんてないけどね！

シンデレラの姉らしく意地悪なことを考え、絶対退かないぞ、という気持ちを込めてこれ見よがしに目を瞑ると、暫くしてアシユールは静かに立ち去って行った。

……。

何か一言くらい言って行けばいいのにね。

……ああ、あの人日本語喋れないんだっけ。

それでもさあ、家の中で出会ったのに無言はないよねえ？

って、私も言葉は一言も発してなかったけどさ。

何だか少しだけモヤツとしつつ、不貞寝するように目を閉じていると、直ぐにパサリと何かがお腹の上に降ってきた。

何だろう？　と思って目を開けると、お腹には水色のタオルケットが。

「ありがと、お母さ」

言いかけて、止まる。

側に立っていたのは、さっき何処かに行ったはずのアシユールだった。

「……………」

何を言っているのかさっぱりだ。

でも今の状況を考えると、“そんなところで寝ていると、風邪を引くんじゃないのか？”とかかな。心配してくれたんだろうか。やっぱり優しいところも……。

……。

いやいやいや！

私はもう騙されないぞ！

どうせ、お母さんに言われたか何かで嫌々ながらに持ってきたに違いない！

きつと今の言葉も“お前の所為で、扱き使われてるんだけど？”

とか言っただんだ！

絶対にそう！

真意を確かめてやろうと、寝転がったまま体勢を仰向けに変えてずっと高い位置にあるアシュールの顔を見る。

起き上がらないのかって？　だって私、まだまだ転寝するつもりだし。起きるのちよつと面倒だし。下から見上げたアングルからでもアイツの顔が整ってるのが癪だし。って、これは関係ないか。

そういえば、金髪の人って、毛も金色なのかな？　今度見せてもらおうかな。……いやいや、汚いからやめよう。どんなに綺麗な顔をしている人の毛でも、ソコの毛はね。

ん？　には何が入るのかって？

もちろん、“鼻”に決まってるじゃない。他に何があるの？

あ。もしかして、みんな“カゲ”って漢字を想像した！？　そんなわけないって！　そんなの、今度見せてもらおうとか言うわけないでしょ！　アハハハハハ。

……。

どつちにしろ下品でした、ごめんなさい。

清純派な私らしからぬ思考をこっそり巡らせていたんだけど、ふとアシュールの足元にあるものに目がいった。洗濯力ゴだ。

もう朝に干した分はすっかり乾いて、今度は二回目の分みたい。

夏は洗濯物も結構たくさん出るもんね。

……。

あー。

アシュール「シンデレラ説がいよいよ濃厚になってきたな。

買い物に食事、洗濯、って。

チャホヤされていると思ったら、意外と本気で扱き使われてない？

まあ、アシュールをべた褒めなお母さんのことだし、無理にさせているとは思えないけど。でも何だか本当に可哀相になってきちゃったよ。

居候とはいえ、私以外の家族はアシュールが異世界人だということを信じて疑っていないはずなのに、世界の違うところから突然ト

リップして来ちゃったような人をお手伝いさんのように使うなんて。何て言うか、もう少し気楽に過ごさせてあげればいいのに。

それによく見れば着ている服だって昨日と同じようなお父さんのだし。買い置きの上シャツをおろしたっばいといえ、ちよつとあんまりじゃない？　そもそもサイズが合ってないし。

暫くそんなアシユールを同情の目で眺めていた私だけど、ヤツが洗濯カゴを持って立ち去ろうとしたから慌てて立ち上がった。

うん、思い立ったが吉日！

いくら嫌いでも、昨日の川遊びで気を遣ってくれたことを忘れたわけじゃないし、今だってお母さんに頼まれたのかもしれないけれどタオルケットを持ってきてくれたわけだし！　それにほら、私って優しい子だし！　本当にシンデレラの姉みたいになるのは嫌だし！　何かの言い訳のように心の中で呟きながら、急いでアシユールの腕を掴む。

「ちよつと待った」

驚いたように振り返ったアシユールの腕から洗濯カゴを奪い取る。

「ここで待ってて！」

それだけ言うとアシユールを置き去りにし、私は弟の部屋に足音荒く乗り込んだ。

本気で嫌がる孝太に洗濯物を押し付け、待っててという言葉通りに縁側で突っ立っていたアシユールの腕を引っ張って、家を出た。



**八夏 異世界人は働き者？（後書き）**

毛に騙された人、正直に手を挙げて！

……性質悪くつてすみません（謝



## 九夏 誘蛾灯の有効活用

とりあえず、ぴちぴちのＴシャツとハーフパンツではあまりにもあんまりなんで、近所の幼馴染が居る家で服を借りることにした。

見るからに１８５ｃｍはありそうなアシユールだけど、幼馴染も１８０ｃｍくらいはあったから、丁度よかった。

その幼馴染も私と同じく県外の大学に通っていて今は不在みたいだ。だから直接は頼めなかったけど、おばさんにちよつと入用だからと伝えると何だかニヤニヤしながら貸してくれた。……とんでも勘違いはよしてね、おばさん。

服の方は、一先ず見られればいいから白Ｔシャツと黒ベスト、麻生地の白ズボンというシンプルな組み合わせをパパッと選んでアシユールに渡す。

状況の飲み込めないアシユールは困惑顔ながらも、言うとおりに着替えてくれた。

しかし身長は然程変わらないというのに、ズボンの裾が微妙に足りないという。小癩な。

仕方がないので少し裾をロールアップさせて、何とか自然な感じになった。

電車で５つほど先の駅まで出た。私の実家は田舎なので、そんなにお店がないのだ。駅を５つと言っても、一つの駅と駅の間が５分以上あるので、結構な距離を移動していることになる。

まあ、そんな田舎事情はさておいて。

目的のお店を探して歩く中で、早速問題が。

「……………」

「……………」

……………何だろうな、この、気持ち悪い感じ。

何が、って、私たちの後ろが、だ。

私たちは普通に歩いているだけなんだけど、背後には何故か少しずつ少しずつ、ときには大量に、足音が増してきている。振り返るのが怖い。

何この怪現象。

夏イベントは夏イベントでも、心霊現象はお断り！ お化け屋敷も真つ平御免の私は、背後で起こっているであろう怪現象に鳥肌が立つのがわかった。

まあもちろん心霊現象なんかじゃないんだけど。

さつきチラリと見たら、明らかに異常なほど大量の人たちが、少しだけ遠巻きに私たちの後ろを歩いて来ていた。目の端に、すれ違った人がUターンして私たちの後ろへつくのが映ったときは、本気でギョツとした。

怖くない？ 怖いよね？

今までこんなこと一度だって経験したこと無いよ。

後ろに連なる人ばかりはほとんどが女性で、ときどき男性もいるんだけど、あれかな、いわゆる乙女路線の人かな。

わらわらと私たちの後ろをついてくるその人たちは、夏の日差し  
の所為なのか、別の理由からなのか、誰も彼もほんのり頬をピンク色に染めている。……………熱中症か？ 実際、途中で倒れて離脱してい

く人もいる。何に中てられたんだか。

逆上せ上がったような顔の彼女たちが夏の太陽よりも熱い視線を送るのはもちろん私ではなく、私の隣でのんびりと何事も無さそうに歩くアシュールにだ。

まあ要するに、明らかにアシュールの美貌に引き寄せられているってわけ。

なのに、アシュールときたら。

本当に全然周りの視線なんて感じた風もなく、涼しい顔で歩いてらっしゃるんだから……。こんちくしょうだよ全く。

ソワソワと落ち着かないのは私だけ？ アシュールはこんな視線には慣れてるってか？

こちらら、本気で迷惑だし。

何ていうかね、私にも刺さるわけ。視線の矢が。あの女はあの方の何なのよ、的な矢が。ホント、拡声器でも使って言ってやりたい。

私はただのシンデレラの姉です。

と。

私は夏の太陽の暴力的なまでにジリジリと突き刺さる光は好きだけど、視線の矢で弁慶並みに串刺しになるのは好きじゃないっていうの。

もうね、あれだね。

後ろに群がる人たちは、蛾だと思おう。

燐粉みたいに化粧やら日焼け止めやら香水やらを塗りたくった、蛾。実際、何だか色んな香りが混じった毒々しい空気が背後には流

れている気がする。集団怖い。

それで、間違いなくアシユールは誘蛾灯だわ。  
そこまで考えて、ハタと気づいた。

そっか、誘蛾灯だ！

そもそも、誘蛾灯の目的は蛾とか光に寄ってくる他の害虫なんかを引き付け駆除するというものだ。

つまり、誘蛾灯アシユールには離れたところで歩いてもらえばいい。駆除は出来ないだろうけど、引き付けることは出来るよね！

思い立って直ぐ、私は隣を静かに歩いていたアシユールに向き直った。足を止めた私に気づいて、アシユールもこちらを振り返る。小さく首を傾げるヤツを見据えて、私は言った。

「アシユール、今から私が十歩進んでから、歩いてきて」

十歩も離れて歩けば、私への視線も逸れるだろう。これで、私がシンデレラの姉から弁慶になりかけていたのも回避できるというものだ。

いい考えにホクホクしながら、私はアシユールの返事を待つことなく歩き出した。

しばらく歩いてからチラリと振り返ると、ヤツは律儀に十歩ほど後ろを歩いていた。

うん、私、アシユールのそういうところは好きだよ。素直でよろしい。

視線から解放されて上機嫌だった私だけど、それほど歩かないうちに違和感を感じた。

何か背後に気配が……。

「……。っ!!」

振り返った私は思わず悲鳴を上げそうになった。

アシユール！ 何でそんな真後ろにいるのッ!!？

さっきまで十歩の距離をきちんと保って歩いていたじゃないか!!

思いつきり跳ねた心臓を宥めて、心持ち上がった息も整えてから、アシユールを睨む。ヤツは“どうかしたのか？”みたいな顔でこちらを見てきた。こっちの台詞だ。

「アシユール……。十歩後ろをついてきて、って私、言わなかった？」

死ぬほど驚かされてイラッとはしていたけど、冷静に聞いてみる。ちよつと引き攣り気味でも笑顔まで浮かべて優しく聞いてやったっていうのに。

「……」

アシユールは暫く沈黙した後、徐に私の足元を指差した。おもむろつられて視線を向けると、今度はアシユール自身の足元へ指先を持っていた。

だから何なのよ。

訳が分からなくて、問うように視線を上げたら。ヤツの顔は小憎たらしい片頬笑いに歪んでいた。

おいコラ。だからその顔は何なのか、と。

「……………」

完全に笑顔を凍りつかせる私に向かい、アシユールが何か言った。芝居がかった困り顔を見ていて、何となく意味がわかった。きつとこつだ。

“足の長さが違うから、気づいたら追いついてた。悪いな”

で、間違いない。

言葉の意味に気づいた私を察したのか、さらにヤツはフツと鼻で笑った。

……。

顔はやめてボディにするから。

一発お見舞いしてもいいですか？



## 九夏 誘蛾灯の有効活用（後書き）

少し変えてありますが、最後の方のフレーズに気づく方はいらっしゃるだろうか。

私もリアルタイム世代ではないのですが……。



## 十夏 第二ラウンド、街！

もう怒った！

足の長さが何だっていうんだ！

そんなの長くなくても歩けるし！ 走れるし！ 全然問題ないし！！

アシユールの人を小馬鹿にした態度にキレた私は、ヤツに鋭い視線を浴びせてから無言で勢いよく前に振り返った。

アシユールがそういう態度なら、受けて立ってやるうじゃないか。私の競歩力を舐めるなよ！

既に私の頭からは、アシユールが引き寄せる人の群れのことなどすっかりさっぱり消え去って、ヤツが“私が悪かったです、どうかゆつくり歩いてください”と頭を下げる姿を見てやるうじゃないかという気持ちで一杯だった。

私の足の長さを莫迦にしたこと、そのお綺麗な額を地に擦り付けて謝るがいい。

鼻息も荒く、大股で歩き出した私。暫くして止まっていた大勢の足音も動き出したところを見ると、アシユールも歩き始めたらしい。相変わらず誘蛾灯のような男だ。そんなヤツが、私の競歩に付いて

来れるのかね！

真夏の日差しが照る中、そのまま必死に歩き続けた（あくまでも歩いてた）んだけれど……。

「うひゃあー！」

後ろの様子を窺おうと振り返ったら、アシユールのヤツが普通に斜め後ろを涼しい顔で歩いていて、私は思わず奇声を上げてしまった。もう、何なの！ 近いし！

「ア、ア、ア、アシユールッ！！！」

「……」

怒り心頭で怒鳴ったら、ほんの少しの間を置いてから、ポンッと私の肩に大きな手が掛けられた。

何だこの手は。

睨む眼力を緩めずにいると、アシユールはそんな私を見て……、ふっと笑った。妙に優しい微笑みだった。それはもう、慈悲深い聖女マリア様も尻尾を巻いて逃げ出すほど慈愛が籠もっているような。

シンデレラの次はマリア様かよ！

という突っ込みは、ヤツの笑顔の眩しさに捻<sup>ひね</sup>り潰された。……よ  
うな気がする。

アシユールの白金の髪は太陽が反射し、何故か後光が差しているようにも見える。銀河の瞳を細め、唇で綺麗な三日月を描いて笑う

様は、どんな時代のどんな名のある画家も絵に描くことなんて出来ないほど神々しく　　って、何を賞賛の言葉を垂れ流している、私！私の好みはあくまでもヤツの描いた濃紺髪のインテリ眼鏡である。こんな、シンデレラやマリア様を彷彿とさせるようなお綺麗な男ではない。騙されるな、私。

大体、良く見る。アシユールの目を見ていれば、その綺麗な顔に隠された本音が見えてくるじゃないか。ほら、集中すれば、ヤツの心の声が聞こえてくる。

“　そう睨むな。足の長さは変えられないからな。生まれ持ったものとはいえ悲しいものだ。　　フツ”

そう、目が言ってるじゃないか。

目が……、……。　　ホント、銀河の瞳は感情を伝えすぎだ！　私の足が何だって！？

ああもう、本気で怒った！！　　今度こそ本気で怒ったからね！！！！

私は思いつきり肩に置かれたヤツの手を払い落とす。足が長いからってそんなに偉いのか！

「　もういいから、アシユールは十歩後ろから近づいちゃ駄目！！　わかった！？」

怒る私をアシユールは不思議そうに見下ろしてくる。アシユールの気持ちは伝わってくるのに、私の気持ちは伝わらないらしい。言葉は逆のはずなのに、何でだ。

もう一度歩き出し、何となく嫌な予感に直ぐに振り返ってみると、何故かそのまま付いて来ているアシユールの姿があった。人の話を聞きなさいよ。

「付いて来ちゃ駄目！」

叫んでから、言った言葉の意味に気づいて焦る。

“付いて来ちゃ駄目”って……。我ながら、幼稚なことを言ってしまった。付いて来てもらわないと困るのはこっちだ。

「いや、だから、付いて来なきゃ駄目なんだけど！　　十歩以上近づかないように、付いて来て！」

怒鳴るように告げて、私はきょとんとしているヤツを置き去りにして足音荒く歩き出した。今度こそ、闘牛並みに突き進む。角は無いのに目の前の人たちが左右に割れていくのはどうしてだろう。このときの私は、自分が般若や阿修羅や仁王の顔を持つ母の娘だということに気づいていなかった。

だけどこれならヤツもついては来れまい。あ、いや、十歩後ろからは近づけない、ってことだよ？

そんなことを思いながら意地になっていた私は母の娘であること以外にも気づいていないことがあった。アシユールが背後でクスリと笑ったことも、いつの間にか私の後ろから姿を消していたこともだ。

どれくら歩いた頃か、横に並ぶ気配もないことからアシユールもついに歩く早さは足の長さだけで変わるものじゃないとわかったかと得意気に振り返った私は、後ろに広がる景色を目にして愕然とした。

いつの間にか、あれほど居た人の山はすっかり無くなり、アシユールさえも姿を消している。

「え？」

驚いて、慌てて立ち止まり辺りを見渡す。何度見ても人垣なんて綺麗さっぱり見当たらない。アシュールの姿があれば当然、人だかりだって出来ているはずなのにどこにもそれが無いということは、もちろんアシュールがいないってことだ。少なくとも、私の目の届く範囲には。

そのことに気づいて、呆然とする。

そんな、アシュールが付いて来れないほど複雑な道を歩いていたわけでもないのに、どうして？

半ば駆け足気味になっていたとは言え、アシュールが付いて来れないはずがない。それとも、少し離れて歩いていたはずの人垣に吞まれたとか？

うつん、それだったら人の塊が何処かにあるはず。でも、それも見当たらない。

意地になって歩いた所為で早まった鼓動が、別の理由でドクドクと音を立てる。

何処に行ったの……？

お互いにいい年した者同士なのに、逸<sup>はぐ</sup>れてしまうなんて。そんな莫迦な。

私は暫く呆気に取られていたけど、そんな場合じゃないと慌てて走り出す。早く見つけ出さないと。

「アシュール　！？　何処にいるの　！！」



## 十夏 第二ラウンド、街！（後書き）

意地っ張りな六花、消えたアシユールにびっくり仰天。

この十話・十一話の舞台裏であるアシユールサイドを、番外あたりで書ければなあ、と思います（希望）。

## 十一夏 迷子の迷子のマリア様

アシユールの姿が見えなくなって、私は大いに慌てた。

私としたことが、本当にムキになりすぎた。アシユールの挑発するような態度について乗せられてしまったような気がする。普段の私はここまで大人げないことなんてしないのに、アシユール相手だとどうにも対抗心がムクムクと湧いて来てしまうのだ。どうしてだろう？

でも考えてみるとこれもそれもアシユールの所為な気がする。私の行動も大人気ないけど、アシユールだってよっぽどだね。

そもそも人のささやかな悪戯にわさびで仕返しをしてきたのが悪い。あれは本当に死ぬかと思った。体中からいろんな汁が出たし。

その後だって、川に投げるは、お説教中に置き去りにするは……。大概だよねえ？

わざと私の神経を逆撫でして楽しんでるんじゃないかと思うくらい、あの人だって対抗してきている。今思い出してもちよっとムカつくくらいだ。

でも。

今回ののは、本当に私が悪い。それはわかってる。

「アシユールッ!!」

私は必死にアシユールを呼びながら、まちなか街中を探し回った。人の視



線が気になったけど、そんなことも言っていられない。

アシユールは今きつと、一人で困り果ててる。不安にだって思ってるかもしれない。

だから早く探してあげないと。

実は今でも私は、アシユールが本当に異世界から来たかどうかについては半信半疑だ。常識的に考えれば有り得ないと思う。

だけど、たとえ異世界から来たんじゃないとしても、アシユールが日本に不慣れなことは確かだ。

時折口にする母国語らしい言葉は、英語でもドイツ語でもフランス語でもない。おおよそ、私が今まで耳にした言語の発音とは違って聞こえるんだ。それを考えると、少なくとも私の知らないところから来たのは間違いないと思うんだ。

どんなに馴染んでるように見えても、新しいことに触れたときのアシユールの反応には戸惑いがある。梅干なんかは特に独特のものだろうけど、自転車を見せたときを思い返すと苦笑するしかない。乗って見せれば目を丸くして、そう簡単に乗れないとわかると少しムツとしていたつけ。

「アシユール、何処!!!?」

実はアシユールは白い食べ物があまり得意じゃないということも、私は知っている。御飯やお豆腐を食べるときはあまり噛まずに飲み込むんだ。笑っちゃうよね。苦手なら正直に言えばいいのに、絶対そんなことを顔に出さない。少なくとも私以外は、気づいてないと思う。

私は和食が好きだけど、アシユールにとってそれは故郷の味じゃないはずで。もしかしたら、食べる度に自分の国を恋しく思っているかもしれない。

そっという部分をあまり外には出さない人だけど、誰だって、何年

も暮らしていた場所を意図せず離れるのは恐ろしいし、全く文化の違うところでは心細い思いにも駆られると思うんだ。

そんな不慣れな人を、街中で一人にしちゃうなんて。

「アシユール、何処にいるのよ!!」

炎天下の中を走り回って汗が噴出す。額に張り付く髪を掃って、私はまた走り出した。

私だって、初めて実家を離れて大学に行くことになったときは、すごく不安だった。街に出れば、見たことのない景色に方向感覚もわけがわからなくなっって、何度お巡りさんに道を尋ねたか。もちろん道行く人にもだけど。

でもアシユールは日本語が喋れない。道を聞きたくても、言葉を話せないんじゃないだろうもない。そもそもアシユールには目的地を言っていないから、日本語を喋れても尋ねようも無いし、私のことだって説明できないだろう。

だから、この場所でのアシユールの頼りは私しかいなかったのに。

ああもうホント私ってば、ムキになるのにも限度があるでしょ!

自分に罵声を浴びせつつ、目立つ白金の頭を探す。ついでに、人だかりもあつたりしないか目を皿にして探した。

それでも一向にアシユールは見つからなくて、私は一度立ち止まり、ぐるりと辺りを見渡して来た道の方も確認する。アシユールのきらきらしい姿は何処にもなかった。

ああもう! 迷子の鉄則は無闇に歩き回らないことなのに!

どう考えても、アシユールが動き回らなければこんなに見つからないなんてことはない。一体何処に行っちゃったんだ、アシユールめ！

これ以上何処をどう探したらいいかわからず、途方に暮れながら上がった息を整えていると、突然後ろからポンツと肩を叩かれた。

「！」

慌てて振り返ると、そこには死ぬほど探していたアシユールの姿があった。

「アシユール！ 何処行ってたの！？ よかった……！」

思わず両腕をがっしりと掴むと、アシユールは驚いたように目を丸くした。いや、驚いたのはこっちだし。いきなり後ろから現れるなんて。

「もう、どうして逸れちゃったの！？ そんな複雑な道を歩いてなかったでしょう！？」

勢い込む私にアシユールは少し身体が引き気味だ。まったく、何よその態度は。散々心配を掛けておいて。って、悪いのは私が。ごめん。

「とにかく、ホントよかった。……ごめんね、アシユールのこと考えずに突っ走っちゃって。慣れない場所なのに、私が一緒に居なくちゃアシユールも困るっていうのにさ。まさか逸れちゃうなんて思わなくて……。今回は私が全面的に悪いや。本当、ごめん。」

今度からこんなこと無いように気をつけるから。一人にしてごめんね？」

重ねて言うと、さらにアシユールは驚いたような顔になった。だから、何をそんなに驚くんだ。まさか、私が素直に謝るのがそんなにおかしいのか。私だって、ちゃんと自分が悪ければ謝るつつうの。マリア様なら寛大な心で許してくれるよね？

アシユールが何だかバツが悪そうな顔をしているのが気になったけど、とにかく見つかってよかったと、私はホッと胸を撫で下ろした。

「はあ、もう、どうなることかと思った。もう暫く探して見つからなかったら交番行くとこだったよ。見つかってよかった。

今度こそゆっくり歩いて行こう」

そう言って笑いながらアシユールを見上げたら、何故かくらりと目の前が歪んだ。

あれ？　なんか、これって、ブラックアウト……？

死ぬほど探したと言ったけど、まさか本当に死ぬとかないですよね……？

十一夏 迷子の迷子のマリア様（後書き）

六花は反省できる子です。

アシュールは一体何処にいたんだろうか？

## 十二夏 異世界人の献身

少しずつ意識が浮上した。

なんだか首筋が冷んやりする。あと、脇のあたりも。

気持ちいいなあ、と思いながら薄っすらと目を開くと、ぼやけた視界に妙にキラキラしいものが映った。

眩しいぞ、太陽。

とか思っていたら、その太陽は何故か徐々にこちらに近づいて来る。

何だコリヤ、と思った次の瞬間やつと焦点が合った。眼が捉えたものは当然太陽なんかじゃなく、私は慌てて両手を翳した。

「ッ！」

あ、危なかった……！！

キラキラ発光体の正体 アシユールの顔が、私の顔から僅か数センチのところに迫っていた。

咄嗟に両手でヤツの口を塞がなければ、危うく私のそれにぶつかっているところだ。見開かれる銀河のように深く吸い込まれそうな濃紺の瞳がごく近い。さらりと降る紗のような白金の髪が私の頬に掠り、指先にはアシユールの冷たくしっとりとした唇の感触がダイレクトに伝わって、……伝わって……？

うひゃあ！ 何何何なにになになにつ！？

きょとんと目を瞬くアシユールと冷や汗をダラダラ流す私の目がカチリと合わさって、体勢を崩せないまま凝固する。それから数秒の間があつた。

えーっと、この状況は一体……！

気づけば私は木陰のベンチに横たわっていた。しかもアシユールの膝枕的な感じで。頭の下が固いです。お母さん。

いまだに私に覆い被さるようにしているアシユールと、動揺のまま固まり続ける私。な、何をどうしたらいいんでしょうか、お母さん！

私は心の中でひたすらアワアワと叫ぶだけ。実際には“うん”とも“すん”とも声が出ない。あまりに驚きすぎて！

そのまま私たちの間には妙な沈黙が流れて、何がどうなつてこうなつたむしろこの先どうしたら、とぐるぐると寝起きのような鈍い頭を回転させていると、暫くしてアシユールがゴクリと喉を鳴らした。……何を飲んだ？

手を離したらアシユールがそのまま倒れこんできそうで身体を動かすことができず、視線だけそろりと巡らせると、アシユールの手には私が実家から持ってきた保冷カバー付きのペットボトルが握られていた。さらに私の脇の辺りにはもう一本のペットボトル。こちららは保冷カバーが外されている。さっき脇が冷たいと思つたのはコレのお陰らしい。なるほど。

「……」

「……」

「……オツケーわかった把握したアイアンダースタンディッドナウなのでちょっと離れようかアシユールさんオーケー？」

ノンプレスで意味のわからない言葉を垂れ流し、アシユールを押しやる。アシユールはあっさり身を起こした。

……。

そんな簡単に起きられるならさっさと離れてくれればよかったのに！ 心臓に悪すぎる。

跳ねる心臓を宥める暇もなく、私もアシユールのかつたい腿から起き上がろうと……したんだけど、押し戻された。なんか問答無用な感じで。肩を押された反動で後頭部をアシユールの太腿に強打したんですが。痛い……。

何すんの、とアシユールの顔を見たら、文句があるのか、とでも言わんばかりに見下ろされてしまった。

何その威圧感。怖いんですけど。

それでももう一度起き上がろうとすると、それを察したアシユールに肩を押さえつけられた。肘から先で両肩を押さえ込まれては上体を起こすことなんて出来ない。さらにヤツはこれ見よがしにペットボトルに口をつけ、拳句になんとドリンクを口に含んだまま少しずつ私に近づいてくるじゃあないですか。

これは脅しですねそうですねわかりますわかりましただからやめてくださいゴメンナサイ。

アシユールの本気の目に、私は慌てて両手を上げて降参のポーズをとった。

動きません起きませんからそれ以上近づかないでくださいお願いしますすつ。



諦めた私を見て何故か満足気なアシユールにほんの一瞬殺意が湧いた。乙女を脅迫するとは何事だ。

しかし卑怯にも脅されたので仕方なくその体勢を維持しつつ、気になっていた首筋へと手をやる。そこには水で濡らしたハンドタオルが巻かれていた。

これってやつぱり、あれだよな。私つてば、十中八九軽い熱中症で倒れたってことなんだろう。

今日も暑かったし、炎天下の中アシユールを探して走り回った所為で、急激に体温が上がってしまったのかもしれない。

でもこれも自業自得だ。アシユールを逸れさせちゃったのは私だもん。

アシユールは倒れた私を介抱してくれていたんだろう。つくづく今日は申し訳ない。

さっきのも、ペットボトルに入っていた冷たいスポーツドリンクを飲ませようとしてくれていたんだと思う。私は意識がなかったから、その、……口移しの、アレで。ソレはアレな感じが……。

アレだから仕方ない。うん。……何を言っているんだ、私？ いまだに動揺から抜け出せていないなんて、私ったらどこの乙女さん！ しかし普通は驚くでしょう！？ 目が覚めていきなりキラキラしいものが迫ってきたら！

キラキラしいものが……。

……。

ああああもうつ。

あと一歩早く目覚めるか、遅く目覚めるかのどちらかにしてほしかったよ！

よりによって直前とか……。恥ずかしすぎて憤死する！ せつか

く落ち着いた体温だつて急上昇しそうだ。そういえば川遊びのときも似たような　　って、アレは思い出しちゃ駄目だ。余計恥ずかしくなる！

唯一の救いは、今顔が赤くても熱中症の所為にしてしまえるってこと。多少の体温の上昇もまだ具合が悪いのだと思ってくれるに違いない。……それでも恥ずかしいものは恥ずかしいんだけど……。

ところで、この体勢はいつまで続けなくちゃいけないんでしょうか、おか（略）。

見た目はともかく気持ちの動揺を悟られないよう、手の甲を目元に当てて顔を隠すようにしていると、突然前髪が払われ、次いで額にひんやりとしたものが触れた。反射的に翳した手を外す。額にはアシユールの大きな手が乗せられていた。

ちょうど熱を測るような形で置かれた手はさっきまで冷たいペットボトルを握っていた所為か冷たくて、火照った額に触れると本当に気持ちがいい。手も大きいから私の額なんてすっぽりと隠れてしまう。それどころか目元まで覆えるんじゃないか、ってくらいだ。

大きな手は決して柔らかいというわけでもなく、肉刺まめのような硬い感触もあったけれど、何より冷たさがあんまり気持ちよくて思わず目を閉じた。気持ちいいな……。

これはいいやとちよつと笑ったら、頭の上の方からもふつと笑うような気配がした。……いや、笑った、のかなあ……？　なんだか吐息のようにも聞こえた気がしたけど、目を瞑ってしまったている私には生憎判断がつかなかった。

でも、どっちでもいいや。だつてすつごく気持ちいいし。

木陰だからか時折涼しい風も吹いてきて、その心地よさにいつの

まにか騒がしかった心も凪いで来る。アシユールも私も何も喋らず周りの喧騒も遠退いて、時間がゆったりと流れているように感じた。そういえば、今日の午後はこんな風に涼しい場所でのんびり過ごす予定だったんだよね。アイスを齧ったりなんかして。それが今は大分おかしいことになってしまったけど。

なんてぼんやり考えていると、額の手がするりと外されてしまった。

ああ、気持ちよかったのに……。

名残惜しく思ったけど、また直ぐにアシユールの手は戻ってきた。反対の手に変えたのか、また少し冷たさが増していて、そのひんやり感にホッ息をつく。極楽極楽。

快適な状態に浸っている私の横でこそごととバッグを漁る音がした。それでも気にせず目を閉じていると、頬や首筋を軽く拭われる感触がして驚いた。どうやらさっきのごそごそはもう一枚入っていたハンドタオルを取り出していたときの音らしい。

……。

……なんか妙に優しいな、アシユール。

そう思ってしまうのは、私が捻くれている所為？ 病人だから優しいだけ？

でもなんか下心がありそうだ（変な意味じゃなくて）とも勘繰ってしまふ私は、性格が歪んでるんでしょうか。

そうじゃなくても、素直にされるがままでいいんだろうか。

何だか物凄く丁寧に扱われている気がする。

しかも、アシュールの放つ空気がこう……なんて言うか……。

妙に甘ったるい空気が流れ始めたようで、私は比例するように徐々に居心地の悪さを感じ始めていた。

## 十二夏 異世界人の献身（後書き）

後ろめたさの解消という下心が御座います。

### 十三夏 誘蛾灯の裏技

あんまりのんびりしているわけにもいかなくて、私たちはそれから直ぐ目的地に向かうことにした。

決して。

決して、甘い雰囲気になれそうになって慌てたとかではないぞ。

アシユールは起き上がる私をなおも押し戻そうとしたけれど、丁重に時間が無いことをお伝えしたら、わかってくれた。

決して。

決して、私の真つ赤な顔の理由に気づいて折れてくれたわけではないと思うぞ。……と、信じたい。

倒れる前の惨状を学習した私たちは、ゆっくり並んで歩いて目的地を目指していた。

私ってばやれば出来る子。ちゃんとアシユールに対抗心など燃やさず、静かにしていることだって出来るのだ。

「……………」  
「……………」

だけど、冷や汗が止まらないのは何故でしょう？

答えは明白。

横で歩くアシユールが今まで感じたことが無いくらい不機嫌な雰囲気を出して、その覇気が半端じゃなく私に重圧を与えているんだ。何コレ、本気で潰れそう。

心なしか、半径20メートル圏内の道行く人たちも踏み出す足が重そう。いや、よく見るとむしろ私より離れた人の方が、何だか辛そう。顔色が悪い人までいるのは、まさかアシユールの不機嫌オーラの所為なんだろうか。そこまで影響を及ぼせるオーラって一体。

とにかくアシユールが怒っているのはわかるんだけど、何がそこまでヤツの逆鱗に触れたのかはさっぱりわからない。木陰から出てから特におかしなことはしていないし、不快にさせるようなこともしていない。……と、思う。ただ歩いていただけだし。

私の横で黙り込んでいるアシユールをそろりと見上げると、昨日私によって川に突き落とされたときよりも遥かに恐ろしい眼力<sup>がんりき</sup>で前を見据えていた。

え。ホントこれ、何の拷問？ アシユール、目が据わってるんだけど。

横から放たれるそのあまりのプレッシャーに耐え切れなくなった私は、決死の覚悟でアシユールの袖を引っ張った。どうにかしないとマジで死ぬ。

私は“逆らう気はないので殺さないでくれ”と内心白旗を揚げながら、顔を覗き込んだ。

「……アシユール、何か怒ってるの？」

恐る恐る話し掛けたら、ギロリと銀河の瞳に睨まれ、一瞬怯む。ちよー怖い。

だけど、その濃紺の瞳を見ていたら、その奥には何か不自然さがあるような気がして私は思わず首を傾げた。

あれ？ 怒ってたくない……？

その鋭さとは裏腹に、濃紺の瞳に散る銀の虹彩は穏やかに瞬いていた。器用だな。……いやいや、そうじゃなくて。

放つ覇気は半端なく重いけど、瞳に怒気がないんだ。おかしいことに。

つまり、これって怒ってないのに、怒ってる振りをしているっていうこと？

何それ、何か意味あるの？

わけがわからずポカンと濃紺の瞳を見つめていたら、何故かそんな私を見たアシユールも驚いたように少しだけ目を見開いた。……わけわからん。

混乱しつつ眉を寄せて首を傾げる私を見て、アシユールはその瞳に今度はどこか面白がるような色を乗せた。……だから、わけわからんって。説明しろよ。

私がちよつとイラツとした（短気すぎるとか言わないで）のに気づいたのかそうでもないのか。わからないけどアシユールは一度そのだだ漏らしていた覇気を引っ込め、妙に優しい顔で笑った。その瞬間、ふわつと光が散ったように見えた私は、眼科に行くべきでしょうか。

アシユールがあんまり綺麗に笑うから、思わず動揺して視線を逸らしてしまった。えつと……。こんな乙女な反応、誰も期待していませんよね？ 誰より私が期待していませんよ。

これはアレだ、決してアシユールにときめいたとかいうわけではなく、完璧なまでに美しいものを見て自分の欠落具合に恥じる、



的な。……苦しいか。

とにかく怒ってないならいいよね。うん。だから、今日はもうアシユールの顔は見ないことにする。何で怒った振りをしているのかはもう聞かない。硝子のハートがもちません。

私が決意を固めていると、とんとんと指先で肩を叩かれた。思わずアシユールを見上げてしまい、内心がつくりと肩を落とす。さっきの私の決意は何処へ……。

アシユールは、つられた悔しさに唇を噛む私を不思議そうに見ていたけれど、気を取り直すようにすいっと周りを指し示してみせた。何だろう？ とつられて視線を投げると、なんと、いつのまにか人がわらわらと増え始めているじゃないか。そういえば、さっきまでは街に出たときが嘘のように私たちの周りには人が疎らだった。これって、どういうこと？ 啞然として周りを見渡していると、またしても急に私の身体がずしりと重くなった。アシユールめ。

またか、と思うよりも早く、周囲の光景を見て目を瞠る。さっきまで集まりつつあった人山が、瞬く間に散っていくのを目の当たりにしたからだ。

すごいな、これがまさに蜘蛛の子を散らすように、と言うやつ？

しかも、また身体への重圧　アシユールが怒気を引っ込めると、暫くして徐々に人が寄ってくるではないか。

これって……。

嘘みたいな光景に驚きを隠せず呆然とアシユールを見上げたら、くすりと笑われてしまった。

要するに、アシユールが怒気というか、覇気のようなものを発散するとその威圧感に負けて人が近寄らなくなるんだ。まさに、虫除けスプレー状態。例えば悪いけど、そういうことだよな？

さっきまで誘蛾灯だと思っていた人が逆の効果を発揮するなんて。

ホント、ハイスpekですね。

人ってそんなこと出来るんだ……？　なんて、未だに思考停止状態の私の手に、するりと巻きつくものがあつた。それは少しひんやりとしていて、ちよつと硬い。

アシユールが私の手を掴み、引つ張るようにして歩き始めた。

再び覇気を発散しながらだつたけれど、私の手を握るアシユールの肉刺<sup>まめ</sup>のある手は優しくて、やっぱり怒気はフェイクなのだ実感する。

倒れる前に私が周囲に集まる人ばかりを嫌つて離れて歩いたから、こんなことをし始めたんだらうか？

理由はわからないけど、視線の矢が降り注がなくなつて随分歩き易くなつたのは確かだつた。

私の手を引き、重たい覇気を放つのは別にアシユールの背中はどこか上機嫌な気がする。手を引かれ、楽しげな背中を見ながら、私は思つた。

目的地の場所、分かつてるんでしょうか　？

### 十三夏 誘蛾灯の裏技（後書き）

二人が遭遇してまだ二日目です。  
たった一日が大忙しのやつらです。

#### 十四夏 見返りは頂戴します？

結局、率先して歩いていったアシユールは途中で自分は目的地を知らないという事実に気づいて立ち止まった。だから言ったというのに。いや言つてはいないか。

仕方なく選手交代で私が先に立ち、目的のビルを目指して歩いた。その間、何故か手は離してもらえなかった。たぶん逸れるのが怖かったんだろ。全く子供みたいなヤツである。

私たちはビルの3階までエスカレータで上り、少し迂回して目的地のお店に到着した。

#### 『ルブレクス』

私が結構気に入っている紳士服ブランドだ。爽やか系やシックなものが多い。ほとんどなんだけれど、所々にブランド特有の小さなアクセントが効いていてシンプル過ぎないようにデザインされているものが多い。

どうしてもこのブランドじゃなきゃ駄目、ということもなかったけど、まあ私も紳士ブランドに詳しいわけじゃないし、知っているところの方が無難かな、という守りに入った結果である。

でも実際、アシユールにはこのブランドは合うと思うんだよね。あんまりゴテゴテ着飾らなくても元が良いんだし、正直Tシャツにデニムとかでも十分だと思う。……しまった普通に褒めてしまったチクショウメ。

それにしても、ここまで来るのに随分時間が掛かったように感じるのは私だけだろうか。思い立ったが吉日とは思ったけど、アシユールと出かけるのは本当に大変だと身をもって知った気がする。誘蛾灯の一件だけじゃなく、昨日も含め色々。まあもう終わったことはいいんだけどさ。

気を取り直してお店に入ろうとすると、何故かぐいっとアシユールに腕を引かれた。危なっ。

「な、何っ？」

たたらを踏んで振り返ると、何故か真剣な顔のアシユールがいた。……今度は何よ？ スツと買い物しようよ。それでチャッチャと帰ろうってば。

またしても何か問題が起きそうな気配に、内心ちよつとだけ（いや結構）ぐったりしながらアシユールの様子を窺った。

「……………」

アシユールは軽く首を左右に振りながら何かを言った。

何だろう？ 正直、言葉はさっぱりわからないので感情以外の細かいことはジエスチャーが頼りなのに、首を振られただけじゃ“何かを否定している”くらいしかわからん。

「なんか嫌だった？」

聞くとまた首を振った。嫌ではないらしい。……じゃあ何だ。

アシユールは首を捻る私を見て困ったように軽く吐息を零した。

溜息吐きたいのはこっちなんですがね。

お腹の底でまたしても対抗心がモゾモゾしだして、私は慌ててこっさり深呼吸をした。ホント私、学習しているんです。アシユール

に対抗心を燃やしてもイイことなんて何も無いって、よくわかったもので。

「どっか具合が悪いとか？ それともお腹空いた？」

優しく、ゆっくり、冷静に聞く。子供に対応するみたいになってしまったのは、来る途中のヤツの行動がまだ意識下にあった所為かもしれない。

だけど、アシユールは私の言葉にまたしても首を横に振った。もう何なの。さっぱり検討がつかないんだけど。

困り果てていると、ヤツはショップの服を指差し、次いで自分を指し示して首を傾げた。その仕種の言いたいことはわかった。

“あの服は俺にか？”

的なことが言いたいんだろう。細かい部分はわからないけど。とにかく私はアシユールに頷いて見せた。

「そうだよ。アシユールの。お父さんのお古ばっかりじゃ嫌ですよ？」

「……………」

当然だろうと思いつながら聞いたのに、アシユールが再度首を振って、たぶん否定の言葉を口にした。

……………。

あー、そういうことね。

アシユールがショップに入りたがらない理由がなんとなくわかった。

要は、遠慮しているんだよね、服を買ってもらうことに。そうじゃないければ、わざわざお父さんのお古でいいとは言わないでしょう。

どう考えてもサイズが合っていないんだし、着心地だっていいとは言えないと思う。そんなのをいつまで続くかわからない生活の中でずっと着続けていくのは本当は嫌なはずなのに。

変なところで謙虚だね、アシユールって。いやまあ、気持ちはわからなくもないけど。

私だって、見知らぬ土地で面倒見てもらってる人に住まいと食事だけじゃなく、服まで与えられたら遠慮すると思う。しかも新しいのを買うとなると。

だとしても、ここは無理にでも買わせていただくつもりだ。

だって正直、お父さんの服とかアシユールには合って無いし。見られないし。いつ帰るかわからないけど、夏だからそれなりに着替えもいるだろうしね。

むしろ私が帰省するまで一週間もあったのに、ずっとお父さんのお古だったという事実の方が居た堪れないよ。私としては。もしかしたら今みたいに、遠慮して押し切ったのかもしれないけど、私は押し負かされないからね！

幼馴染から要らない服をもらうことも考えたけど、大学進学とともに色々整理していたのを知っているから、そんなに沢山不要な服があるとは思えなかったの、やめた。

新しい服を色々揃えとなると結構お金も掛かりそうだけど、今年の春休みはしっかりバイトして稼いだから貯金もそれなりにあるし、目の前のブランドはそんなにバカ高いつてわけでもないからアシユールの服を買うことに何も問題は無い。

アシユールが躊躇する理由がわかって、しかも大した理由じゃなかったので私はホッとした。これでまたひと悶着、なんてことになったら明日は一日絶対動かないデーになるところだった。

「何か遠慮してるみたいだけど、別にタダで買ってあげるわけじゃないから気にしなくてもいいよ」

私が笑ってそう言うと、アシユールはほんの少し眉を寄せて首を傾げた。遠慮するなら見返りを頂戴すれば文句はないだろう。

「もう少し先だけど隣町で花火大会があるから、それについて来てよ」

花火大会はお盆の後で、今日から数えるとまだ一週間以上ある。アシユールがそれまでウチにいるかはわからないけど、わからないからこそそれでいいと思った。服を買うのは私が勝手にそうすることだし、別に本気で対価を欲しいとは思わないから。

それに、守れないかもしれないけど、一つ約束があればアシユールも無償で与えられるばかりじゃないと思えるだろう。

だけどそんな条件を出してもまだアシユールが戸惑った様子なので、さらにもう一つ追加しておくことにした。私って優しいな。

「あと、アシユールが自分の世界に帰って、万一もう一度ウチに来るようなことがあったら、そのときに何かアシユールの世界のものを持ってくる」

にんまりと笑いながら私は言った。これも花火大会と一緒に、守られる保障なんて無い。むしろ花火大会よりも可能性は薄いと思う。そもそも今回こちらの世界に来たことだって不慮の事故っぽいし。二度同じことが起こるなんて奇跡以上じゃないかと思う。

だけど、本当にアシユールが異世界人なら、あちらの世界に帰ってから私との約束を守るために何かを用意して、それをいつも持ち歩いていたら……面白いと思わない？

「もちろん、ウチの家族全員分ね？」



お父さんにお母さん、孝太の分もとなると、結構大変だと思う。でも4人分のお土産を肌身離さず（いつこちらの世界に来ることになるかわからないからね）持っていれば、アシユールはきっと毎日私たちのことを思い出すだろう。そんなことをしなくても忘れられないくらい貴重な体験だったとしても、思い出す頻度は格段に上がるはず。

アシユールは意外に義理堅く、律儀で謙虚なところもあるヤツだから、無理に恩を売るつもりはないけど、そうやって時々思い出しにくれたら、アシユールに懐いているウチの家族も報われるだろうと思ったんだ。

ああなんか、結構私も絆されているなあ、なんて思う。アシユールに会ってたった二日。でも、なんとなく心底悪いヤツでもないんじゃないかと思いつめていた。

こうやってアシユールはウチの家族を落としたわけか。ホント小癪なヤツである。

「そうだなあ、一人につき二つずつくらい、用意しといてね！これで満足？」

「……。――――」

意識してニヤニヤしながらアシユールの顔を覗き込むと、アシユールは一瞬呆気にとられたように目を瞬いてから、次いでパツと弾けるように破顔して笑った。

十四夏 見返りは頂戴します？（後書き）

たった二日。されど二日。濃密な二日。です。

### 十五夏 第三 小ラウンド、駅！

結局、ルブレクスではポロシャツなど、上三着、下二着を購入した。

アシユールが全開の笑顔を見せた（周辺で数人バタバタと倒れる音が聞こえたのは空耳だと信じてる）その後また不機嫌な振りを始めたから、人が押し寄せるなんてこともなく、ルブレクスでは概ねスムーズに買い物が出来た。

ただ、店員さんがアシユールのプレッシャーに耐え切れず笑顔が引き攣りまくっていたのが可哀相だったけど。実は怒ってないということを知ってる私はもう慣れた。虫除けになるので止めるとも言わない。店員さんごめんよ。

『カレシにプレゼントですか？』とか笑顔を引き攣らせながらもお愛想で聞いてきた店員さんに、何を言いやがる、とか思いながら『いいえまったくちがいます』と笑顔でハキハキかつ棒読みで答えたら、店員さんはさらに顔を引き攣らせて退散していったんだけど、何でだ？

「アシユール、次行くよ」

まだ買いたいものがある。

「……………」

また何か言ってる。だがわからん。聞く気もない。だって、たぶんまた遠慮の類だと思うんだよね。

「わかったわかった、花火大会と貢物よろしくね！」

一応そんな念を押してみたら、案の定アシユールは苦笑して諦めの溜息を零した。予想が当たっていたっぽい。遠慮のしすぎは鬱陶しいだけだぞ、アシユール君。

それから私たちは同じフロアの紳士服売り場を回って、少し安めのＴシャツを数枚買った。部屋着も必要だからね。あと下着もこっそり買っておいた。こればかりは目の前で買うのも買われるのも抵抗があるだろうから、こっそり、こっそりね。サイズはまあ、元カレのを参考に大体で。後でお父さんが買ってきたってことにしてもらおう。

正直、結構な量を買ったと思う。お金も使ったし。でも、私的には満足だ。

私がバイトをしてお金を貯める理由は、何も私自身が欲しいものが沢山ある所為じゃない。むしろあんまり物欲はない方だから一人暮らしのアパートだって殺風景なものだ。

じゃあ何のために貯めるのかといえば、八割方、交際費だ。去年は当時のカレシのためだったし、今は友達と遊ぶため（そこ、カレシいたのか、とか突っ込まない。いたのよ。いたんですよ。別れたけど！）。

外で遊ぶのに、全然お金を使わないで遊ぶのも結構好きだけど、何処かに行ったり食事をしたり、お土産を買ったり、そういうところでお金のことを心配をしたくないんだ。

思いつき楽しんでいたのに、お金が気掛かりで躊躇したり買えなくて気持ちが沈むなんて勿体無いじゃない？

遊ぶときは思いつき遊ぶ。削れるところは出来るだけ削る。そ

れが私の信条なのだ。

で、それがアシュールに一方的に服を買い与えることに何の関係があるのか、と。うん、尤もな疑問だね。正直、私も私の考える純粹な交際費とはちょっと違うと思う。傍から見たら……綺麗なヒモ男に貢ぐ冴えない女に見えるかも。大変遺憾であるが。

だけど、考えてもみてよ。今のところアシュールはあのお父さんが受け入れて、かつお母さんも弟も気に入っているウチの居候だ。そして、私の見立てでは、アシュールという人物は義理堅く、律儀で謙虚さもある。世話になっているからと率先して家事までやっているようなシンデレラ人間だ。

たとえそれが見た目にミスマッチでも。たとえハイスペックなアシュールにとつて、家事なんてものが大したことじゃなかったとしても。面倒で慣れないことを自分からやっていることは事実だ。

もしもそれが全部私たちを油断させるための演技だったら全く笑えないけど、でも現段階では騙そうとしている気配は無い。

ということは、アシュールが裏切りの様子を見せない限り、この人は家族のようなものだ。私はそう考えることにしたんだ。……いけ好かないけど。もう一度言おう。いけ好かないけど！……嘘じゃないよ！

そんなわけで、いつ何時帰ってしまうとも限らなくても家族同然なアシュールが、あんなサイズの合わない窮屈そうな服を毎日着ているのは見ていられたかったのだ。

私は小生意気な弟にもすっかりお土産を買ってくるような優しい姉なの。シンデレラの意地悪な義姉じゃなく。そんな私が家族同然の人間にお金を出し惜しみなんてしてどうするんだ、という話。たとえばアシュールのことを若干色々と疑いの目で見ているとしてもね。

自分の欲しいモノのために貯めたお金なら、きつと使ってしまう

ことを惜しいと思ったかもしれないけれど、元々は自分が楽しく気持ちよく過ごすために貯めたお金だから、家族のために使うのは全然勿体無いとは思わない。

万が一アシユールが明日帰ってしまったらすごい無駄になっちゃう気もするけど、そこはそれ。アシユールがいなくなって不要になったら、幼馴染にでもあげればいい。そして幼馴染からはしっかり見返りを頂戴すればいいのだ。あつはつは。

「アシユール、アイス食べながら帰ろ！」

実家の最寄り駅に降り立った私は、そうアシユールに声を掛けて手を引っ張った。ちなみにアシユールは行きと同様、逸れるのが嫌だったのかまたしても手を握ってきたので、仕方なくそのまま帰ってきた。荷物は全部アシユールが持つてゐる。押し付けたとも言っけど。押し付けなくても率先して持っただろうから問題ない。と、勝手に解釈している。

駅の中の売店で鼻歌混じりにアイスを物色する。もともと午後はアイスを齧りながらまったりする予定だったんだから、帰りに食べなくても罰は当たるまい。

「アシユールはどれにする？　これとか美味しいけど」

「……」

片手で食べられるパックに入ったアイスを示してみたけど、アシユールは首を横に振った。……また遠慮か？

「遠慮しなくていいってば。アイスくらい。ああ、それとも甘い物嫌い？」

大分呆れながら言ったけど、アシユールは笑って首を振った。じやあ何だ？

首を傾げていると、アシユールは両手をくいつと小さく持ち上げて見せた。服が入った荷物と、繋がれたままの私の左手が同時に上がる。

つまり、両手が塞がってるからいらないって？

「そんな手を離せばいいだけでしょ」  
「……………」

変な言い訳をしてるなあ、と思いながら繋がれた左手を離す。いや、離そうとしたんだけど…………、何故か手は外れない。

ぶんぶん振っても外れない。ぶんぶんぶん振っても外れない。ぶんぶんぶんぶんぶん(略)。

…………ちよつと？

何のマネでしょうか、アシユールさん。

「手え離してって」

ムツとしながら言う。相当不満げに言ったのに、アシユールは微笑して小さく首を傾げた。

…………なに今さら「ニホンゴワカリマセン」みたいな顔してるんだ、コイツは。

大体、電車の中でも無駄にずっと繋いでて暑いんじゃないやボケエエエ！ とばかりに私は激しくハンドをシェイクする。シェイクハンズじゃないよ、あくまでハンドをシェイクだよ、ハードにね！

しかし、頑固な汚れのごとくアシユールの手は離れなかった。瞬間接着剤でも隠し持ってたのか？

力の限り全力で振ってもアシユールは手を離してくれず、終いには、

「ッ！」

思いつきり繋いだ手が引かれ、私はアシユールの胸元辺りに鼻を強打した。後頭部の次は顔面かよ！ これ以上不細工ちゃんになったらどうしてくれる！ この黄金率ヤロウ！ ……。悪態が褒め言葉に聞こえる自分に幻滅した！

あまりの痛さに涙目のままアシユールを睨み上げたら、アシユールはにこにこ笑いながら……いや、ニヤニヤ笑いながら人のことを見下ろしてきなすった。

喧嘩売ってるんだねそうなんだね理解した！

ドスッ

キレた私は無言で目一杯の力を込めてアシユールのお腹を叩いた。もちろん拳で。しかし何故かダメージを受けたのは私だった。地味に痛い。腹筋硬すぎる……。この筋肉鎧め……。

学習したはずが結局売店でひと悶着起こした後、なんとか冷静を取り戻し棒付きアイスを一冊買って、やっと私たちは帰路についた。



途中、いらな<sup>い</sup>と言<sup>つ</sup>たくせにアイス<sup>を</sup>欲<sup>し</sup>がるので仕方なく分<sup>け</sup>てあげた私は、本気でマリア様<sup>ばり</sup>に慈悲深い素敵な乙女だと思<sup>っ</sup>た。

十五夏 第三 小ラウンド、駅！（後書き）

何がラウンドだ！ イチャついているようにしか見えん！ けしからんっ！

十六花 肴は月と盆栽で 一

夕ご飯もすんでお風呂上りの一杯（ただの水）を楽しんだ後、涼もつかない、どうしようかなあ、と考えながら歩いていたら、縁側に甚平を着た丸い背中を見つけた。

「あれ、お父さん」

声を掛けると、振り返ったお父さんから「おお」と一見そつなくも聞こえる返事が返った。でも顔を見ると案外柔らかい表情をしていて、どこか機嫌の良さを感じる。何かいいことでもあったのかな？

ちらりとお父さんの横に視線をやると、日本酒とお猪口が置かれているのに気づいた。  
なるほど。

月明かりにほんのり浮かび上がる盆栽を肴にお酒を飲んでたわけか。ここで、見るのが月自体じゃなく盆栽なのが父らしい。風流なんだかどうか。

縁側、酒に月に虫の声。

風流を気取るにはもってこいだと思うけど、肝心な酒の肴が盆栽じゃねえ？あはは。

でもそんなお父さんが私は結構好きだ。

「あ。ね、お父さん、ちょっと待ってて」

私は一声掛けると一度中へと引っ込んだ。台所へ行って目的のも

のを手に、再び縁側へと取って返す。お父さんは静かに目を細めながら、まだ自慢の盆栽を眺めていた。

「お待たせ！　せつかくだからこつち飲もうよ」

言って、帰省する際に買って来たお土産の日本酒を掲げて見せた。せつかく買ってきたのに、大事にとっておくんだもん。飲まなきゃ意味ないっていうのにな。

私はちゃっかり自分の分のお猪口も片手に隣に座った。二十歳になったばかりで日本酒か、って？　うん、まあ、そこは、あれよ。察してよ。あははは。

「なんだ六花、お前も付き合うか？」

私がお猪口片手に隣に座ったのを見て心持ち嬉しそうなお父さんに、内心笑ってしまう。やっぱり父親って自分の子供とお酒を飲めるようになるの、嬉しいものなのかな。お酒を飲みながら、酔いに任せて今まで出来なかったような話をして、子供の成長を感じたりするのかな。

子供にとつたら、どこか遠かったお父さんが、少しだけ近くなったように感じる。お酒の力ってすごいよね。

ご機嫌取りのつもりも大いにあつたけど、これはお酒をお土産にして正解だったな。なんて、何となく胸に押し寄せた感慨のようなものを軽い調子で誤魔化した。

「そりゃあ私も成人しましたからね！　孝太より一足先に付き合うよ。孝太が成人したら孝太に任せる」

笑って言うと、お父さんはそうかそうかと満足そうに頷いた。お酌をし合ってカチリと乾杯をしたあと、一杯目は目配せし合っ

で一気に煽る。透き通る水のような液体は喉に抜けていった直後、カツと熱を生んだ。鼻に抜けるきついアルコールの匂いにそれだけで体温が上がった気がする。うまつ。

お猪口を空にして直ぐお父さんと目が合って、二人してちよつと笑ってしまった。はは、何だか本当に大人になった気分だ。いくら成人したって言ったって、まだ二十歳になったばかりで何かが劇的に変化したわけでもないのにな。

でも、あの頑固で自分の意思は絶対曲げないって感じだったお父さんとゆつたりお酒を飲んでるなんて、なんだか不思議な気分だ。

「あ、そうだお父さん。お父さんはさ、どうしてアシュールを受け入れることにしたの？」

お父さんの言うことには家族みんながただ唯々諸々と従ってきたから、今までお父さんの決定に疑問なんて挟まなかったけど、今日はお酒の力も借りて聞いてみる。お酒の力だけじゃなくて、何だかアシュールが来てからお父さんは少し角が取れたみたいで、今なら聞けるんじゃないかと思ったのもあった。

お父さんは盆栽を眺めたまま、そうだなあ、と何かを思い出すように話し始める。

「一番は、目の前で“落ちてきた”のを見た所為だろうが……。  
あとは、彼が直ぐに剣を手放したからだろうな」

「剣!？」

驚いた。アシュール、剣なんて持ってたの!?

私の小さな叫びにお父さんは軽く頷く。お猪口を持った手が遊んでいたから、新しくお酒を注いであげた。もちろん私はちゃっかりさんなのでついでに自分の分も足しておく。

「ほら、あそこ、丁度盆栽棚が壊れているところがあるだろう？」

示されて視線をやれば、月と室内から洩れる明かりで薄っすらと見えた。確かに、お父さん自慢の盆栽棚が傾いている。

「あそこに落ちて来たんだ。あれはすごかったぞ？ いきなり空から人が降って来て、父さんも母さんも孝太もびっくりして固まって動けなかったよ」

「……うん、だろうねえ」

そりゃあ何も無いところから人が降ってきたら、普通リアクションなんて取れないと思う。でも三人とも固まっている様子を想像したらちよつと笑えた。

「落ちてきたアシユール君は妙にキラキラした服を着ていて……」

「キラキラした服？ そう言えば、アシユールの着ていた服って何処に仕舞ってあるの？」

思わず遮って聞いてしまう。

言われてみればそうだよね。裸で落ちてきたとは言ってなかったし、もとの世界の衣装を着ていたんだろうに、その服は一体どこへ？ 私は見たことないぞ。それを言えば剣とやらもそうだ。アシユールが使ってる客間にでも置いてあるのかな？

でもそんなものがあるなら、それを先に見せてくれれば私だってあるいはアシユールが異世界人だということをもっと信じられたかもしれないのに。

「ああ、あれは孝太が持つてる」  
「は？」

「孝太がすごいすごいと騒いで、帰るまででいいから部屋に飾らせてくれと五月蠅くて。剣も一緒にな」

「……あの莫迦」

私は弟の小生意気な笑顔を思い浮かべてこめかみがひくつくのを感じた。

本気で一度しつけ直さないといけないな、孝太め。

だって普通に考えて、今のアシュールにとって一番大事なものでしょ、服と剣なんて。

アシュールが身一つでこちらの世界に来たなら、服や剣は唯一、元の世界を実際に感じられるアシュールの存在証明のようなものだ。自分と元の世界とを繋ぐ記憶の具現。

それなのに、そんな大事なものをアシュールから引き離してしまうとは。いくらまだ義務教育中の孝太でもそこはちゃんと考えて行動しろ、と言いたい。……まあ、剣とかつていうのは男の子からすればちよつと懂れるようなものなのかもしれないけどさ。だからって許されることでもないでしょう。

アシュールには服も剣も早めに返してあげなくちゃいけないな。

剣という武器を渡すことには多少の抵抗もある。だけど、……アシュールなら剣がなくてもその気になれば私たち家族なんて簡単に傷つけることができるような気がする。なんか鍛えられてそうだし腹筋の硬さは半端ないし。あれ本当に筋肉？ 実は鉄板でも入ってんじゃない？ ……それは言いすぎか。

とにかく、剣を返すか返さないかで危険度がそれほど増減するとは思えないんだよね。どっちにしるアシュール次第では危ないというか。

だったら今の義理堅く律儀に見えるアシュールを信じて、大切なものは返してあげてもいいんじゃないかな、と私は思う。……ちよ

つと考えが甘いかな？ でも、お父さんも信用してるみたいだし…。

私が孝太の行動に顔を顰めつつ、剣についてうんうんと考えていると、お父さんも私が考えていることを察したのか苦笑して言った。

「父さんも初めは剣など危険だと思った。だから孝太の行動を止めるのに躊躇ってしまったんだ。孝太の我儘を口実にアシユール君から剣を遠ざけられると咄嗟に考えて、言葉に詰まったんだな。ずるい考えだが。」

でも直ぐに思い直して孝太を止めたんだぞ？ 服もそうだが、剣だって彼にとつては大切なものだろうからな。何があるかわからない世界で、身を守るものを手放すのは勇気がいるし、心許無いものだ。

だが孝太を止めようとしたら、アシユール君がかまわないと首を振ってなあ。今思えば、アシユール君は父さんが孝太を止めるまでに逡巡した、その意味に気づいてそうしたのかもな」

そう語るお父さんの表情からは小さな後悔と、そしてアシユールのことをとても高く評価しているということが感じられた。

「ああ、話を戻せば、父さんが彼を本当の意味できちんと面倒見ようと決めたのはそのときかな」

お猪口にちびりちびりと口をつけながら聞いていた私は、首を傾げる。アシユールが衣装を孝太に預けたことと、お父さんがアシユールを面倒見ようと思ったことが、どう繋がるんだろう？



十六花 肴は月と盆栽で 一（後書き）

父のターン。

親孝行もしておきたいよね。という話。（そうでもない  
アシユール不在で申し訳ないです。次話は後半ちよろつと出ます。  
本格復活は十八話。

「アシユール君が落ちてきたとき、彼は父さんたちからは考えられないような素早い動きで体勢を立て直してな、直ぐに剣を構えたんだよ。恐ろしいほど鋭い眼光でこちらを睨み据えてな」

「ええ？ 完全に危ない人じゃない！」

『アシユールが剣を構えた』そう聞いたとき、私は思わずガンツとお猪口を置き、身を乗り出してしまった。でもお父さんはそんな私の勢いにも笑って答える。

「ははっ、そうだな。今思えば危ない状況だった。でも、アシユール君を危ない人と思う以前に、父さんたちは驚きすぎて動けなかったよ。」

だけどさらに驚いたのは、啞然としてる父さんたちを見渡して直ぐ、アシユール君が厳しかった表情と緊張を解いて、黙ってその場に剣を置いたことだ。それから丁寧に頭まで下げた。何かを言いながらね。たぶんあれは謝罪だったんだろうな」

私は乗り出していた身を引いた。聞くだに信じられなかった。

孝太に剣を預けたと聞いたときも思ったけど、知らない場所に放り出された人が、そう簡単に身を守る抛り所である剣を手放す？ しかも周りに見たこともないような人たちがいるのに？ それって簡単なことなの？ いや、無理でしょう。確実に安全だなんてわからないのに、剣を置くなんて。

それに、そもそも剣を持っていたってことは、アシユールの世界

がそういったものを持ち歩かなくちゃいけない程度には危険と隣り合わせな場所だったってことでしょう？ そんな場所で生きていたなら尚更、身を守るためのものを手放すなんて信じられない。

アシュールって実はあまり頭がよろしくないの？ なんて思ってしまった。

そのときのお父さんも同じような（頭がどうのとは思わなかっただろうけど）驚きを感じたらしい。

「まあ、生きてきた環境で見る目を鍛えられていたからかもしれないが、アシュール君は、瞬間的に父さんたちを危険ではないと判断したんだろうな。

それからこれは父さんの勝手な想像だが、そのときに同時にアシュール君は、武器も持たず驚くばかりの父さんたちにとっては彼こそが脅威だということを察して、剣を手放したんじゃないかと思うんだ。父さんたちが驚きから回復して剣に気づいたときに恐怖を覚えないように。そのうえで、突然の訪問に謝罪をした。

……並大抵の度胸ではできないだろうな」

それはそうだ。

だって、たとえ相手が驚きに固まっていたとしたって、その人たちが安全だなんてどうして考えられるだろう。相手が驚きから抜け出したとき、恐怖のまま震えるか、それとも立ち向かってくるかは、予想が付かないんだもの。

それなのに剣を手放したってことは、突然襲い掛かれても対応できる自信があったのか、あるいはお父さんたちは安全だという確信があったのか。どちらにしろ、万一のことを考えたら結構な覚悟がいる行為だよな。

「アシュール君が剣を置いたという事実に加えて、服や剣を孝太に渡したことで、父さんの中で彼に対する警戒心が崩れたんだろう

な。

……彼はね、先に父さんたちを信用してくれたんだと思うよ。自分の大事なものを委ねることだね」

ああそっか、そういうことなんだ……。

お父さんがアシュールを受け入れたのは、アシュールが先にお父さんたちを信用すると態度で示したからだ。

「とにかく一度家の中に入れて事情を聞いた。アシュール君も色々困惑していたようだ……。結局、迎えが来るまで置いてもらえないかと頼まれてな。思わず父さんは二つ返事で受け入れてしまったよ」

お父さんはそう言って肩を揺らして笑った。

アシュールはここに落ちてきたとき、きっとほとんど賭けに近いもので剣を置いたんじゃないかと思う。周りの状況も含めお父さんたちが安全だなんて、そんなの見たことのない世界で瞬時に判断出来ることじゃない。……と思う。

お父さんたちの警戒心を少しでも和らげるために剣を置いて、自分の大切な、剣を含めた衣装を委ねることでお父さんたちを信用するってこと、自分の身も任せるということを暗に表現したんだろう。そこまでされたらお父さんも保護せずにはいられなかったんだろうね。頑固でも一本筋の通ったお父さんは、誠意には誠意で返す人だから。

それで今ではすっかりアシュールを受け入れて、かつお気に入りになっちゃったというわけだ。それはお父さんの性格を理解していれば、納得のいく展開だった。

「お前も最初は抵抗があったみたいだが、アシュール君の人となりを見て受け入れたんだろう？」

「え？」

合点がいったと頷いているところへ突然そんなことを言われて驚く。

私がアシユールを受け入れたと？

「服まで買ってやって。優しいじゃないか。支払った分、父さんが返してやろうか？」

お父さんは妙に優しい顔で笑ってる。それは子供の成長を喜ぶ親の顔だった。

……………。

なんかすごい、

居た堪れない！

何その慈愛に満ちた顔！　こんなところにもマリア様が！？　おいこらそこら中マリア様だらけじゃないか！　っていうかむしろお父さんは見た目的にイエス様！？　何言ってるんだ、おこがましい！！　いや私が何を言っているんだとにかく落ち着け！！

改めて服を買ってあげたとか言われると、すごく恥ずかしい。まるで私がお父さんやお母さんの仲間入りしてアシユールをチャホヤしているみたいじゃないか！

優しいとかじゃないのにつ。受け入れた……のは、間違っではないかもしれないけど、でも！　まだいけ好かないとは思ってるし！　私は顔の紅潮を急いでお酒を煽ることで誤魔化そうとした。無理だとわかってるけど何か文句でも！？

お猪口に並々入っていた分を一気に飲み干して、叫ぶみたいに言う。

「もーっ、何言ってるの！ 服はただ気が向いただけだしっ」

うんうん、ただお父さんの服があまりに似合わない過ぎて見ていられなかったただけだ！

「それに、お金なんていらないよっ。 私が勝手にやったことなのに」

お父さんには大学の入学金だって払ってもらったし、一人暮らしのための仕送りだってしてもらってる。学費は奨学金で賄ってるけど、入学金と仕送りだけで頭が上がらないと思うのに、私が自分の判断で使った自分のお金まで後からお父さんに請求しようなんて、まったく思わない。

私が大慌てで手を振ったら、お父さんはまたしても優しい顔で笑った。なんか、……敵わないなあ……。

「お、アシユール君、どうした？」

「……………」

羞恥に耐えていたところでお父さんの声があがり、慌てて振り返ると私たちの後ろには話の中心だったアシユールが立っていた。手にはお盆を持っていて、その上には水差しとコップが乗せられている。……気が利きますね。

たぶん、傍から見たらお父さんと私、二人でお酒を飲んでヒートアップしてきているように見えただろう。主に私が騒いでいたのだ。何だよ、一人祭りかよ。ちえっ。

アシユールが来たのは、小休止に水を、ってことだ。いやほんと、

シンデレラはよく働くね。感心、感心。

「……………」

私は父に水を勧めるアシユールを眺めて逡巡したあと、ヤツの腕を引いた。ちよつとここに座りたまえよ。

「アシユールも飲まない？」

そう言ってお酒の瓶を示すと、アシユールからは困惑した雰囲気  
が伝わってきた。何だ私の酒が飲めないっていうのか！ とかど  
ぞのお偉いさんのようなことを思う。

アシユールは迷っているみたいだったけど、断れないと思うな。  
だって……、

「おお、いいな。飲もう、飲もう！ 今夜は月も綺麗だ。お陰で  
盆栽も映える」

もう盆栽はいいし。

とか思ったのはお父さんには内緒にして、アシユールを見る。ほ  
ら、断れないだろう。

私はアシユールの前に私の使っていたお猪口を差し出した。口を  
つけたやつだけど、アイスだって平気で食べてたし大丈夫だろう。

私はアシユールが持ってきた小さめのコップを代わりに手にとった。

「はい、お猪口。私はこっちでいいから」

「……………」

「……………」

につこり笑って言ったら、妙な沈黙が流れた。え。何よ？

目を瞬いていると、私の顔と手元を見、暫くして二人はプハツと吹いて笑い出した。何その反応？

あ！ 二人して何か勘違いしてない！？

私はただアシールは日本酒なんて飲み慣れないだろうから、コップなんかで飲んだら大変だろうと思って気を遣っただけだっていうのに！ 私だって慣れてないけど、別にコップをとったからって水を飲むみたいにならぶ飲みするわけじゃないんだけど！

二人が笑った理由を察した私が顔を真っ赤にして怒るのを一頻り笑った後、アシールとお父さんは楽しそうにお酒を注ぎ合って飲み始めた。

おいちよつとだからその和気藹々感は何なんだ！

私をハブにしないでください。

覚えてるよ、二人して乙女を笑いものにしたこと、絶対後悔させてやる！ って、これがいけないのか。うん。自制、自制、自制心。

.....。

だがやはりムカつく.....！

私たちはそれから三人で、ゆっくり月を眺めながらの寝酒を楽しんだ。もちろんお父さんは月じゃなく、嬉しそうに一人で盆栽を眺めていたけど。

その間こっそり二人のお猪口にお酒を注ぎ足していた私に気づか



ず、情性で飲んでいたお父さんとアシユールは自分が飲んだ酒量に気づかず、その後完全に縁側で酔い潰れた。さらに二人は縁側で転がっているところをお母さんに発見され、大目玉をくらうこととなりました。般若と阿修羅と仁王は健在でした。アーメン。

ざまあみろ。べ。

## 十七夏 肴は月と盆栽で 二（後書き）

長くてすみませんorz

違和感あった部分、修正済み。

アシユールが実家にて“ほーむすてい”することになった経緯の回はこれで終わりです。

次話、第四ラウンド。しかし抑え気味で。

## 十八夏 第四ラウンド、客間！

深夜、フツと意識が浮上した。寝苦しい熱帯夜の所為か、散々飲んだお酒の所為か。たぶんどっちもだけど。お父さんとアシニールに飲ませることに集中していたから私自身はそんなに飲んだ気がしていなかったけど、それでもやっぱり独特の倦怠感が身体を包んでいた。

喉の乾きを覚えて、仕方なく起き上がる。部屋を出て、薄っすらとした月明かりが差し込む静かな廊下をぼんやり進んだ。家族を起こさないように忍び足で。

蛇口を捻りコップに一杯水を飲むと、喉の乾きは十分癒えた。湿気を含んだ空気の息苦しさも、どことなく和らいだような気がする。気分もすっきりしたし、さあ朝の全力ラジオ体操に向けてもっかい眠ろうか、と居間を抜けようとしたときだった。

「……？」

薄っすらと客間から洩れる明かりが目について、何気なく襖ふすまの隙間を覗く。そこにはアシニールが眠っているはずだった。……いやいや、覗いたのはもちろん断じてアシニールの寝姿に興味があったとかではないよ？ あくまでも明かりが洩れているのが気になったから。

隙間から中を覗くと行燈が点けっぱなしで、それが襖から洩れる明かりの正体だった。酔い潰れた所為で消し忘れたのかもしれない。私は一瞬迷ってから、そっと襖を開けて室内へと身を滑り込ませた。別に行燈ひとつが点けっぱなしなだけで電気代がどうのと目くじ

らを立てるつもりはないけど。でも橙色の温かみは夏には少し暑苦しく感じるものだし、実際枕元で煌々と光っていたら電球が熱を持つて暑いと思う。なので親切な私は僭越ながら消して差し上げようと思ったのだ。ええ、私つてばマリアs（略）。

アシユールはよく眠っているみたいだし、気づかれるのも面倒なので、細心の注意を払って足音を忍ばせた。

「……………」

アシユールの枕元に行燈までもう少し。

しゃがんで、あとは手を伸ばせばスイッチに届くかというくらいまで近づいたとき。

行燈の明かりに煌くものが視界の端に映った。引かれるように視線をやると、アシユールの米神や首筋に玉のような汗が浮かんで、それが行燈の明かりを弾いてオレンジ色に光っているんだとわかった。

魘うなされているというほどではないけれど、夏の寝苦しさだけではここまでにならないだろうというくらい汗。一体何の夢を見てるんだろ。もしかして、故郷に帰れそうなのに帰れない、なんていう切ない夢でも見ているんじゃないかと、ちょっとだけ可哀相に思ったりもした。

それにしても、これだけ汗を掻いているとさぞ気持ち悪いだろうと思う。起こしてあげるべきか迷いつつ、無意識に額に張り付く髪の毛を払ってやろうとしたときだった。

「ッ！！！！」

「……………」

それは一瞬のことだった。

額に触れた途端、突然飛び起きたアシユールに押し倒された。大

きな左手で私の左肩は押さえつけられ、まるで刃を突きつけるように首筋にびたりとアシユールの右の拳が当てられている。ちょうど、ナイフを握っているような形の拳が。

ナイフなんて危ないものウチの客間にあるはずもないから、完全に体勢というか仕種だけなんだけど。

つまり、これって

エア威嚇？

いやエア威嚇って何？

そんな面白くなさそうな競技ありましたっけ？

そもそも威嚇は全部エアだよな？

って、今はそんな冗談言っている場合でもない。

今私に覆い被さるアシユールの眼光は鋭く、その目は私が出会ってから初めて見る剣呑さを含んでいた。

街で身体が重くなるほどの威圧感を放っていたときでさえ、目が合えばそこに怒りの気配はなくて、だからあんまり恐怖は感じなかったのに。今は射抜くような銀河の瞳に感情の火は点らずただ物騒な光がちらついていて、正直に、怖い。実際に刃物を持っているわけでもないのに、首筋が冷やりとする気がした。

だがしかし。

だからといって素直に恐怖に震えるのは癪である。それが私。六花様。

「……………」  
「……………」

行燈に照らされて、ぎらぎらとより深く、濃く輝く銀河の瞳を見つめ、私はおもむろに両手を持ち上げた。  
そして、

むにいつ。

何の音かって？ 何の音だと思う？ うんたぶん、想像通り  
だと思う。

「アシユール、痛い」  
「……………」

押し付けられた左肩が痛い。 けどアシユールも同じくらい痛い  
だろうと思う。

何故なら私が全力でヤツの両頬を抓り上げているから。  
そう、むにいつという音は、その効果音だったのだ。  
あはは、流石の美形もこれをする顔が面白いことになるね。 い  
い眺めである。 まいったか！

「……………」  
「……………」

まいったならいい加減離せコルア！という叫びを飲み込んで、押し倒されたまま、かつ頬を抓ったままアシユールの反応を待つこと数秒。 アシユールは数度瞬きを繰り返したあと、フツと視線の陰を消した。 ……うん？ 正気に戻ったか？

観察していたら、アシユールは私の肩から手を離し、さっき私が

そうしようとしていたのと同じように、私の額に掛かる前髪をするりと払った。……えーっと、これって謝罪？ それにしては何だか、目が今にも閉じそうだけど。起きてます？ おーい、アシユールさん？

様子見でじつと見上げていたら、視線に気づいたらしいアシユールがフツと微笑んだ。……まだ頬つぺた抓ってるんで微笑んだと言いつけるかは定かじゃないけどね。はは、おもしろっ。ついでに何かもごもご言っただけど、……うん。抓ってるんで。意味不明です、アシユールさんよ。もっとはつきり喋りたまえ。ぷふっ。

さっきまで結構な緊迫感があったというのに、アシユールは既に意識がぼんやりし始めているようで、瞬きの速度が遅くなっている。寝惚けた人を抓り上げたままって、私ってひどい子ですね。はい。

でもこれも連日された仕打ちの腹癒せです。

しばらくアシユールの面白い顔を楽しんでいた私だけど、さっきの緊迫感など嘘のように無防備になったアシユールをいつまでも抓っているわけにもいかないので、渋々ヤツの頬から手を離れた。

とりあえずたった今得た教訓。

余計な行動（行燈消してあげようとしたり、額の髪の毛払ってあげようとしたり）はとるもんじゃない。これからは気をつけよう。

そんなことを心の中で呟いて、アシユールの下から這い出す。…

…這い出そうと、した。したんです。したんですよ。なのに。

「ぐえっ！」

カエルが潰れたよう、とはまさにこのことを言っただろうかッ。

アシユールのエア威嚇からやっと解放されたと思ったら、今度はアシユール自体が降って来た。もちろん私は下敷きになりました。

重っ！

ついでに軽く後頭部も強打した。……本日二度目だぞ私の脳みそ大丈夫か？ いやさつき押し倒されたときも打った気がするなんだ三度目じゃないかやバイ私の脳みそ半死滅！？とか思いながら、この状況に呆然とする。突然の圧死フラグ。注）エア威嚇よりも危険です。ご注意ください。って本気で苦しいよ！

アシユールの肩口が丁度私の顎下あたりにあって、ヤツの上半身に完全に押さえ込まれているから全然身動きが取れません。

男の身体は筋肉質なので重い。さらにアシユールはかなりの高身長で筋肉も一般の日本人男性よりもついている。うん。あれだね。この人やっぱり私を殺す気なんだね。あははは。……ってふざけるな！

心中で一人必死に叫ぶ私になど気づかず、アシユールはというと、完全に寝ております。健やかな寝息を立てて。

コイツ……本気でどうしてくれよう。

私の耳元には断続的にアシユールの寝息が送り込まれてちょーくすぐつたい！ 背筋がぞわぞわする！ だが逃げられない！ 何コレほんと何て拷問？ 下手なくすぐりよりも性質悪いよ！

すぐそこにあるアシユールの首筋からは、お酒と汗と石けんの匂いがした。

ぴったりと隙間なく全体重を掛けられ、本気で重い。苦しい。そして暑い。おいこら今が夏だと知っての狼藉か！ って何コレ自分で言ってる恥ずかしいっ！

とにかく冷や汗だけじゃなく普通に暑さの所為で汗を掻いて来た。ちゃんとお風呂入ったのに……。

肺が圧迫されていい加減息も出来なくて、このままじゃいかん、と必死で対策を練る。



この状態を打破する方法は一つしか思い浮かばなかった。  
ので、即実行。

問題ない。

どんな結果になってもアシユールが悪いのである。  
ということ、

「いただきます、じゃなかった、失礼します」

最後の情けで一応声を掛け、私は遠慮なく口を開けた。

ガブウツ！！！

……………。

ええ、噛み付きましたが何か問題でも？

………なんかちょっと口の中がしょっぱいんだけど、アシユール。

## 十八夏 第四ラウンド、客間！（後書き）

飛んで火に入る夏の虫。違うか。

アシユールも寝惚けてますが、実は六花も若干寝惚けてます。なのでテンションがちょっと低い。しかも一人問答なので。

アシユール復活とか言っというて寝ててすいませんorz

……そういえば『仮面大公』でも主人公が噛み付いてたな。首じゃないけど。（ネタ被ってる！／愕然／いやいつものことだ気にしない！／開直

## 十九夏 ラウンド余波

アシュールの肩口にしっかりと噛み付く私。おまけで背中に爪も立ててあげたよ。特別大サービスなんだからねっ！

……。

……ふざけてますね、ごめんなさい。

でもだって本気で呼吸困難ですから！

一番手っ取り早くアシュールが起きそうなのは、痛みを与えることだと思っただもん。

さつきみたいに抓ってみることも考えたけど、頬つぺた抓つてるのにそのまま寝ちゃった人が、もう一回抓っただけで起きるか？という疑問が。声を出そうにも肺は圧迫されてるし、深夜だから大声も出せない。残りは噛み付くくらいしか思い浮かばなかったんだ。

……この単純思考、単細胞と罵られても仕方がない気がする。でも後悔はしていない。

ちよつと痛いくらいが何だ！ こっちは圧死しかけてるんだぞ！  
正当防衛だ！ アシュールめ！ 起きやがれ！

力の限りとはいかないまでも、遠慮のえの字も無いほどしっかりと噛み付いたので、アシュールは「ぐっ」と短い呻き声を漏らして一瞬押し黙ってから、のそりと起き上がった。ほらね、作戦成功。終わりよければ全てよし。ああ、私の肺さん、御飯ですよ。じゃなかった、空気ですよつ。

汗だくのアシュールに密着されたうえに、二人分の体温で汗を掻いたから私のTシャツまで濡れている気がする。これは着替えてから眠らないと気持ち悪いかもなあ、なんて暢気に思いながら、ふと

アシユールの方を見た。

……。

「あ。ヤバ」

ポロつと呟く。

私の目はアシユールの肩口に釘付けになっていた。

そこには、……しつかりくつきりはつきり、私の……歯型が。

アシユールは首周りの大きく開いたTシャツを着ていたから、私が噛み付いたのは布を挟むことなく直接の肌だった。その所為か（いや強く噛み過ぎた所為だと思うけど）、アシユールの肩には私の歯の型通り綺麗に内出血が出来上がっていた。

これはヤバイ。

舌の根も乾いていませんが、たった今、ちょっとだけ後悔して  
います、単細胞な私。

今はまだ、お酒を鰯腹たらふく飲んだ所為もあってか眠気に負けてぼんやりしているアシユールだけど、朝、顔を洗うときに鏡を見て自分の肩の惨状に気づいたら……。うん。驚くなんてもんじゃないね。そして薄っすらとでも私の記憶が残っていた場合、

……。

あ。背筋に悪寒が。

こ、このままではマズい！

私は血の気が引く思いでアシユールの肩を凝視した。ここは冷静になって考えよう。

そうだコンシーラーで隠すとかどうかしら？ 乙女の強い味方、コンシーラー！ ……いや駄目だ、化粧道具は私の部屋だし、そもそも今は夏で汗をかけば簡単に落ちてしまう。

じゃあアレ、絆創膏とかどうよ？ あれなら居間にある棚の引き出しに入っているし、傷も隠れて……ってこれも駄目だ。だって絆創膏とか目立ちすぎる。普通に剥がされて、おいこれ何だよ誰だ俺を襲ったの、的展開が目に浮かぶ！

もっついっそ放置の方がよくない？ 私は何もしてません。みたいな。

……。はい、駄目ですよー。

っていうかそもそも、こんな襟ぐりの開いたＴシャツがいけない。そうだよ、こんなんじゃ、アシユールが気づく前にまず家族が気づいてしまうじゃないか！

焦った私は急いで立ち上がると、客間の隅に置いてあったカゴを漁った。アシユールの着替えが入れているカゴだ。そこから適当に似たような、でも襟ぐりの開いていないＴシャツを引っ張り出す。

「ほらアシユールっ、手え上げてっ！」

「……………」

布団に座り込んだままゆらゆらしているアシユールの元へ取って返すと、遠慮なく着ているＴシャツを引っぺがした。Ｔシャツの一部が顎に引っかかって「ぐえ」ってなつてたけど知らん！ それはさっき私がやった、いや、なったやつだ！ 二番煎じは面白くないぞ！

そもそもちよつと噛み付いただけで内出血するような貧弱な肌を持つアシユールが悪い！ この、豆腐ヤロウ！ …… 自分で言つて意味わかんないな。

ああもつごめん私が悪いです頭が単細胞でした認めます認めますから早く着替えてつ。

「…… - - ?」

一人テンパる私に、薄っすらと目を開けたアシユールが何か言つた。眠そうな目と視線が合つて、妙な間があつた後にぐいつと腕を引かれた。

「…… - - - ? - - - - ……」

ほぼ抱きつくような形になつてしまい目を見開いて固まる私を見て、アシユールがまたぼんやりと何かを呟いた。ぼそぼそ言つて聞き取れない。いやぼそぼそ言つてなくても聞き取れないけど。

とりあえず、起きたの？ 起きたなら自分で着替えを……。そう思いかけて、ふと思考が止まる。なんかちよつと、…… 何だろう？ 嫌な予感。何でしょうかこの脳内に響くサイレンは。

……。

………？

… ……！！！！

私はそこで雷に打たれたように肩をビクつかせた。目の前で光がスパークしたように現実を理解する。

……マズい。これは歯型がバレるのと同じくらい、マズい。いやそれ以上にマズい……！！

今この状況でアシュールが完全に目を覚ましたら……。確実に、間違いなく、（私にとっての）大惨事が待っている……！！  
だって冷静に考えてみて？

深夜、意味もなく（本当はあるけど）アシュールの部屋にいる私。  
寝惚けるアシュール。

そんなアシュールの服を脱がせる私。  
（アシュールだけ）上半身裸の状態で（不本意ながら）抱きつく私。

アシュールの肩には意味深な私の歯型。

……。

……。

……。

うおおおいっ！！

マズいなんてもんじゃないと今気づいた！ ついでに若干寝起きでテンションの低かった私も目が覚めた！！  
ヤベエエエエエッ……！！  
そして現実を見た！

ほんの数分前の自分を罵ってやりたい！

よっ、この、単細胞っ……！！

って罵ってないし！ “よっ”って何よっ！？

うわぁ、ツツコミが親父ギャグっぽくなってしまった自分に幻滅した！……“幻滅”だと？ それは前にも使った表現じゃないか自分の語彙力の無さにやっぱg（略）！

半ば脳内パニック状態で私は硬直していた。下手に動いてアシュールが正気に戻ったらアウト！ 私の人生終わったね！ イエア！ 状態になるっ！

この際、記憶がぶっ飛ぶようにもう一度日本酒ガブ飲みさせるかっ！？ いやそれは流石に犯罪だよねうんわかるわかってるわかってるんだけど他にどうしたらっ！？

前にも後ろにも進めない状態で凝固していたけど、しばらくしてアシュールの異変に気がついた。

よく見ればアシュールのところんとしていた瞼はいつの間にか完全に降り、規則的な呼吸音まで聞こえる。体勢は座り込んだままだけど、どうやら再び夢の国へ旅立ったらしい。

……。

これは、……助かったということで、ファイナルアンサー！！？

おっしやあああ！とガッツポーズをしそうになるのを必死で堪え、私は息を殺してアシュールに掴まれていた腕を外した。

とりあえず落ち着こう、うん。自分に言い聞かせながら、一度取った距離をもう一度つめる。

いやいや、もう一回抱きつこうとか、そんなことこれっぽっちも考えてませんよ？ さっさと逃走したいのは山々です、はい。だけど、上半身裸でアシュールを放置したら、私ただの痴女じゃない！？ 歯型つけて脱がせて逃げるとか、変質者でしょ！！？ その称



号は流石に私でもいただけない！

なので私は涙を飲んで遂行します、最後まで！

脱がせたＴシャツで、そつとアシユールの浮いた汗を拭いていく。私って優しい！とか、余計なことは考えず、ひたすらアシユールを起こさないように息を潜めながら、額、首、胸へと順番に。

最後に背中へ回った。橙色の弱い明かりの中に浮かび上がるアシユールの背中……。

……。

あー。

私は何も見ていません。

……って言うたら駄目ですか？

十九夏 ラウンド余波（後書き）

起きてそのまま押し倒せー！ とか思ったあなた、ごめんなさい。  
じりじりしてください。笑  
アシュールの背中には何があっただんでしょーか。

## 二十夏 余波の余波の予感

うう……。

私は見たくなかった、気づきたくなかったものを前に途方に暮れていた。

しかしいくらこれは幻じゃない？とか思ってみても、それが消えてくれるはずもない。

目の前のアシユールの背中……というか、両脇あたりにははつきりと爪跡が。

ええ、私がやりました。つい、出来心で。

後悔も反省もしています。情状酌量はありますか？……なしです、ね、はい。

いやしかし、これは本気の本気でマズイ状況では？

肩口に齒型。背中側の両脇に引っ掻いたような爪跡。

……。

あはははははははは。笑っつけ笑っつけ！あははははははははは。

……すいません。

現実逃避もしきれず、一人冷や汗を流す私。全ての元凶は自分だ  
というのに、目の前の現実が信じられずに遠い目をしてしまう。

もし明日アシュールが自分の身体に付いたありえない傷跡を見たら、ヤツは一体どうするんだろう。

まさか、いつものことだと受け流す？ …… いやいや、そんな最低な人間ではないだろう。うん。そこは信じているぞ。勝手ながら  
じゃあどうする？

きっと考えるよね、酔っ払って自分は何かをしたか、って。で、この傷跡の感じから言って真っ先に思い浮かぶのは……。へい。アレで御座いますね。ははははは。随分激しかったんですね、みたいな。ははははははは笑えない！

その後、だったら相手は誰ぞや？ ってことになって、この家で候補は二人。……私か、お母さんだ。

……。

嫌あああ！ お母さんとアシュールが……、とか想像したくない  
いいいいいいいい！！！！

って、違っつのはこの私が重々承知しておるところなんです。…  
泣きたい。

ああもう、明日ひと波乱ありそうなのは目に見えているじゃないか！ 戻ろっかな！ アパートに！！

……いや駄目だ、もうすぐお盆だもん。お墓参りはしなきゃ。

……。

まさに進退ここに窮まれり。

私はがつくりと肩を落として、いまだに目の前でゆらゆらしてい

るアシユールの背中を恨めしく眺めた。

もうあれだね、これは、アシユールが背中中の爪跡に気づかないことを祈るしかない。

肩の噛み痕も、着替えをするときに鏡のあるようなところじゃなければもしかしたら気づかないかも……。……。おお！ そうだよ、うん。気づかない可能性もあるじゃないか！ 何だ、大丈夫じゃない！ 明日はアシユールに付きっ切りで監視していればいいんだ！！ 私ってば多細胞っ……。……。

何となく多少の希望を見出した私は、気を取り直してアシユールに向き直った。

こんなところに長時間いるわけにもいかないし、アシユールの着替えに専念することに決めて、脱がせたＴシャツを手取る。まだ少し浮いている汗を拭いてあげようと思って。

幾分冷静さを取り戻したら、今度は傷痕じゃなくアシユールの身体に目を奪われた。

散々黄金率だなんだと罵っていた（誰が何と言おうと罵ってたんです！）けど、改めて見るとアシユールの身体は本当に綺麗だった。隆起する筋肉は無駄無く陰影を作り、明かりを弾く肌は肌理が細かく爪跡以外の小さな傷さえ装飾品のように見える。

今は姿勢が悪いし力も抜けているから少し緩んでいるけど、何かスポーツでもすれば躍動する筋肉に目が釘付けになっただろうと思う。

素直に、感嘆するしかなかった。

……はい、そんな身体に齒型を残してすみません。爪痕も。

そっだ、じっくり眺めている暇なんてない。

「アシユール……。腕、上げて」  
「……………」

夢うつつを壊してしまわないように、私は声を潜め、耳元でささやくように頼んでみる。アシユールはくすぐったかったのかピクリと小さく身体を震わせたけど、特に目を開ける様子もなく、操り人形みたいにゆつくりと、ちょっとだけ、腕を上げてくれた。すかさず、そおつと腕にＴシャツの袖を通していく。

両腕を通し終わって、最後が問題だった。……頭、どうやって通せばいいの？

逆にすればよかったか、とも思ったけど、どっちにしる後に通す方がやりづらくなるから一緒だ。

暫く迷った挙句、私は意を決してＴシャツの襟ぐりに外側から自分の腕を通した。それから膝立ちになり、アシユールの頭を抱え込むようにして、できるだけ頭に衝撃を与えないように固定しながら被せていった。

私の腕に触れるアシユールの白金の髪は絹糸のよう……と思ったら、意外と張りのあるしつかりした髪質だった。淡い色の所為で細く柔らかそうに見えていたけど、普通の男の人程度には硬さがある。でも傷み知らずの綺麗な髪だった。まったく、どこもかしこも……小癪な！ 大体、傷跡も装飾品のようって有り得ないから！ これでデベソとかだったら笑えるのに！ あ、こんなところにボタンが、とか言いながら押してやるのに！

余計な発見に驚きつつ腹立たしく思いつつ、一瞬このままＴシャツを放してやるうかという悪魔のささやきが耳元で聞こえた気がする。顔面にビシッとゴムぱっちゃん状態になったらさぞ驚くだろう。

……………。  
ダメダメ！ そんなことをしてもしアシユールが目を覚ましたりなんかしたら、気持ちが悪くしたとしても、同時に私から色々なものが失われる……！

悪魔のささやきを振り払い、私は細心の注意を払ってアシユールにＴシャツを着せていった。

大学の試験中と同じくらい集中した私は、なんとか頭も無事通し終わった。あとはＴシャツの裾を整えれば証拠隠滅　いや、着替え終了だ。

裾を掴んで、屈みながら腰まで引つ張る。そのとき、こつりと肩に当たるものがあつた。

「……………」

アシユールが完全に夢の中に旅立ったのか、額を私の肩に乗せていた。ついでに何故か両腕が私を軽く包むように背中に回ってきて、かなり慌てる。

そのままずると体重が掛かってきたから、私は焦って背中に回った腕を外すと、アシユールの首に手を添えて身体をそと横に押した。逆らわず、アシユールは布団の上に倒れ込んだ。我ながら物凄い早業であつた。背中に回った腕にあんまり力が入っていなくてよかったよ。……危つくまでも下敷きになるところだった。

気持ち良さそうに寝息を立てるアシユールを見、あまりの暢気な寝顔に軽く顔を引き攣らせた私は小さく拳を上げて殴る振りをしてから立ち上がった。

それから当初の目的だった行燈を消し、私は無事、客間という名の危険区域の脱出を成し遂げたのだった。

もう本当に絶対に決して余計なことはいないとここに誓います！  
！！

……本気でそう誓ったんですが、人生とはままたらないものなの  
ですね……。



二十夏 余波の余波の予感（後書き）

なんとか切り抜けて、夜の（一人）すったもんだは一応終わり。

六花の所為であんまり甘くならなくて申し訳ない。

こゝ、これからです！　これから……！

しかし六花の明日やいかに。

## 二十一 夏 弟の反省、姉の所以一

「孝太ーっ！」

「ッッ！ー！！」

私は叫びながら思いっきり遠慮なく弟の部屋の扉を開けた。孝太は驚いて、布団の上でビヨンツと飛び跳ねて起きた。

うん。只今朝の7時。朝っぱらから大声で叩き起こされれば当然の反応と言える。期待を裏切らないリアクションをありがとう。

見事な跳ねっぷりに顔がニヤつきそうになるが、そこはこれからの目的を考えて自重しておく。今回は別に受験ノイローゼ気味の弟を揶揄いに来たわけじゃないので。

「　　っ姉ちゃんッッ！！　いきなり驚くだろ！」

心臓吐くかと思った……。とか呟く弟を完全に無視する。心臓なんて吐けるわけがないでしょう。なんていう真面目過ぎる突っ込みも飲み込んで。許可などいらん、とばかりにずかずかと部屋の中に入り、ぐるりと中を見渡した。

「あつた」

目的のものを発見して、はあああ、と深い溜息をつく。

昨日、洗濯物を押し付けたときは急いでいて気づかなかったけど、確かに弟の部屋の壁には見たこともない服が掛けられ、そのちょうど下あたりに鋭つい剣が立てかけられていた。これが昨夜、縁側で

お父さんが言っていたアシユールの所有物か。

そうなの、朝っぱらから弟を奇襲した私の目的はこれでした。

昨夜（主に深夜）は色々あって、本気で死ぬかと思いましたが、これは忘れてなんかいませんでしたよ。

悪気はなくてもアシユールから取り上げてしまった、ヤツの衣装一式。

だけど服の方は、お父さんが言っていたキラキラというよりも……ゴテゴテ？ 確かにキラキラしている部分もあるんだけど、要職にでも就いていたのかと思えるくらい装飾過多で作りも凝っている結構複雑に布が組み合わされているみたいだから、すごく説明がしづらい。

全体の色はほんの少し紫がかった深めの落ち着いた灰色？ それで所々のポイントに安っぽい金色や臙脂色が使われた装飾がある。使いこまれた皮のベルトのようなものも見受けられた。上着は基本的に詰襟型なんだけど、首周りが余裕ありそうな感じに開いているから、内側の服を見せるようになっていたのかもしれない。全体は秋や春物のコートみたいな、少し厚めの生地みたいだ。

内側の衣装は首元から胸元までは深い赤のビロード生地になっていて、そこにも装飾品やらキラキラしたものやらがたくさんついていた。首回りには燻銀いぶしぎんのような渋みのある細かい彫刻の施されたゴツイシルバーの首輪みたいなの……袖にはよく意図のわからないベルトのようなものが巻かれていたり……とにかくまあ、現代日本ではコスプレくらいしか存在しないような衣装なんだ（説明放棄）。

剣も同じで、西欧ファンタジーに出てくるようなヤツ？

まあ、何かよくわからないけど、確かにすごい。なんとなく孝太が興奮するのわかるような気はする。

だけど、だからと言って見逃すわけにもいかないのよ。

私はあまりの派手さにあんぐりと開けていた口を閉じて、孝太に

向き直った。

「……孝太、あんたコレ、直ぐにアシユールに返しなさい」

「は？ コレって、アシユールの服のこと？ ……何でだよ、急に」

寝惚け眼のまま顔を顰める孝太にまた溜息が出る。やっぱり全然わかってないな、こいつ。

「こんなの持っててどうするの？」

「……別に、眺めてるだけだけど？ 何が駄目なんだよ、ちゃんと許可とってるって！」

眺めてるだけ。

まあそうだろうね。でも、その眺めてるだけのことが、今のアシユールは自由に出来ないでいるってことだ。孝太は眺めてすごいなあ、って思うだけだろうけど、アシユールはこれを見て故郷を懐かしんだり自分にはちゃんと帰る場所があるって実感したりできる。重要性が全然違う。だから、駄目。

「あのねえ、……孝太はアシユールが異世界から来たって、信じてるんでしょ？」

そう言つと、孝太は訝しげに唇を尖らせながら肯定する。質問の意図がわからないらしい。いやいや、ちょっと頭を使えばわかるでしょ。というよりわかりなさいよ。……無理か。このサッカー馬鹿め。

私は溜息を零すと、孝太の勉強机の椅子に腰を下ろして、組んだ足の上で頬杖をつきながら孝太を見つめた。

「考えてみなさいよ。孝太がもし、家の前でサッカーして遊んでいるときにどつか見知らぬ土地に突然飛ばされたとして、そこに住んでいる人たちに新しい服着せられて、元々着ていたものとサッカーボールどっちも取り上げられたらどう思う？　いくらその人たちが親切でも、いつかは帰れるという保障があったとしても、あんたにとって日本に繋がるものが服やサッカーボールしかないのに、簡単に預けちゃえるの？　手元に置いておきたいとは思わない？」

ゆっくりと言い聞かせるみたいに聞いてみる。孝太は不満気ながらも少し俯いて、今私が言ったことを必死に想像しているみたいだった。

「……………」

「…………でも、帰るときには返すんだぜ？」

最初の強気はどこへやら。多少思うところがあつたのか、こちらの反応を窺うようにして孝太は言う。そんな上目遣いをしても駄目お姉さまには効きません。…………ちよつと頭を撫でてやろうかと思っただけ。

「帰るときに持ち物を返すのは大前提でしょ。それよりも、こっちにいる間に返してあげなきゃ。」

孝太にとっては珍しいものでも、アシユールにとってはずっと側にあつた、今は唯一の大切なものかもしれないよ？

…………孝太は、知らない土地、知らない人、知らない文化や食事に囲まれていつまで続くかわからない生活を始めたとき、せめてサッカーボールが側にあつたら、とか思わない？」

そう優しく聞いてみると、ちよつと考えてから孝太は肩を落とした。わかつたかな？

「……うん。確かに、最初はよくても段々つらくなるかも……」

私は今までとは違う意味で吐息を落とした。

うん。孝太も、悪気があったわけじゃないのは私だってよくわかってる。孝太くらいの年齢では、周りの人たちの気持ちよりも興味が引かれることに意識が引き摺られるのは仕方ないことだと思うし、それでもわかってくれたことに安堵して、私は椅子から立ち上がり、布団に座り込んだままの孝太の頭をポンポンと叩いた。

「わかってくれればいいよ。孝太は言えばわかるし、反発してても相手の言いたいことちゃんと考えて納得できれば素直に受け入れるし、そついうところはすごいと思うよ」

普通は反抗心から見て見ぬ振りをしたり、意地になって余計に駄目なことをしちゃったりするけど。

孝太は考え足らずなところはあるけど、諭されれば理解できる頭もあるし、叱られても自分が悪いとわかればちゃんと謝って態度を改めることも出来る。まあ、欲を言えば叱られる前に余計な行動はとるなと言いたいけど、まだ義務教育も出ていないのにそこまで求めるのも酷だろう。これから少しずつ学んでいけばいい。

……人のこと言えた義理でもないんだけどね。たかだか二十歳の小娘が何を、と思わなくもないけど、気づいたことがあれば注意するのでも年上の仕事だ。

とにかくわかってくれたし、あとは本人に任せて孝太の部屋を出ようと歩き出したら、姉ちゃん、と呼び止められた。何だい何だいお姉さまが恋しくなったかね？　ん？　とか余計な茶化しを心の中に入れてつつ振り返った。

「姉ちゃんはさ、何でそんなに人の気持ちがわかんのか？」



二十一夏 弟の反省、姉の所以 一（後書き）

またもアシユール出てこなくて申し訳ない！  
でも孝太にも出番を……！



## 二十二夏 弟の反省、姉の所以 二

「姉ちゃんはさ、何でそんなに人の気持ちがわかんのか？」

突然そんなことを言われて、目を瞬く。……これは褒められたんでしょうか？ それとも嫌味……じゃなさそうだな、雰囲気的に。よくわからないけど、孝太が微妙に落ち込んでいるようなので苦笑が漏れる。そこまでショックだったのか？

「私が？ わかってるかな、人の気持ち。言われるほどわかってないと思うけどね？」

でもあえて気持ちがわかるって言うなら、それは孝太の姉だからじゃない？」

「え？」

自分の名前が飛び出したことに虚を突かれたような顔をする孝太を見て、内心笑いが零れる。だけど孝太の真剣さに応えて、私は考えるように首を捻りながら続けた。

「私は二十歳で、孝太は今十五でしょ？ 孝太が生まれたとき、

私はもう五歳だった」

「うん。だね」

「もう五歳、って言ったけど、“まだ”五歳でもあったの。それまではお母さんもお父さんも私に掛かりきりだったのに、孝太が生まれたらがらりと変わった。よくある話だけど、私も最初は不満で癪癪起こしたりもしてたんだよね。だけど、いつだったかお母さん

が私に言ったの。『あんたが生まれたときもこんなだったんだから』  
って。そう言われて『こんなってどんな？』って思ってお母さん  
たちを見てみたら、何だか想像できたんだよね、自分が生まれたとき  
のこと。

孝太の面倒を見るお母さんとお父さんは大変そうで、でも嬉しそ  
うだった。それからかな？ 周りをよく見れば、何か気づかないこ  
とが隠れてるんじゃないかって思うようになったと思う。半分  
遊び感覚でね。

でもそれよりも大きかったのはやっぱり、あんたの面倒を私も見  
てたからじゃないかな？」

そういつてニヤリと笑ったら、孝太がうげっと嫌そうな顔をした。  
しばいたるか。感謝をしなさいよ、感謝を。って私がニヤついたか  
らいけないのか。

「生まれてしばらくは当然、あんたは喋ることなんて出来なかつ  
たし、喋れるようになっても感情が先走ってわけわかんなかったり  
してた。そういうの見てて、この子は今何を考えてるんだろぅ、と  
か、何を望んでるんだろぅ、とか自然と考えるようになったんじゃ  
ないかな？」

私の言うことを聞きながら神妙な顔になる孝太にちよつと笑って  
しまふ。そんな高尚な話をしてるわけじゃないのにね。

「……じゃあ俺にも妹か弟が出来たら、人の気持ち考えられるよ  
うなヤツになんのかな」

……なんて単純な思考なんでしょうか、孝太くん。

流石にそれは十五の男が考えることじゃないんじゃない？

小学生でももうちよつと発展的なことを考えるだろうに。

弟の将来が心配になりつつ、そんなお馬鹿な孝太を少しでも可愛く感じてしまふ。どんなに生意気でもお馬鹿でも血の繋がった家族だもんね。　　ってクサすぎる！　私クサすぎるから！

自分の思考に恥ずかしくなった私は、誤魔化すように孝太に囁く。

「よく考えて、孝太。これから妹か弟が出来るってことは、あのお父さんとお母さんが……」

「う、うわああ！　変なこと想像させんなよっ！！！」

「あはははは、ごめんごめん！」

急に真つ赤になった弟を笑いつつ、腕を引つ張ってさっきまで私が座っていた椅子に孝太を座らせる。椅子の背をくると回して机に向かわせた。余計なこと考えてないで、まずは受験生の本分を全うしたまえ、弟よ。

「変なこと考えなくたって、あんたも気をつけてれば人の気持ちもわかるようになるよ。……大体、私だって完全に人の気持ちなんてわからないだし。とにかく、あんたは真面目に勉強でもしてなさい。もうすぐ朝ごはんだしね」

「……わかったよ」

ただアシユールの衣装を返せと言いに来ただけなのに変に深いような浅いような話になってしまつて、むず痒い気持ちになった。なんか、お父さんといい孝太といい、アシユールが来たことで妙な話ばかりしているような気がする。別にこんなちよつと突っ込んだような話をする家族でもなかったのにな。

さていい加減私も部屋に戻ろうか、と踵を返したら、ポケットから軽快な音が流れてきて思わず足を止める。メールだ。

さつと目を通して、直ぐに白けた気持ちになった。

「……壱樹<sup>いっぎ</sup>め。私は伝書鳩じゃないつつの」

受信ボックスを開くと、今は県外に出ている例の幼馴染からのメールだった。

『盆前に帰る。

むつはもう帰ってるんだろ？

ついでに母さんに伝えといてくれ。

よろしく^^』

確かに隣のおばさんは携帯を持っていないからメールなんて出来ないだろうけど、電話があるでしょ、電話が！

そういえば去年の夏も私が伝言したんだった、と人遣いの荒い幼馴染を呪っていると、孝太が後ろから人の手元を覗き込んできた。

「イツキ兄帰ってくんの！？ やりい、サッカー付き合ってもらおう！」

またサッカーかよ。勉強しろよ。

とは思ったものの。

「お好きにどうぞ。じゃあね、孝太。ちゃんとアレ、早めにアシユールに返しておきなよ？」

あの親にしてこの子ありだな、とか思いつつ、アシユールの服を指差して念を押してから、私は孝太の部屋を後にした。

ひと仕事終えた気分で階段を降り、廊下を歩いていたら、片手に

着替え（らしきもの）を持ったアシユールが洗面所に向かう姿が見えた。

ちよっ、今から着替えるつもり！？

鏡のある場所は勘弁してーっ！！と、私は慌ててヤツを追った。

## 二十二夏 弟の反省、姉の所以 二（後書き）

20歳にしてはちょっと擦れたような、しっかりでちゃっさりな思考も持つてる六花が出来上がった理由、でした。

五歳も差がある弟妹がいると、きつと自然と面倒見が良くなったり、人の感情に敏感になったりしますよね。

とはいえ一部の感情には鈍いように見えているかと思いますが。笑

そして新キャラフラグ。

## 二十三夏 不名譽回避に向けて

閉められそうになった洗面所の扉の隙間に、急いで手と足を滑り込ませた。

そこから無理矢理に戸をこじ開け、きょとんと目を瞬くアシユールに引き攣った笑顔を向ける。

「おはよ、アシユール！ …… き、着替えるの？」  
「……………」

こつくりと頷くアシユール。

どうしてそんなことを聞くんだ？ というように首を傾げている。

…… いやはい、その反応はご尤も。

しかしこれは私の沽券に関わる問題なので、どうか黙って聞いて欲しい。

「私これから洗面所使うから！ アシユール着替えるだけなら部屋でもいいよね？ ね？」

長い腕を引っ張りながら言う。

ああもう、早くそこから 出て来いやッ！ という何処かのプロレスラーのような言葉は、胸のうちに収めておこう。ここは出来る限り真面目に低姿勢にしようじゃないか。…… 若干不本意ではあるが。

しかし痴女扱いを受けるのはもっと不本意である。そんな称号を貰っちゃうくらいなら、いけ好かないアシユールに頭だつて下げら

れる。……いや無理かも。あは。

でも私なりに覚悟を決めてお願いしているのに。

私の希望に反してアシユールは動いてくれない。踏ん張ってるわけでもないのに、必死に引つ張っても動かない。おいこら、お前は石像か！ みなさん、こんなところに石像がありますよー！ 壊してもいいですかっ！

梃子でも動かない様子に若干イラツとしてしまったが、いやいやダメダメ怒るな六花冷静に！と自分に言い聞かせる。怒りに任せてアシユールを攻撃したら、反撃されて洗面所から締め出されちゃうかも。それはダメだ！

怒りを静めるために歯を食いしばりながら、相変わらず引き攣る笑顔で「どうして動かないのかな？」とアシユールを見たら、ヤツは節ばった長い指でお風呂場を示していた。

なんだ、お風呂か、なら問題な……大有りだわ莫迦！

お風呂入ったら、正面に鏡があるし、お湯を使って鏡が雲る前に肩の赤味には気づいてしまう。その上、深夜から今朝に掛けての数時間じゃあ、もしかしたら背中 of 爪痕が沁みるかも！？ そしたらアシユールは、何か痛えなー、とか思いながら鏡で確認して、おいおいコリヤア何の冗談だ？ ってなもんで爪痕にも気づいちゃったりして！！？

……………。

無理！

ダメ！

絶対っ！！

お風呂から出てきたアシユールにからかい倒される自分を想像し



て、背筋がぞわりと総毛だった。

ああでも忘れてたよ！ 確かに昨日（今日？）の夜アシユールは結構な量の汗を掻いていた。じつとりというよりも珠のように浮かんでいたから、そりゃあシャワーの一つも浴びたくなるよね。今は夏だし、身体もぺたぺたして気持ち悪いだろう。

だけどこっちだって譲れない。

ただ引っ掻いただけ、齧りついただけ、という痕なら何ら問題ないけど、今回の如何せん場所が悪すぎる！ あらぬことを想像させるには絶好のポイントをチョイスしましたね、おめでとう！ と誰かに褒められるくらいに破廉恥ポイントに痕をつけてしまったのだ。

ことの起こりが深夜の家族全員が寝静まっている時刻だった所為で、事実が無くても誤解だと主張しづらいものがある。むしろ誤解を受ける時点で不名誉過ぎる！

だから、傷がバレたら私は大変、大つつ変困るのだ。

けどシャワー浴びるなんて許さん！とか、流石にそこまで理不尽なことは言えない……。

もう、どうしたらいいのっ！とアシユールの腕を離せないままうろつろと視線を彷徨わせていたら、タイミングよく廊下の先からお母さんの声がした。

「朝ご飯できたから食べなさい！」

あああああ、天の助け……！

「ほ、ほらアシユールっ、ご飯だって！ シャワーなんて浴びてたら冷めちゃうし！ バラバラに食べたら片付けが出来なくてお母さんも大変だからね！ ね！？」

言いながらもう一度腕を引っ張ると、今度は抵抗なくアシユールが脱衣所兼洗面所から出てきた。

お母さんありがとう！ 本気で！

後で肩でもなんでも揉んであげるからね！！

心の中でお母さんを拝み倒しつつ、私はアシユールの背中を押し、居間へ向かおうとした。

「……………」

「わぶっ！」

なのに、アシユールが何故か途中でぴたりと立ち止まり、そんなに腕に力を込めていなかった私は思いつきりヤツの背中に突っ込んだ。……出会って三日、顔面強打は二回目です……。ちなみに後頭部は三回強打しております。

……正直、これだけ酷い仕打ち（半分以上は不可抗力だけど）を受けていると、アシユールの身体に傷をつけたことはもはや全く悪いと思わない。昨夜は申し訳ない、とか殊勝なことを思ったけど、今は全然まったく、これっぽっちも謝罪する気持ちは御座いません。むしろ自分のお綺麗な身体についた傷を見て啞然とするアシユールの顔を見てやりたい、くらいの気概がある。

しかし傷痕が発覚すると結果的に私の首が絞まるのだ。好奇心より自分の身の方が大事。それは自覚しているものの、この怒りはどこへぶつけたら……。

アシユールの背中に追突したまま、痛みと憤りにウーッと呻っていると、くるとアシユールが振り返った。寄りかかっていた回転ドアが急に動いたような状態になり、支えを失って少しだけよろめいてしまった。けど、なんとか踏ん張る。

恨みがましくアシユールを見上げたら、またしても不思議そうにヤツが私を見下ろしていた。……なんだよ、私の奇行は今に始まったことじゃないでしょ？ 自分で言っただけで悲しいけど……。

「何よ？」

「……………」

唇を尖らせ、不満も露わに問いかければ、アシユールはじつとこちらを見つめてから、スツと私の背後に視線を向け、不思議そうに何かを指差した。

……………。

ちよつ、怖っ！

あそこに幽霊が、とか言わないでよね！！？

「……………」

びくびくしながら振り返ったのに、後ろには何も無かった。

おいこら、脅かすにもほどがある！

流石に抗議の一つも言っただけでやろうと振り返ろうとしたら、肩を押さえられてそのまま押し出される。私は押されるまま数歩進んで、何すんだ、と今度こそ振り返った。

「……………？」

アシユールは何か言いながらまた何処かを指差した。つられて視

線をやると、すぐそこに洗面所が。

「……………」

あー。

……………。

使いませんけど。

って言ったら、不自然過ぎるでしょうか。  
これって所謂墓穴を掘った感じですか？

いやいやそんなことはない。

まだ誤魔化せる！ 何故なら今は……、

「ああ、うん、洗面所ね？ 私も朝ごはん食べてから使うから、  
いいのいいの！」

そう言って手を振り、アシユールを問答無用で居間まで引つ張っていった。

家族全員プラスいちで朝ごはんを囲っている間、私は悶々と考えていた。

一応さっきは何とか危機的状況を回避できたけど、あれはあくまでその場しのぎに過ぎない。突っ立っているだけで汗がキレイに洗浄されるわけでもなし、アシユールは絶対またシャワーを浴びたが

と思うんだ。遠慮はどうした、と思わなくもないけど、こればかりはクサイ方が迷惑だと思ったのかもね。

さてそこで問題。さっきは洗面所使いたいと言ったけど、ずっと洗面所を占拠しているわけにもいかない。何とかしてアシユールにお風呂を使わずに汗を流させる方法はないものか。

「……………」

こっそり嚙まずに白いご飯を飲み込むアシユールを視界の端で眺めながら、私の足りない頭にふと閃くものがあった。

二十三夏 不名誉回避に向けて（後書き）

六花はまたきつと口クでもないことを考え付いたに違いありません。

## 二十四夏 ミッションインポッシブル？

「アシユール！」

朝食を終え、お母さんと一緒に後片付けをしていたアシユールが客間に戻って来たところを捕まえた。

私は後片付けをしないのか、って？

え、だってあれってシンデレラの仕事でしょ？

私の今の仕事は客間の前で仁王立ちしてアシユールを待つことだもん。着替えなど取りに行かせてたまるか。あ、いや、着替えくらいはいいのか、うん。

待ち構えていたように私に声を掛けられたアシユールは、きょとんと目を瞬いている。今日はよく見る顔だな。

……それだけ私の行動がおかしいの？

いやいやそんなまさかあはははは。

……。

わかってるよッ！ 挙動不審なのは！

でもそんなこと今はどうでもいいのっ！

「ね、アシユールその髪、鬱陶しくない！？」

「……………」

唐突に私は切り出した。余計なものを一切省いた、実にスマートな走り出しである。

アシユールは私の若干鬼気迫る感じに引きつつも、首を傾げて自分の白金の髪を摘み上げてしげしげと見つめたりしていた。相変わ

らず<sup>むし</sup>雀りたくなるほど綺麗な髪だ。……十本くらいならいいかな？  
いやいやそれは半分冗談だけどさ、なんか意外と無頓着そうだよ  
ね、アシユールって。髪の毛もなんとなく伸びるに任せてるっぽい  
雰囲気がある。

アシユールの髪は、前髪は瞼を超えるくらいあつて、襟足も長め。  
ウルフカットって言うのかな？ ああでもトップは短くないから、  
純粋なウルフカットではないのか。でも襟足が一番長い部分で肩を  
超えるくらいあるから、日本の一般男性の髪を考えると随分長いよ  
ね。前髪も然り。

もともと綺麗な顔立ちだから、髪が長いことで中性的な顔に見え  
なくもない。ただ、体格がいいので女性に間違えるなんてことは絶  
対無いけど。

とにかく、夏も真っ盛りだというのに襟足が長いのは暑いと思う  
んだよね。

「私が切ってあげる！」

「……………」

胸を張って言ったら、アシユールの眉間に皺が寄った。……おい  
こら、その反応はどういう意味だ。明らかに私の腕を信用してない  
な。手先だけは器用なんだからね、私！

困ったよう眉尻を下げて一歩後退するアシユールに、私はこめか  
みがピクリと痙攣するのを感じながらも、忍耐強く、しかし二歩ほ  
ど詰め寄った。

アシユールの失礼な態度にいつもなら悪態をつくところだけど、  
目的のためには我慢！そして逃走されないように腕もがっちりホ  
ールド！本当は両腕を拘束したかったけど、私の片手で掴むには  
太い腕なので、左腕だけ両手でしっかり握り締めてやりました。ど  
うだ振り払えまい！



「大丈夫！ これでも大学進学で家を離れる前は孝太の髪の毛だ  
って切ってあげてたんだから！ あ、友達とかのも切ってあげてた  
よ。概ね評判だったよ！」

「……………」

若干名、切り方の練習をさせてもらって失敗したこともあるけど、  
まあ、ど素人ですし。失敗の一つや二つ、可愛いものだよね。あは。  
アシユールは「概ね」評判」と言っただけでどこことなく唇の  
端を引き攣らせたような……いやいや、私の眼には大歓迎の笑顔に  
見える。いつも通り、キラキラしてらっしゃいますから、何も問題  
はない。心眼って言葉は素晴らしい。

「夏なのにそんな長い髪じゃ暑いでしょ？ 汗掻いたときも首に  
張り付いて気持ち悪いんじゃない？ 私に任せて！ そんなお悩み  
は全部解決してあげるから！ うん！」

「……………」

一瞬、アシユールの世界では男女問わずあんまり髪を短くするの  
は駄目、とかいう風習があるのかな、なんて思ったけど、アシユ  
ールの態度はそういう意味での拒否じゃないみたいだから、大丈夫だ  
ろう。

それよりも、また一歩ヤツが後退したから、こちらも負けじと再  
度二歩詰め寄ってやった。逃がさん。

しかしアシユールが一步後退する度に二歩迫っていたら、何やら  
近くなりすぎた気がする。ヤツを見上げるのに首が痛い。でもまあ  
いつか。背に腹は換えられないというし。色々と圧迫感を与えて逃  
れられなくするにはもってこいだ。たぶん。

……。

あれ？ 圧迫感、感じてます、アシユール？ なんかむしろ見下  
ろされている私が圧迫感……ってコラ、見下ろすなよ！

内心無茶を言いつつ、若干アシユールの腕を下に引つ張って目線を合わせるように促しつつ、私は続けた。ぐいぐい引つ張ってたらちよっとずつアシユールが中腰になってきた。……笑える。

「そんなに心配しなくても平気だつて！ あ、一年以上も前までの経験だから心配なの？ そこは本当に大丈夫。何せ元力……いやうん、大学でも友達の髪切つてあげてたから！」

「……………」

元力レ、と言いそうになって慌ててやめた。

そんな妙な情報をアシユールに与えて、それをネタにからかわれたら堪らない。どうして別れたとか、理由を詮索されたりするのも御免である。……って、そこまで私に興味もないか。いやでも、何だか弱みを晒すようでイヤだ！

「あ、そうだ、証拠あるよ！ 確か携帯で写真撮つておいたんだ

」

「……………」

お尻のポケットに入れていた携帯を取り出して見せる。何か物珍しそうに眺められた。主に携帯を。

そういえば、ウチは高校に上がってからじゃないと携帯はダメという家庭内ルールがあつたから、孝太はギリギリ持つてないんだよね、携帯。お母さんもお父さんもあんまり新しい機械は得意じゃないみたいだし。って、今はそこは注目しないでいいんだよ！ 写真を見なさい、写真をつ！

「ほら、ね？ 綺麗に切れてるでしょ？」

「……………」

電子画面には高校の女友達の写真が映し出されている。じーっと画面を見つめていたアシユールは、じーっとアシユールを見つめる私にちらりと視線をくれてから、ようやく納得したのか小さく頷いた。なんか溜息が聞こえた気がするけどこの際聞かなかったことにしてやるう。観念したならいいんだ。

「うんうん、賢明な判断だよアシユール！ 流石だね！ よつ、この、金髪ロン毛野郎！ ははははは！ よしじゃあ、縁側のところで切るねっ。外に椅子置けば髪の毛落ちてても気にならないし！」  
「……………」

私はアシユールに台所の椅子を一つ持っていくように伝え、その他必要なものを調達しに走った。

別れるときになんか物凄く不審げな眼を向けられた気がしないでもない。……私何かおかしいなと言った？ テンションが上がっていたので、何を口走ったかあんまり覚えてないんだけど。

ところでどうして急に髪を切ってあげる、なんて言い出したかって話だけど。それは簡単。

髪の毛切った後、ついでに頭も洗ってしまおう、という魂胆なのだ。そこまでが一連の作業です、みたいな感じで。

ただ頭を洗ってあげる、って言うより自然でしょ？ んで、頭を洗ってしまえばお風呂に入る必要は無いわけだ！ お風呂に入らなくて済むなら、裸の状態で鏡だって見なくて済むわけです。つまり昨夜私がしでかした失態もばれません、と。

しかし問題は身体。身体の方が汗でペタペタして気持ち悪いと思うから、頭を洗っただけじゃ、結局シャワーを浴びたくなってしまう。だからそこが一番の悩みどころなんだけど……。

でもこれも朝ごはん中に頭を働かせて解決しているのです。

文明って素晴らしいよね。

科学の力、バンザイ！

みんな、思い出してみたい。

スポーツの後なんか、一時しのぎで使うアレを。  
いまや女子にも男子にも愛用者は多いはず。

そうです。

汗拭きシートがあるじゃないかっ！

という話なのです。

かなり強引かつ、アシュールが汗拭きシートとか似合わないさ過ぎるけど、お父さんのお古の服とか草臥くたひれたエコバッグとかのことを考えれば、かわいいものだよねっ！

もちろん、今日のところは この 私が 汗拭きシートの使い方を 手取り 足取り 説明してあげる所存でございます。

当然背中は上手く拭けないだろうから、この わたくしめが 僭越ながら 拭いて差し上げるつもりです。

私が爪でつけてしまった傷をこっそり避けて。

そしたらアシュールが誤って傷に触れて沁みたりして、コリヤ何だおい俺誰かに襲われてるぜ！ 的な展開は避けられるはず！ ついでに肩だつてさり気なく手を置いておけば、噛み痕もバレない！

素晴らしい計画！！

汗だくになった後にシャワーも浴びられないアシュールは少しだけ可哀相な気もするけど、ここはしばらく我慢してもらいたい。私だってギリギリのところまで自分の沽券を保っているのだ！

とにうとで とにかくミッション開始なのである！

## 二十四夏 ミッションインポッシブル？（後書き）

六花は毎日アシユールの身体を拭いてあげる気なんじゃないか。  
おバカさんですいません。孝太の姉なもので。

## 二十五夏 ファースト・ミッション

アシユールの首にきっちりタオルを巻いて、大きめの洗濯ばさみで固定する。

その上から切込みを入れたゴミ袋を巻いて、タオルと隙間を空けないように留めて服に切った髪の毛がつかないようにした。身体が多少はみ出てる部分は後で粘着テープとかを使えばいいよね。

「アシユール、長さの指定とかある？」

「……」

念のため聞いてみたけど、アシユールは少し考えてから首を横に振った。

「……指定がないならこの際、バリカンで思い切って坊主とかどうよ？」

実はこっそり、バリカンも用意してたりする。念のためよ？ 念のため。

アシユールは坊主なんてしたことないだろうし、新たなことに挑戦するのもいいんじゃない？

そう思っ、私はバリカンを手にした。スイッチを入れるとウィーンッと激しい振動音が鳴る。腕も鳴る。ふふふ。

「さ、アシユール始めるよ。危ないからジツとしててね！」

「……」

鼻歌混じりにバリカンを構えたら、何かを察したらしいアシユール

ルがガタンツとけたたましい音を立てて立ち上がった。……どうでもいいけど、その恰好、結構笑えるね。ビニールポンチョ、みたいな？　しかも透明なゴミ袋だから、シースルー状態！

「……、……！！」

アシユールが必死で私から距離を取りながら、何かを叫んでいる。うん、何を言っているか全然わかんない。えへ。

じりじりと距離をつめる私と、じりじりと後退するアシユール。この構図どこかで見たな、なんて思いながらにやにやする顔を抑えられずに迫っていた私だけど、アシユールの背後の盆栽が危険なことに気づいて、慌ててバリカンを下ろした。盆栽壊したらお母さんよりも怖いお父さんが出現する！

「はははは冗談だよ！　これは使わないから！」  
「……………」

シースルーポンチョのまま疑わしげにこちらを見るアシユールの姿に笑いを噛み殺し、バリカンのスイッチを切って縁側に置いた。両手を挙げて見せたら、アシユールは盛大な溜息を零しつつ首を振って疲れたように椅子に座り直した。うん、勘が鋭いのも大変だね。

実際、アシユールの坊主というのも見てみたかったけど、アシユールには流石にハードルが高いかと思ってやめた。美形は何をしても美形な気もするけど、自分の世界に帰ったときに揶揄われたりしたら可哀相だ、っていう私のささやかな良心が疼いたしね。

じゃあどつという髪型にしようか、ってちょっとだけ悩んだけど、どんだん日も高くなってきて暑さも増してきたから、とにかくハサミを通すことにした。



最初にハサミを入れるときはいつも緊張する。何せど素人だし。アシユールの髪の毛は、Ｔシャツを被せるときに不可抗力で触ったけど、改めてじっくり触れるとやっぱり綺麗な髪だ。張りがあって、太すぎず硬すぎず。今みたいに長い状態だと重みでしっとりサラサラのストレートに見えるけど、案外しつかりした髪質だから短く切ったら自然と立ち上がるかもしれない。整髪剤いらないかも。もちろん、ちゃんと整えようと思ったらスプレーとかムースがいるかもしれないけど。でも確実にハードはいらないはず。……髪の毛までオールマイティとか、どこまでも隙の無いヤツ。可愛げも無い！ もっとダメダメなくらいが私は……って何の話だコノヤロウ。とにかくど素人ながら、友達や孝太の髪を切っていた多少の経験を踏まえてつらつらと考えながら、ハサミを進めた。シャキシヤキと小気味いい音がする。

アシユールは伏し目がちで静かに身を任せていた。

髪と同じ色の睫毛も長く、伏せるとまるで憂いを含んでるみたいに見える。……変なところで妙な色気を出すんじゃないよ、まったく！ こっそりハサミが滑ったとか言ってちゃん切ってやるうかと思っただけど、後で私が酷い目に合いそうだったからやめた。主にお母さんの激怒に合いそう……。う。娘より美形男をとるなんて！

まあそんなことはどうでもよくて。

アシユールは注文を付けたくても日本語喋れないから出来ないだろうし、内心冷や冷やしているかも、と思うと少し笑えた。

まあ見ていたまえよ、六花様の腕前を！

最初は不純な動機だったけど、時間が経つにつれて他のことは頭になくなった。

一メートルもない近距離にしながら、一言も交わさずに髪を切り続けて、一時間弱くらいで完成した。我ながら慣れたものだ。

「出来たよ！」

「……」

縁側に置いておいた卓上用の大きめな鏡を取って、一枚をアシュールに渡す。もう一枚をゆっくり動かして後ろも見せた。

「どう？ 結構上手くいったと思うんだけど」

「……」

全体に短くしてしまおうかとも思ったんだけど、万が一失敗したら修正が効かないから、前髪を残して短くなりすぎないようにした。襟足の長かった部分は刈り上げるくらいの勢いでかなり短くして段差をつけたけど、両サイドは耳上あたりで切り揃えて、サイドから前髪に向かつて少し長くなるような感じに。

前髪は整える程度にしか切らなかったけど、後ろが無い分、大分涼しくなったんじゃないかな？

「……！」

鏡を見たアシュールは少し驚いたように目を見開いていた。……やっぱ私の腕を信用してなかったんだな。いやまあ、最初は揶揄ったりしちゃったし、いいけど。

「気に入った？」

覗きこむと、破顔して頷いてくれた。気に入ってくれたみたいだ。頷いた拍子に切った髪の毛が少し飛んで太陽に反射し、キラキラと舞い落ちてアシュールの周りで妙な効果を生んでいた。……捨てるとのまで綺麗とか、どんな？ やっぱバリカン……いやいや、しっこいからやめよう。うん。

でもやつぱり喜んでもらえるのは素直に嬉しい。今だから言うけど、ちよつとドキドキしてたんだよね。失敗したらマズいなあ、とか。ほら、そんなことになったら、今後アシユールに強い態度も取れなくなるじゃない？ 事ある毎にそれをネタに脅迫されそうだし……。それは私的に非常に困るのだ。色々と。……なんか負けたくないし。アシユールに頭が上がらない私とか、想像したくない！だから氣に入ってもらえたことに内心ホツと胸を撫で下ろしつつ、アシユールの頭を軽く払ってから被せていたビニールを外した。首に巻いていたタオルも取って、首元に張り付いている毛を落とし、一度振ってから、アシユールのこめかみやら首やらに浮いた汗を拭き上げた。

「あら、アツシユ、随分すつきりしたわね！」

さてこの後は……、とか思っていたら、通りかかったお母さんが口元に手を当てながら声を掛けてきた。なんか目がキラキラしてるけど……！ むしろ頬までほんのり染まってるんだけど！ 気持ち悪いからやめてくれないかなあ？

笑顔で頷くアシユールを横目に見ながら、引き攣る顔を隠すように後片付けをする私。母親の乙女な部分は子供としてはあまり見たくないものである。しかもその対象がすぐ横にいる場合はさらに。

お母さんは弾む声で言った。

「髪の毛の切れ端がついてるかもしれないから、直ぐにシャワーを浴びるといいわ。着替えは持ってたてあげるからね」

「……」

「……」

ちよつと待ったあああああ！

お風呂は駄目だっ  
て言ってるでしょ……!!

あ。

言  
っ  
て  
は  
な  
い  
か。

二十五夏 ファースト・ミッション（後書き）

坊主でもよかったんじゃないかな？

## 二十六花 セカンド・ミッション

「お母さん！ 着替えはいいから！」

「？ どうして？」

不思議そうに聞き返されて言葉に詰まる。

まさか、お風呂には入らせないから！ とも言えない。そんなことを言えば、ほぼ間違いなく阿修羅やらなんやらが出現する。怖い。ああもう、朝ごはんのときはお母さんに助けられたけど、今は逆に窮地に立たされているとか、世の中上手く出来てますね！ 何事も中庸、ってか！？ いや中庸の使い方微妙に間違ってるし。わけのわからないことを考えつつ、咄嗟にアシュールの腕を引っ張る。

「どうせだから、私が頭も洗ってあげようと思って！」

「……」

「……」

う。

二人してじっとこちらを見るのはやめてください。

わかっていますよ、おかしいことを言ってるのは！

普段の私のアシュールに対する行動を考えれば、ここまで構い倒すなんてどんな風の吹き回しだ、って言いたいのもわかる！

だけどこれにはちゃんとした理由があるのだよ、理由が！ 言えないけどー！

「私つてば、シャンプーも上手くなったのよ。大学で元：友達の頭をついでに洗ってあげたりしてね？ シャンプーもカットも出来るなんて、もしかしたら私、美容師になれるかも、なんて！ あははははは」

「……」

「……」

いや全国美容師さん、その卵さん、ごめんなさいっ！

そんな甘い職業じゃないのはわかってますが、ここは私の苦しい言い訳に使わせて！ 苦しい言い訳とか自分で言ってる時点で泣けてくる私に、同情してください！

「アシユールもほら、擬似美容院体験が出来るじゃないあははははは」

「……」

「……」

なんか二人の視線がちょー痛い。そんな、不審者が見えるような目はやめて！ 私の空笑いに痛々しそうに眉を顰めるのもやめてくださいお願いします。

というか、約一名、唇の端がひくりと動いたの、私は見逃さなかったぞ。なんか知らないけど、私の挙動不審を面白がってるでしょ。アシユール、君だよ！ 明らかに笑いを堪えているの、気づいてますけどっ！？

掴んだ腕を抓ってやろうかと思ったら、するりと逃げられてしまった。内心舌打ちしていたら、突然ぐいっとな肩を引き寄せられて視界がぶれる。何事？

「……………」

アシユールがお母さんに何か言って、そのまま私ごとクルリと方向転換すると、縁側から家に上がり、洗面所に向かつて歩き出した。引つ張られる形になっていた私は縁側で躓きそうになったけど、アシユールが何でもないとこのように抱き上げてくれたので転ばずに済んだ。上手い具合にサンダルも脱げたので家の中を汚すこともなく……って、これ全部計算しての行動だったら怖いな。……偶然だよな？ 偶然！

まあそんなことはどっちでもよくて！ とにかくこれって、頭を洗ってあげるといふ私の主張をアシユールは受け入れた、ってことだよな。

さっきまで人のことを不審げに見ていたくせにそれこそどんな風の吹き回しだ。まさか何か企んでいるんじゃないよね？ かなり身構えてしまったけど、よく考えたら私にとっては願ったり叶ったりなので、結局は便乗することにした。

縁側で取り残されて目をしばたいているお母さんに慌てて叫ぶ。

「椅子とか後で片付けるから！」

主にアシユールが。

とか胸のうちでちゃっかり付け加えつつ、アシユールに引つ立てられるまま洗面所に向かった。縁側で抱き上げられたのはわかるけどもう下ろしてくれてもいいんじゃない！？

そんな感じで洗面所に着いたはいいいけど、本当の美容室じゃない



から当然そのままシャンプーが出来るわけじゃない。だって、背凭れが倒れる椅子とか無いし。

だからと言ってアシユールに屈んでもらって洗うのは流石にアシユールが可哀相だ。洗面台はそんなに高くないから腰に負担が掛かりすぎるだろうし。じゃあお風呂でやるか、なんてことにはなるわけもなく。思案した結果、かなり面倒なことをするハメになった。低めの丸椅子の上に座椅子を置いて、それだけじゃ不安定すぎるので、背凭れの下に支えになるようにもう一つ、丸椅子よりも少し高さのある椅子を台所から持ってきた。それらを組み合わせでなんとか安定を図ったんだけど……。

正直、自分でもここまでする意味を見い出せないデス……。

自分自身でさえそうなんだから、アシユールならなおさら、ここまでして俺の頭を洗いたいのかコイツは、とか思っていそうで、実は準備をしている途中あたりからあんまり顔を見られなくなった。色々突っ込まれるのも御免だ。にやにや笑いなんて見た日には、アパートに逃走してそのまま帰って来れなくなっちゃうかもしれない。恥ずかしいやらム力つくやら情けないやら。乙女心って複雑だね。……乙女心って何？

ドツボに嵌まっている自分に落ち込みつつ、気を取り直してアシユールの洗髪に取り掛かった。

家は純和風で古いものだけど、洗面台は二年くらい前に配水管が壊れたときに新しいものに取り替えたばかりだ。なので周りからは浮いているけど、蛇口が伸びるようになっていてシャワーになるという便利な機能がついていた。現代人の朝シャン用の設計だろうか？ 何はともあれ、今の状況からすると大助かりだ。

シャワー機能のお陰でシャンプーもスムーズに流すことができる。

これが古い洗面台だったら、お湯を手で掬いながら流さなきゃいけないから、中々泡を落とせないところだったよ。

洗い始めてから直ぐ、アシユールからは小さく吐息が零れた。

早く洗えとばかりに自分でわざわざ私を洗面所まで連れて来たのに、微妙に緊張していたらしい。

まあそんな緊張も私のフィンガーテクニックを前に長くは続かなかったというわけだけど。

「……ねえ、アシユールは人から頭洗ってもらうの、初めてなの？」

「……」

なんとなくそんなことを聞いてみたら、目を薄っすらと開いたアシユールが小さく頷いた。

ふーん、と気のない返事を返したけど、私は内心驚いていた。

実は私は、異世界でのアシユールは身分が高かったんじゃないかと思っていた。身のこなしを見ていて、どことなく落ち着きというか品のよさなものを感じていたから。背筋だって猫背になっているのは酔っ払って寝惚けていたときくらいだし。

よくあるじゃない？ 身分の高い人は何人もの女の人にお風呂も介助してもらっていて、身体とかも自分では洗わない、みたいな。

なんとなくアシユールもその口だったりして、とか考えていたんだけど、どうやら違ったみたいだ。何故かホッとしている自分に首を捻りつつ、その後は特に何も喋らずに洗髪を終えた。

終わったよ、って声を掛けたら、アシユールが眠そうに目を開けたので、ちよっと笑ってしまった。



二十六花 セカンド・ミッション（後書き）

そろそろドツボの終着点。

## 二十七夏 ラスト・ミツション

「アシユール、やっぱりまだシャワー浴びたいよね？」

タオルでがしりと頭を拭いているアシユールを見上げて、自分で話題を振る。これは避けて通れない話題だし、私の取るべき行動は一つなので、さつさと終わらせてしまった方がいい。

タオルの隙間からこちらを見たアシユールはちよつと首を傾げている。どうしてそんなことを聞くんだ、とても言いたげに。

いや聞くでしょ、普通。朝からシャワー浴びたがつてたし。え、もしかしてもうシャワー浴びたくなかったの？ 頭洗ったから必要ないって？ いやいやそんなはずは。頭洗っただけで身体もすつきりするなら、ボディソープとかいらないし。

「汗掻いてたし、身体ぺたぺたするでしょ？」

私の問いに頷かないアシユールを怪訝に思いながら尋ねたら、何故かまたしても頷かないままジツと見つめられた。

だから何の視線なの。こっちを見るな。

あまりに凝視されるもんだから目潰しでもしてやろうかと危険なことを考える。もちろん本気じゃないので二本突き出した指はこっそり仕舞い、代わりにアシユールの腕に触る。

そんなに酷いものじゃないけど、アシユールの腕はやっぱり多少はペタペタした。頭だけすっきりしても、身体がこんなじゃ気持ち悪いだろうに。

「ほら、ぺたぺたしてるじゃん。しょっぱいくらい汗掻いてだし、気持ち悪いでしょ？」

「……」

「……」

「……」

……？

え。

私、何かおかしいなと言いました？

私の台詞を聞いた途端、髪を拭いていた手を止めたアシユールが片眉を上げ、なんか物凄く複雑な表情をした。

驚いたような、呆れたような、困ったような、感心したような、……照れたような？ ついでに笑いを噛み殺したような？ あとちよつと嬉しそう……？

とにかく全部をひつくるめて表現に失敗したような顔。

何だろう？ 私に『ぺたぺたしてる』って言われたのがショックだったとか？ いつも爽やか好青年で通しているのに、汗の余韻がバレて恥ずかしかったとか。

いやでも女の子じゃあるまいし、そんなこと気にしないよねえ？それに、孝太に付き合わされて炎天下の外でサツカーしていると、きも平気で汗だくになっていたし、それで帰って来たときに『うわあ、汗だく！ 寄らないで！』とか二人ともに向かって私が叫んだときも反応は苦笑するくらいだった。

汗掻いてたのは事実で、しょっぱかったのも本当。

ということは、『気持ち悪いでしょ？』と言ったところをアシユールは曲解して、私がアシユールを気持ち悪いと思ったように捉えたとか？

……いや苦しいよ。苦しいでしょ、この解釈は。

どう考えてもアシユールがそんな被害妄想的な捉え方をするとは思えない。しかも、もしこの解釈が正しかったとしたら、照れと笑いと嬉しさの表情はどっから来たの、って話になる。自分を気持ち悪いと言われてそんな感情を見せるやつはドのつくエムの人しか有り得ない。

えー。もしかしてアシユールってそっちの人？

冗談半分でそんなことを考えていたら、なんだかよくわからないけど、アシユールが勝手にダメージを受けたように顔を片手で覆ってしまった。

まさか私の思考が読まれたとかないですね？

一人じんわりと冷や汗を浮かべる私を他所に、大きな溜息をついたアシユールは心持ち肩まで落としている。なんか物凄く憂いを感じるけど、アシユールがなんでそんな状態になったのか全く意味がわからない。誰かこの人の頭の中を説明してくれないかな。

私は理由のわからないアシユールの行動に物凄くモヤモヤしつつ、それでもヤツの肩を叩いてやった。

「なんだか知らないけど、元気出しなよ」

「……」

指の隙間から恨めしげな視線が飛んできた。

おいこら、慰めてあげてるのに何でそんな怖い顔するんだ。私何も悪くない！

恩を仇で返された！とか大袈裟なことを考えながらも、いつまでも洗面所に籠もっているわけにもいかず、私はアシユールの腕を引っ張って廊下に出た。

「とにかくちょっとさ、部屋で待ってて。シャワー浴びたいだろうとは思っけど、髪も洗ったし、身体洗うだけにお風呂入るのも面

倒でしょ？ そんなときのための便利グッズを持ってきてあげるから！」

私って優しい！ そう言ってアシユールを置き去りに、私は二階の自分の部屋にダッシュした。

急いで目的のものを手に客間に飛び込むと、アシユールがTシャツを脱ごうとしているところだった。

「ちよつと待った！」

大慌てでアシユールの腕を押さえ込む。  
危なかった！ 勝手に脱いで歯型やら爪痕を発見されたら、これまでの努力が全て水の泡に！

「ほら見て、これ。これ使えば、汗を拭き取れるだけじゃなくて肌もサラサラになるし、すっごくいい匂いもするんだよ！」

「……………」

製品会社の回し者のようにメリットを上げ連ね、ピンク色のケースをアシユールの目の前にずいっと差し出す。

ふんわりと甘いピーチの香りが漂った。

ピーチの香りが……

「……………」

「……………いい匂いでしょ？」

「……………」



ものすごく微妙な顔をしつつ、アシユールはぎこちなく頷いた。  
あー、うん。わかる。わかります、その気持ち。  
たった今、私も思ったよ。

ピーチの香りを纏うアシユール……？

……。

微妙！！

だがしかし。これしかないから我慢してもらうしかない。私は桃が大好きだ！ 桃バンザイ！

何か言いたそうなアシユールを無視して、ケースの蓋を開ける。途端により濃厚な桃の甘ったるく、そして可愛い香りが出た。

あー、完全にイメージはピンク色。めるへんピンク。ろまんちっくピンク。乙女色ピンク。

まるでケースの周りに蝶々の飛び回るお花畑が広がったような気がした。

一層眉尻を下げるアシユールと、愛想笑いを浮かべながらシートを取り出す私。

何だろう、何かとても大きな間違いを犯している気がしてならないんだけど……。いやいや、たとえアシユールと桃の香りの組み合わせの違和感が半端なかつと、わが身可愛さには見て見ぬ振りをするしかない。痴女扱いは困ります。

私は意を決して、アシユールのＴシャツに手をかけた。

何となく逃げ腰に見えるアシユールに愛想笑い全開で詰め寄る。

「私が全部してあげるから、アシユールは目を瞑ってて？ 絶対に開けちゃ駄目だからね？」

……いよいよ危険な香りがしてきたと感じたのが、どうか気のせいでもありますように……。

二十七夏 ラスト・ミッション（後書き）

危険な香りしかしません。ピンク色の。

アシユールが複雑な表情をした理由、伝わっているでしょうか……？

## 二十八夏 やっぱりインポッシブル

アシユールが目を瞑ったのを確認して、Ｔシャツを脱がす。

相手の意識がある分、深夜のときよりもずっと脱がし易かった。

現れた肌は夏の日差しを反射して白く煌く。なんて美白。こいつは今、美白に励む全日本女性を敵に回したな。

……いやそれは無いか。

むしろ日本人女性のほとんどが味方につくに決まってる。なんたってこの顔だ。日に透ける白金の髪に同色の長い睫毛。トラブル知らずの理想の肌と絶妙に配置される顔のパーツ。どうやったって奇麗としか言いようがない。

小癩な。

あ。もちろん私は“ほとんど”には入らないからね？ 男なら小麦色に焼けたくらいが健康的でよろしいと思いますよ。はい。

いやうん、私の好みなんてどうでもいいね。机の奥深くに追いやられた元カレの写真よりもどうでもいい。……あれ？ もう既に燃やして捨てたんだっけ？ まあいつか。どうでも。

私はまずアシユールの露わになった腕に汗拭きシートを添わせた。言いたくないけど最初はちょっと緊張していたみたいだ。妙にゆっくりと撫でるように汗を拭き取っていた。ただ途中でからもどかしくなった。というか、ゆっくり丁寧に拭いている自分が居た堪れなくなってしまった。これじゃあまるで私がアシユールに仕えるメイドさんか何かのよう。

そうだよ、ここはパパッと終わらせる場面じゃないか！ 何をやってるんだ私は！ むしろ垢すりのごとくガシガシやってやって

もかまわんくらいだよ！

我に返ってちらりとアシュールの顔を窺ったけど、俯き加減のヤツは大人しく目を閉じて身を任せている。……かと思いきや、薄っすらと目が開いていた！

「ちよっ……！」

おいコラ、齒あ食いしばれ！　じゃなかった、目え閉じろ！　と言おうとして、慌てて言葉を呑む。

声を発したことでアシュールがこちらを向こうとしたから、慌ててアシュールの肩に手を乗せた。ベシツとか結構な音がしたけどどうでもいい。たぶんあとで赤くなるだろうくらいには勢い余っちゃったけど、孝太が今何処で何をしているかよりもどうでもいい。……あれ？　あいつ朝ご飯のとき居たっけ？　まあいいか、どうd(略

それよりも本当に、危なかった！

私は何でアシュールの肩を叩い！　触ったかっていうと、もちろんその下に昨夜つけてしまった歯型があるからだ。

悔しいことにアシュールの肩あたりまでしか身長のない私なのでアシュールがこちらを見下ろしたら、肩の噛み痕が視界に映ってしまっ！　間一髪、隠せたからいいけど。

アシュールは私の暴挙を怒るでもなく、愛想笑いを浮かべる私を暫く見つめた後、ほんの一瞬だけ自分の肩に置かれた私の手を見て直ぐに無表情かつ無言で顔を正面に戻した。

無表情かつ、無言で。

もう一度言おう。

無表情、

かつ、

無言で。

……。

何でしょう？ この沸々と胸に湧き上がる怒りは。

もう少しリアクションをとって頂きたい！ と思うのは私の我儘ですか。

というか、そおそもなんで無表情よ？

物凄く感情の抜け落ちた顔は怖くすらあった。

見たことのないアシュールの様子に眉を顰めつつ、物凄く腹立たしく思いつつ、こんな状態（アシュール半裸）で詰問するわけにもいなくて、私はヤツの身体を拭くのに集中することにした。決してアシュールの無表情が怖かったわけじゃないよ？ ツツコム勇気が無かったとかじゃないからねっ？

深夜に行燈の頼りない明かりのもとで見たアシュールの身体だけど、窓から燦々《さんさん》と差し込む夏の太陽のもとだと、無数の傷がやけに目についた。

深夜のときだって爪痕以外の傷には気づいていたけど、今は薄暗がりよりもよく見える。改めて見たらその多さに少し驚いた。

均整の取れた綺麗な身体には間違いないし、隆起し無駄を省いて筋すら浮かぶ筋肉も美しさの見本みたいで、それはいたるところに散らばる傷にだって侵されない。傷がどれだけあってもアシュールの身体を醜いなんて思わない、思えないってことだ。

だけど、私は思った。



した。

何処の誰だろうね？ 『全部私がしてあげるから』とか言ったお嬢さんは。どうせ私は口だけですよ、けっ。

顔に集まる熱をおさめられないままやさぐれた気分に移りつつ、アシユールの背後に回る。

そこには紛うことなき昨夜の爪痕。比喩なんかではなく。

奇麗に四本の赤い線が平行に走っている。血が滲んだらしく、濃い赤茶の瘡蓋<sup>かさぶた</sup>が薄っすら出来ているところがあって、羞恥心に代わって申し訳ない気持ち<sup>かたじけなく</sup>が浮上する。

そういえば最近、爪切りをサボっていたから私の爪は凶器なんだった、と今さらながらに思ってしまった。

シートを新しいものに替えて広い背中を拭き始める。爪痕の部分は特に慎重に、傷に触れないように気を配りながらシートを滑らせた。

そこで、ふと気づく。

あれ？　なんか……揺れてる？

せっかく傷を避けているというのに、手元がブレてやり辛い。

なんでだ？　とか思いながら視線を上げたら、アシユールの肩がふるふると震えていた。

え。な、何？

もしかして痛かったの？　いやでも、こんなにたくさん傷をこさえている人が、爪痕に触れるか触れないかくらいの些細な痛み<sup>ちがひ</sup>に肩まで震わせる？

疑問だらけでアシユールの正面に回ると、



ちょ、笑ってる！

アシユールは思い切り笑いを堪えていた。

何よ、もしかして脇弱かったとか？

呆然とアシユールを見ていたら、一頻り笑ったアシユールがいまだに込み上げる笑いを振り切るかのように俯けていた顔をあげた。銀河の瞳に笑みの余韻を宿したまま、一歩踏み出す。正面にいた私は思わず仰け反った。

「ちょ、な」

何よ、と混乱のまま叫ぼうとしたけど、その先は言えなくなった。

「！！」

踏み込まれて重心を踵に乗せていたのに、その足を思いつきり払われた。それはもう、スパンツ、と小気味いい音がするほど遠慮なく。

気づいたときには仰向けに転がっていて、私の上にはイイ笑顔のアシユールがいた。

何でこうなった？

私は呆然とアシュールを見上げる。

思い切り足払いを受けた割りにどこも痛くないのは、床に倒れる前にアシュールが背中と足を支えてくれたからだ。

…… って、“くれた” と言ってる場合じゃないよね！？ 明らかに蹴倒したのはアシュールだし！

というか結局、何でこうなった？

四度目の後頭部強打は避けられたけど、問題はそこじゃない。

さっきまで私はアシュールの身体を自分が仕出かしたことへの少しの罪悪感とともに、丁寧に拭いていた。それでも一応、考えなしの行動だったと反省はしているもので。

それが、突然アシュールが笑い出して、何だコイツは脳みそ爆発したか？ とか思っているうちに今の状態だ。

……。

えー？ 何で？

状況を整理してもやっぱりわからない。どうして私は畳の上に倒されたんでしょうか？

混乱のあまりいつもよりも冷静に（混乱して冷静になるとか意味わからないけど）なって、呆然と頭の中で考えていると、しばらく楽しそうに そう、物凄く楽しそうにこちらを見ていたアシュールが徐に動き出した。

なっ、に……っ？

大きく厚い掌が頬に添えられた。

丸い形をなぞるように滑る。

目の前に迫る、楽しそうに細まった銀河がほんの少しだけ揺らいだ気がした。

それでもアシユールの手は躊躇わずに顎のラインを撫で、するりと首筋を伝う。

触れるか触れないかの瀬戸際で、全ての感覚が持っていかれていくみたいだ。

背筋を何かが駆け上がった。

無意識に眉が寄り、定まらない視点を誤魔化すために目を細める。

ヤバイ

その単語がわんわんと頭の中で反響した。

だけど機嫌よく踊る銀河の瞳からは目が離せない。

私お得意の悪態は何処にいった？

もしかして開店休業中？

いやいや開店してるなら休業すんな！

罵倒が振るわない。

脳みそが働いていないのがわかるというものだ。

頭も回らなければ口も開けず、身体すら自由に動かせない。

私は馬鹿みたいにアシユールの瞳を見つ……睨んでいた。

その間もアシユールの手は止まらず、首筋から降りてきた指先が鎖骨の窪みをなぞり、肩口までいってまたゆっくりと戻ってくる。

思わせぶりな動き。

産毛に触れるだけのような微かな感触が余計に熱を残していくように、腹が立つのに振り払えなかった。

鎖骨と鎖骨の間、その溝をくるとひと撫でした指先が身体の中を通り、肋骨に沿って進み、わき腹を撫でた。

倒れた拍子に捲れたＴシャツの裾から覗く肌を、指先が直接掠める。

「っ！」

ひくつと喉が鳴りそうになったのを寸でのところで我慢した。

意味がわからない。

何でこうなった……？

繰り返す言葉も意味はなくて、ただ胸の中で浮遊しては消えていく。

ぐつと唾を飲み込んだのは私のはずなのに、視界の端でアシユールの喉仏が上下するのを見た気がした。

休憩とばかりに脇腹でほんの少し停滞していた右手が動きを再開する。

腰を撫でて、ホットパンツに到達し、皺を越えていく。

剥き出しの太腿に硬い皮膚の感触。

信じられない。

ヤバイ。

空気が薄い。

誰かエアコンつけて！

妙に熱気が籠もっている気がする。

脳みそ溶ける！

そう叫びたいのに、きゅうきゅうと喉を締め付けるような感覚が邪魔をした。

力加減はずっと変わらず、触れるか触れないか。

その状態で膝の辺りまで滑っていったアシユールの掌は、再び上昇を始めた。

唇が乾く。

そうは思っても舐めて湿らせることすら出来ず、私は固まったまま、ひたすらアシユールの底の見えない銀河を覗いているしかなくて。

その銀河の深遠に焰が点ったような気配を感じた。

気づけば私の心臓が無駄に過労気味だった。

まるで身体の中から警鐘を鳴らすみたいに内側から胸を打ち鳴らす。

また

私が出来ないでいることを、アシユールがやってしまう。

形のいい理想形の唇から真っ赤な舌が覗いて、ちらりと自分の唇を撫でていった。

ほんのちよつとその妖しげな仕種に気を取られている間に、腿を上ってきたアシユールの手がホットパンツの裾で行き止まる。

行き当たった裾を正面から外側に向かってなぞるように動いた指先が、僅かに裾を潜った。

たった一センチほだけど、そこは隠されている場所だ。

下着や水着にでもならない限り人目に触れない。

そんな部分に、自分ではない人間の 男の指が、そつと滑った

んだ。

「あつ！」

堪えきれず声が洩れてしまった。

蚊の鳴くような声でも間近にいるアシユールには聞こえたらしく、事態を招いた当人がハツと息を呑んだのがわかった。

まるで目が覚めたみたいな反応だ。

どこにトリップしてやがった、精神だけ故郷に帰ってたとか言うわけじゃあるまいね！？

信じられないことに、私の呼吸は乱れている。

何でだ。

口に出来ないようなポイントを直接的に刺激されたわけでもないのに。

混乱にブレる私の視界とは逆に、どこか焦点が狂っていたようなアシユールの瞳には力が戻り始めていた。

対照的な二つは短時間交差して、先に逸らされたのは闇より深い銀河の方だった。

さっと一瞬下げられた金の頭。

切ったばかりの白金を流して次に見えたアシユールの顔には、  
…悪戯っぽい笑みが広がっていた。

何……え？

濃密な空気が霧散した。

アシユールはにこにこしながら未だに自失していた私の両手を取り、一層笑みを深くして私の手を背中へと導く。

状況についていけずされるがままの私。

アシユールがゆっくりと上体を倒し、太陽光に照らされた眩しい美貌が降りてくる。

私はそれでも動けなくて、ついにアシユールとの距離がゼロになった。

「……………」

「……………」

誰か説明してくれませんか。この状況。

後頭部を支えられ、少しだけ浮かされた私の頭。

口元は……、アシユールの肩口に当てられている。

うん、私が何がなんでも隠そうと画策していた歯型にぴったり合わせるように。

先に誘導された両手はたぶん、間違いなく、爪痕に合わせられていると思われる。

……………。

だから何でこうなった！！

二十九夏 陽炎、塵気楼、… 現実（後書き）

二人とも我に返っていただけてようござんした。



## 三十夏 現実には甘くない

何でこうなったっ！？

いや、前話と同じ出だしで申し訳ない。  
しかし聞いて欲しい。

むしろ聞かせて欲しい。

今、現在の体勢の意味はナンデスカ？

……。

わかっています。

おかしな雰囲気になっていたところから一変して、わざわざアシ  
ユールがこの体勢をとったのには、もちろん理由があるんだろう、  
って。

当然ながら、私の歯型や爪痕と無関係なはずがない。

アシユールは意識的に私の頭を自分の肩に持っていったんだし、  
手だっであえて誘導したんであつて偶然なんかじゃない。

つまり何だ。

全てバレていたと？

抱きしめられるみたいに頂を支えていた手がゆっくりと下ろされ、アシユールが私の顔を覗き込む。

にやにやと形のいい唇が弧を描き、瞳が何かを期待して踊っている。

真っ白になっている私を余所に上体を起こしたアシユールが手を伸ばしてコンコンと行燈を叩いた。

それは昨日の深夜、私がこの部屋に入る切っ掛けとなった忌まわしい行燈に他ならない。

つまり何だ。

全て 覚えて いる と ？

確かに、酔っ払って寝惚けていたからといって、記憶が完全に飛ぶとは限らない。

かくいう私も、ふらふらになるまでお酒を飲んだところで、記憶は消えない方だ。いやうん、二十歳になったばかりでふらふらになるまで飲むなよ、って話なんだけど、そこはそれ。ツッコミはなしの方向でお願いします。誰しも経験することでしょうそうですね。

昨夜のことをアシユールは何も覚えていないはずだと思った、それは私の落ち度だと思う。お酒を大量に飲ませたのは私だし、寝惚けてもいるみたいだったから、記憶なんて残らないだろうと思いつ込んでいた。

それが、まさか行燈を消しに来たんだろうと予測を立てるほどにはつきりと覚えていたなんて。

でもじゃあ何？

今までの私の行動って？

私が必死にアシュールの身体につけてしまった傷を隠そうとして  
いるのに、アシュールは気づいていたわけ？

いつから？

どこから？

違う、そんな問題じゃない。

大事なのは、アシュールは全部知ってたのに私の行動を止めな  
かったってことだ。

その理由に考え至ったとき、カツと身体に熱が集まった。

アシュールに身体をなぞられているとき以上の熱。

羞恥心とか、腹立たしさとか、情けなさとか、そんな類の感情で  
目の前が赤くなる。

「~~~~っ！」

ずっと、自分でも意味不明になるような馬鹿な行動をとっていた  
と思う。

途中何度も自問したくらいには、自覚があったつもり。

でもそれだって、私自身が恥ずかしい思いをしないためには必要  
だと思ったから出来たことで。

だから、アシュールが昨夜の記憶を持っているなら全然話が変わ  
ってくる。

要は、私は余計なことをしまくったわけだ。

アシュールが一人でお風呂に入るのを阻止して、延長線上で髪の毛を切って洗ってあげて。

その上、私は何をした？

アシュールのＴシャツを脱がせて身体を拭いたんだよ！

身体の不自由なおじいちゃんおばあちゃんでもなく、カレシでも  
ない男の身体を、だ！

改めて考えればなんて恥ずかしい行為だろう。

何も知らない男が相手なら、勘違いをしてもおかしくない行動だった。

朝から周囲を纏わりついて、せっせとお世話をして。

そんなこと、女の子にされたら男の人はどう思うだろう。

そうだ、そう考えると、アシユールがもし何も覚えていなかったとしたら、私を蹴倒してあんな破廉恥な行動を取った理由も理解できる。

私の行動を自分に気があると勘違いして、据え膳食わぬは男の恥とも思っ手を出してきた。そう説明がつく。

でも実際、アシユールは全部覚えていた。

それは、私は何を目的にしてアシユールを構い倒し、拳動不審な姿を晒していたか、っていうことにも気づいていたってことだ。

アシユールにモーションかけていたわけじゃない、って知ってたはずだ。

それなのに、どうして誘われていると勘違いした結果のような行動をとったのか。

答えなんて一つしかないじゃないか。

アシユールは、内心笑っていたんだ。

私が必死に右往左往して傷を隠そうとしている姿を見て、笑っていた。

そう考えてみれば、髪を洗ってあげるのだとお母さんの前で必死になっていたとき、笑いを堪えていたのはどうしてだったのかわかる。

始めは私の行動がおかしいからだと思ったけど、そうじゃなかったんだ。ううん、私の行動は確かに可笑しかったんだらうけど、それだけじゃなくて、傷を隠そうと必死になっている私が面白くて仕

方なかったんだ。

髪を洗うのを了承してくれたのだった、私がいかに馬鹿な行動ばかりとるから、どこまでやるのか見てやろうとしたに違いない。

それだけじゃない。さっきだってそうだ。

私がアシユールの身体を真剣に拭いているとき、こっちを向いたアシユールから噛み痕が見えないように肩を抑えた。それを随分無表情に眺めてアシユールは正面に向き直ったけど、あれはきっと笑いを堪えている結果だったんだ。

込み上げる笑いを殺すには、何も喋る余裕がなくて、かつ無表情になるしかなかったんだろう。

背中を拭いているときだって、何か揺れてるなって思ってた前に回り込めば、アシユールは盛大に笑っていた。ついに笑いを堪えられなくなっただってわけだ。

アシユールは、ずっと私の行動を笑いながら見てたんだ。

まだある。

私を畳みに蹴倒して、身体を撫でたこと。

きつと、あれは私をからかって面白がっていたんだ。

私の行動の意味なんて本当は全部知っているくせに、誘われたと勘違いしたみたいに振舞って見せて、呆然とする私の反応を見てまた笑っていたに違いない。

覆い被さってきたときに見えた銀河色の瞳が踊っていたのは、そういうことだったんだ。

もしかしたら、もっと動揺して顔を真っ赤にさせる乙女な反応を期待していたのかもしれない。生憎、こっちは恥ずかしがるほどの余裕もなかったけど。

つまり、私はずっとアシユールに踊らされていたってわけだ。  
知らずのうちに、笑いものになっていたわけだ。

## サイアク

目まぐるしく考えて全ての帰結に達したとき、サッと頭から熱が引いていくような思いがした。

私、馬鹿みたい

「……っ」  
「！」

私は思いつきアシユールを押し退けた。

アシユールは既にほとんど上体を起こしていたし別に私を押さえつける気もなかったようで、簡単に私から身体を離れた。

にこりともしない私に驚いたのか、少しだけ目を見開いているアシユールの顔が視界に映ったけど、真正面からそれを確認することもなく、私は客間を後にした。

無性に腹が立って、何も考えられなかった。

ただ胸のうちに、馬鹿みたい馬鹿みたい、と、そればかりを繰り返していた。

三十夏 現実には甘くない（後書き）

お怒り。

アシュールきよとん。

### 三十一夏 大人の意識、子供の心

最悪な気分とはこのことだ。

せつかくの大好きな夏も心が冷んやりしていて台無し。

いつもなら気温が上がるほどに夏を実感して嬉しくなるのに、今はその熱気がただただ鬱陶しいだけだった。

アシユールの部屋から逃走……じゃなかった脱走……でもなかった、えーっと、とにかくアシユールを客間に置き去りにしてから半日、私は物凄く嫌な気分でその日を過ごした。

自然、仏頂面になる顔を隠せず、そんな私の顔を見た孝太の顔が引き攣って『怖い！』とか言ったのは知っている。でもそんなアホ孝太に姉的制裁を加える気分にもなれず。

孝太でそれだから、当然アシユールなんかとは目も合わせない。そんな心の余裕は微塵もなかった。

自分の必死の行動が実は散々笑われていたんだと気づいて、それでも笑顔で過ごせる人なんているんだろうか。少なくとも私は無理。

すっかり触られたわけじゃなくても身体をからかい混じりに撫でられて、動揺している私を面白がっていたのかと思うと女の子として怒り、憤り、羞恥以外に覚える感情なんてない。まんまと混乱して息まで乱れていた自分を殴り飛ばしたい程度には、自分にもがっかりしていた。

だから、ただの悪戯だし許してやろうじゃないか、なんて直ぐに思えるはずもない。

私の愚行を見て黙って楽しむにしても、アシユールは色々と趣味



が悪すぎる。

正直、どこかでアシュールに失望も感じていた。

たった三日でも、私はアシュールの大まかな人となりを把握した  
と思っていた。

ヤツはどんなに大人気なく私に対抗してきても、結局は私よりも  
ずっと大人で冷静なんだろうって、悔しいけど認めてた。

ちゃんと越えちゃいけない境界とか、女の子に対する加減みたい  
なものをわかっているんだと思ってたんだ。そういう部分を、凄  
いな、って感じてた。

なのに、女の子に押し掛かってあらぬ予感を起こさせるような行  
動をとって、それで動揺する様を見て面白がるなんて、男として最  
悪だ。

それに、もしも私が本気にしたらどうする気だったんだろう。

有り得ないけど、私がアシュールの動きの挑発に乗って、“その  
気”になっていたら？

そしたら応えていたんだろうか。あんな真昼間の、すぐ近くを孝  
太やお母さんが通りそうな場所？　むしろ襖さえ簡単に開けられ  
ちゃうような場所？

だとしたら、最悪どころか最低だ。

じゃあ逆に、もし私が“その気”になっていたら、拒んでいた？  
“その気”になったのにアシュールに拒まれたら、私は大恥をか  
いていたはずだ。

女の子なら誰でも、余程慣れてでもいなければそういう行為に大  
胆になるのは抵抗があるはず。それを押して応えようとしたのに、  
肝心の男から拒否されるなんて心が折れる。しかも、相手から誘わ  
れたのに。

そうなれば、やっぱりアシュールは最低だったと思う。

私が混乱して何の反応も出来ないでいるうちに種明かしがされた  
けど、そうじゃなかったらヤツは一体どうしていたんだろう。

からかうにしてももっと他の方法がいくらでもあったでしょ、っ

て言いたい。

ただ私の奇行を笑われていたと知っただけなら、あるいは羞恥心だけですんだかもしれない。

でもあの行動を考えると、頭も胸もぐるぐるして嫌な気持ちが渦巻いてしまう。

無害そうな顔をして心の内で大爆笑でもしていたのかと思うと悔しくて、むかつ腹が立ってアシユールの側に寄る気にもなれなかった。

喋れない変わりに心の中では私で遊ぶ計画でも立てていたんじゃないかとまで思えてくる始末。

黒い気持ちは止め処なく湧いた。

それでも私だって年齢的には成人していて、世間では大人と言われる人間だ。

アシユールを避けてはいても、出来るだけ無視なんてしないようにしたし、用事があればちゃんと話しかけたりもした。お母さんの伝言を持ってきたときだって、しっかり対応したと思う。

ただ以前のように他愛のない話やちょっかいをかけたりはしなくなっただけの話。

それはアシユールも同じで、時々視線を寄越しているのを感じたけど、あれ以来アシユールから寄ってくることはなかった。

でももちろんアシユールがそうするのは私とは違う理由だろう。

私の急な態度の変化に戸惑っていることくらいはわかる。私は空気が読める方だといつかに豪語した通り、アシユールから微妙な雰囲気気が漂ってきているのは感じていた。

私の動向が気になっているんだろうということも、私の動きに合わせたようなアシユールの視線の動きを感じるから簡単に察しがついていた。

それでもあえてそんな視線に気づかない振りをしたのは、午前中のことがフラッシュバックする所為だ。肩を震わせて笑いを堪えて

いたアシユールの姿が瞼裏を刺激して、嫌な気分になる。

アシユールが何度か口を開き、何かを言いたそうにしていることにだって気づいていたけど、それも視界に入らなかったことにしてさっさと側を離れる、ということを私は午後中ずっと繰り返し続けた。

すごく嫌な雰囲気でその日を過ごし、課題があると言って夕御飯後には早々に自分の部屋に引き上げた。私を除いた食卓に妙な空気が流れているのにも当然気づいて、でも見て見ぬ振りで受け流した。

胸に澱のように溜まる不快な気持ち。それを無理に振り払うようにして無理に眠りについた翌朝、お陰様で寝坊した私は二日連続でラジオ体操に参加できなかった。

朝に身体を動かせなかったことも手伝ってか、日にちを跨いだにも関わらずまだ私の気持ちは晴れなくて、どうにもアシユールと接するのを躊躇する。

我ながら、引っ張り過ぎなことは自覚していた。

ちよつとからかわれたくらいでネチつくく怒ってアシユールに冷たい態度を取っている自分は、どんなに大人だと口で言っても、実際は駄々を捏ねる子供と大して変わらないんだろう。

不満があるくせに相手にそれを直接伝えることもせず、ただ態度だけで表す。それでいて、接触を拒む。相手からしたら溜まったものじゃないだろうと思う。

ああでも、私は子供よりもよっぽど性質が悪いに違いない。

アシユールが日本語を喋れないのをいいことに、謝りたそうにしているのを無視し続けているんだから。

大人になりかけの子供ほど面倒なものはないと、他人事みたいに思った。

でも。

本当は、翌日の朝を迎えて頭が起き出した頃、気づいていた。

アシュールは別に私を笑いものにしようと思っていたんじゃない、  
って。

## 三十二夏 思考はめぐり

一晩明ければ、嫌な気持ちは残っていても思考は冷静さを取り戻す。

というよりも、このままじゃ駄目だよなあ、という漠然とした思いに冷静さも加わって、大人になりかけの心が考えることを促すんだ。

……本当は、考えることで何処かにアシユールを許せる切っ掛けを見つけたかったのかもしれない。

私だって嫌な雰囲気을長引かせるなんて本意じゃないから。

許せる要素を無理に探そうとするくらいなら、さっさと気持ちを入れ替えてしまえばいい。

そうは思っても、簡単にそれが出来ないんだから仕方がない。

我ながらホント、大人にも子供にもなり切れないなんて面倒なことこの上ないと思うけど……。

ラジオ体操には出られなかったけどそれなりの時間に目覚めた私は、ぼんやりと昨日のことを考えていた。

改めて思い出してみると、自分の行動がいかに馬鹿げたものだったかがわかる。

朝からアシユールのお風呂を邪魔して、朝食後には客間の前で待ち伏せしていきなり髪を切ってあげると親切の押し売りのようなことをした。

カットが終わってもまだ擬似美容院体験だなんだと下手な言い訳でアシユールの髪を洗って、終いにはアシユールの身体を制汗シ-

トで拭き出して。

アシユールにつけてしまった傷を隠すのが目的だったにしても、そこまでやる必要がどこにあったのか、という話だ。

実際、アシユールだってそう思ったから、最終的に笑いを堪えきれなくなっただろうと思う。

私の馬鹿な行動に付き合いながら、必死に込み上げる笑いに耐えていただろうアシユールを思い出す。

でも、ふとそこで違和感を感じた。

昨日……アシユールは最初に私が洗面所に乱入したとき、不思議そうな顔をしていたよね。

客間の前で待ち伏せしていたときもそう。切れ長の目を丸くしてばちばちと瞬いていた。戸惑いとか困惑まではいかないけど、その瞳には私に対する純粹な疑問が浮かんでいた気がする。

そういえば、洗面所を使うという私のついたその場しのぎの嘘も信じていたっけ。

……うん？

あれ、どう考えても笑いを堪えているようには見えなかったんだけど……。

私は首を捻りながら、もう一度昨日のアシユールの様子をきちんと思い出してみることにした。

昨日の私は朝からずっとアシユールに笑いものにされていたと思っていたけど、何か違うんじゃないかと思い始めていた。

冷静に思い返してみれば、昨日の朝のアシユールはどこまでも普通の態度だった。

さっき思い出したとおり、少なくとも洗面所に乱入したときのアシユールは無理矢理笑いを堪えているとかではなく、一人慌てる私に不思議そうな視線を寄越しているだけだった。

ということ、もしかしてこのときアシユールはまだ、私がいつもより自分に構ってくる理由をわかっていなかったんじゃないの？ 確証があるわけじゃないけど、でも私の行動を面白がっている素振りにはなかったように思う。

髪の毛を切ると言い出したときも同じだ。

笑いを堪えているというよりも、警戒している感じだった。

明らかに私の技術を疑っていたみたいだったし、最初は拒否していたよね。

最終的には私が押し切る形でアシユールも了承したけど、あんまり乗り気とは言い切れなかったような……。

その状況を楽しんでいるような気配は感じなかったんだ。

実際、髪を散切りにされたら堪った物じゃないと思ったのかもしれないけど、それでも心の中で笑っているなら、もう少し違った態度になっただんじやないのかなあ？

だって、私の行動理由をしっていて、それでも髪を守りたいならさっさとあの時点で種明かしをしても良かったくらいだ。

肩や背中への傷は知ってるから、そんなことはしなくていい！みたいなのを表せば、私だって無理にアシユールの髪をカットしようなんて思わなかったと思うし。

つまり、このときまではアシユールは私の行動を笑っていたわけじゃないのかもしれない。

じゃあどこかでアシユールの態度に変化があったか、って考えてみると、あった。

あのときだ。カット後にお母さんが登場したあたり。

お母さんがシャワーの話を持ち出して、慌てた私が下手な言い訳を口にした。

あのとき初めてアシユールの唇の端に笑いを堪えるような引き攣りが現れたんじゃないかってたっけ。

うん、そうだ。

それまではどこか私の行動に押され気味だったのに、そのあたりでアシユールが態度を変えた気がする。

あのとときに私の奇行の意味に気づいて、笑い出しそうになったのかも知れない。

アシユールは察しいい方だと思う。

私が朝、アシユールがお風呂へ入ろうとしているところを邪魔したとこと、カット後お母さんがアシユールに『シャワーを浴びるといいわ』と言ったことに私が変に反応したことを合わせれば、私がアシユールがお風呂へ行くのを阻止したいのだと気づいてもおかしくない。

うん、たぶんきつと、……確実にそうだ。

お風呂に入らせないようにしていることと、その直前である夜中の出来事の記憶を結びつければ、どうしてお風呂に入って欲しくないのかは割と簡単に導き出せる答えだよね。

……自分で言ってて自分の行動の単純さに呆れる。

でもアシユールに記憶があるなんてこれっぽっちも思っていなかったんだから、これは仕方の無いことだ。私は悪くない。

私は、悪くない。

とにかく、あのと最初にアシユールは私の行動に協力的になったのは確か。

順を追えば、アシユールが私のおかしな行動の理由を知ったのがお母さんが出現したときだとして、じゃあアシユールがその時点で私をからかおうと思いついたのか、ってことだけだ。

落ち着いて考えてみるとそれも違うような気がしてくる。

洗髪のために椅子やら何やらを準備しているときも実際に頭を洗い始めてからも、アシユールの態度は別にそれまでと特別変わったようには見えなかった。

なんとなくそれまでの怪訝そうな雰囲気は払拭されて晴れやかな



感じになった気はしたけど、だからといってニヤニヤと嫌な笑い方をすることもなかったし。

洗い終わってからだって、さっぱりした顔をしているだけだった。次はどうするつもりだ、みたいな期待に満ちた視線なんて感じなかったし、ただ髪を拭いているだけで自分からお風呂に入る素振りを見せて私をからかってやろう、なんてこともする気配はなかった。あ、そういうえば、何か恨みがましい目で睨まれたっけ？ でもあれは意味がわからなかったから置いておこう。

とにかく、私が洗面所にそのまま置き去りにしたときだって私の勢いに押されてポカンとしていたくらいだ。

こうして考えていくと、やっぱり客間での一件以外、アシユールは私をわらいものにしていたわけじゃないのかもしれない、と思えてくる。

昨日ぶち切れてしまったとき私は、アシユールが最初からずっと私の馬鹿な行動の理由を把握しながら私がどこまで可笑しな行動をとるのか見て面白がるために大人しくしていたんだと思っていた。

洗面所でのことも、お母さんをおかわしてくれたことも、身体を素直に拭かせたことも。

身体を触られたことに加えて、それまでずっと従順な振りをしながらその実心の中で私を笑っていたのかと思つてすごく腹が立つたし、趣味が悪いとも思つた。

実際、身体を拭いているときアシユールは明らかに笑いを堪えていたから、確信的にそう思い込んでたんだよね。

でも、違つたんだ。

アシユールは洗面所でも客間の前でも、一人慌てる私を不思議がりながらも普通に接していた。

髪を切ると言い出したときは、不安がりつつ押し切る私を諦めの気持ちで受け入れていたような気がするし、カット後は出来上がりを気に入って素直に喜んでいたと思う。

洗髪をしているときも気持ち良さそうにしていた。そこに嘘はなかったと思う。

だったら何を切っ掛けにアシユールが笑いを堪えきれなくなったのかと言えば、

……結局原因は私、なんだろうなあ……。

という考えに行き着いてしまう。

身体を拭いているとき、私は上手くやっているつもりだったけど、アシユールからしてみれば横を向けば慌てて噛み痕を隠すし、背中を拭き始めたかと思えばあからさまに爪痕を避けて拭く、なんていう行動をとる私は阿呆みたいに面白かったに違いない。だって全部覚えていたアシユールからすれば、全然隠せてないんだもんね。むしろあからさま過ぎて、もう我慢なんて出来なかったに違いない。それまでは私の奇行の目的に気づいても、まあ好きにさせてやろう、くらいに思っていたのに、あまりに下手な隠し方をするから、黙っていようと思ったアシユールも限界だったのかも。

ただ、アシユールが全部覚えてるって知ってたら、私だってあんなことしなかった。

今にして思えば、私だってああしているのが自分じゃなかったら、私がアシユールの立場だったら、笑ってしまっていたと思う。

誰だって非の無いことを必死に隠そうとしてどんどん墓穴を掘っていつている人間を見たら、笑うつもりがなくても笑っちゃうよね。

冷静に思い返してみても、そう認めることができた。

恥ずかしいけど。

物凄く、恥ずかしい結論だけでもね！！



### 三十二夏 思考はめぐり（後書き）

頭に血が上って思い込んでいた状況が、冷静になってみて少しずつ把握できてきたようです。

三十三夏 意地っ張りの弊害（前書き）

うざったくて申し訳ないですがもうちよい独白。  
最後チラリとあの人の影。

### 三十三夏 意地っ張りの弊害

アシユールは、夜中の私の行動を全て覚えていた。

本当なら思いつきり噛み付いたり引つ掻いたりして軽い怪我をさせられたこと、アシユールが怒っても仕方なかったんじゃないかと思う。もしもこれが孝太や壺樹だったら確実に私に文句を言っていたはずだ。

でも、アシユールは全ての記憶を持っていたても、翌朝顔を合わせた私に嫌な顔一つして見せなかった。

それは自分が私を押し潰しそうになっていた記憶があつた所為かもしれないし、単に気にしていなかったただけかもしれない。

どっちかわからないけど、昨日の朝の段階では傷に関して私を責めようとも笑おうとも思っていなかったのは確かなんだと思う。

それなのに私があまりに奇怪な行動をとって、終いには身体まで拭き始めるまでに至って、おかしくて仕方なくなってしまうたんだろ。そこまでして隠さなくてもいいのに、って。

それでアシユールの悪戯心に火がついた。

もともとアシユールだって大人気ない部分も持ち合わせている人間で、対抗心だって私に負けず劣らず持っている。負けず嫌いなやつだ、って印象もある。

私があまりに傷の位置から連想されるものを意識し過ぎて、逆に相手の意識のあるうちに服を脱がせて身体を拭くなんていう男にとっては際どい行動をして見せたから、じゃあちよつとからかつてやろう、あるいは自分がしていることの意味を気づかせてやろう、くらいに思つて私を蹴倒したのかもしれない。今思えば、私の行動も男に勘違いさせるような要素はあつたように思うから。

加えて、私がつけた傷に対するちよつとした仕返しも含んでいたかもしれないな。

そこまで考えて、昨日のことは私にも十分非があることは理解した。

それでもモヤモヤした気持ちが続かないのは、私の中でどうしてもアシユールのあのセクハラ行為に納得いかないからなんだと思う。

昨日の出来事で私が何に一番腹が立ったか考えてみると、アシユールがからかうためだけに私の身体を触った、っていう一点だったんだと思う。

私を蹴倒して覆い被さるくらいまではいい。

だけど、身体は触っちゃ駄目じゃない？

こういう私の考え方って、重いのかな？

別に大したところを触られたわけでもないし冗談だったし、途中でやめたんだからそれでいいでしょ、って、普通の女の子は思えるのかな？

……でも私は嫌だったんだ。

何より、相手がアシユールだからこそ、嫌だった気がする。

それは別に私がアシユールを生理的に受け付けないとか何とかではなくて、アシユールを信用し始めていたから、短い間でも家族として受け入れてもいいんじゃないかと思い始めていたから、余計にショックだったように思う。

たとえば。

あのとき私が“その気”になっていたら、アシユールが受け入れるにしろ拒むにしろ、結果的には少なからず傷ついていたと思う。

そうでなくても、馬鹿にされたと屈辱的な羞恥を感じて怒りが湧

いたのは事実で。

もし私がもっと気の小さい女の子だったら、あるいは心底から恐怖を感じたかもしれない。

女の子にとつての“そういう”問題はデリケートだ。

アシユールが軽い気持ちでも、冗談で済まされないことだってある。

相手を傷つける可能性が高い、そういう軽薄な行動をアシユールがとつたことが、私は許せなかったんだと思う。

他の女性相手にも、アシユールにはあんな無責任な行動はとつて欲しく無いと、勝手かもしれないけどそう思った。

たとえばそれが明らかに冗談の雰囲気で、お互いにそれが通じる者同士ならいいと思う。逆に、本気に転んでも問題がないのなら、それもいいと思う。

でもそうじゃなければ駄目なんだ。

……私はたぶん、そんなにアシユールのことを把握し切れていない。

アシユールからの言葉は理解できないし、だからアシユールが何を考えているかなんてわからない。私が持つアシユールの印象は全て行動や雰囲気から読み取ったものでしかないし、それだってたったの三日じゃ明らかに経験不足。

そんな状態で、あの悪戯は受け止めきれない。

つまり、冗談で通じるような相手でも状況でもなかった、ってことだ。

だから結果的に、私はぶち切れてしまったんだと思う。  
今思い出したって、少しくらいは腹も立つ。

けど、まあ今回のことは多分に私が悪かった部分もある。  
それに、相手は他の誰でもなく私だ。



私はそこに妥協点を見つけることにした。

アシユールがあんな行動に出る切っ掛けを作ったのは私、な気が……、しなくもない、ような……うん。そういうことにしてやらなくもない。そんなわけです。

この三日間の私とアシユールの間には、妙に突き抜けた近さがあったのは事実だし、だからお互いに距離感が曖昧になっていた気がする。

アシユールの、男の人のＴシャツを脱がして身体を拭くなんていう不用意な行動を先にとったのは、私。

それがなければ、アシユールが無駄に私の、女の子の身体を触るようなことはなかった、と思う。……そう信じたい。

あの後、種明かしをしたときのアシユールの顔を思い出す。

悪戯っぽく笑いながら、何かを期待していた銀河の瞳。

たぶんあれは、いつものように私が怒って反発して……、アシユールはそういう私の反応を待っていたような気がする。

悪気なんて全然なく、遊びたがってじゃれてくる犬みたいなものだったのかもしれない。

事実、私が怒るなんてこれっぽっちも思っていなかったみたいに、私が無言で押し退けたときのアシユールの驚いたような顔は、心底から想定外とでも言いたげな表情だった。

結局、結論は『お互い様』だったのかもしれない。

確かにアシユールのアレはやりすぎだった。

でも、そこまで持っていたのは私の意地っ張りでわけのわからないプライドの所為だ。

アシユールと私が“そういうコト”をしたかのように思われるこ

とが嫌で、馬鹿みたいにバレたら終わりだと思っていた。

意識し過ぎていて、逆に恥ずかしいことだったと今なら思う。

気づかれないならそれが一番だったけど、別に無理をしなくても、口で事情を説明すればそれでよかったんだよね。

アシユールだっていい年なんだろうし（本当の年齢なんて知らないけど）、酔い潰れて記憶がないなら変に本当かどうか突っ込んできたりしなかったんじゃないかと思う。

今考えれば、傷が完治するまでアシユールにお風呂を使わせないわけにはいかないし、隠し通せるようなものでもなかったんだよね。今さらながらにそのことに気づいて、自分の馬鹿さに落ち込んだ。

……それでも。

そこまで考えて色んなことに気づいても、昨日あれだけ冷たい態度をとっていた手前、私からアシユールに接触するのも躊躇われて、というか勇気が出なくて、結局その日もアシユールには余所余所しい態度を突き通してしまった。

ずるずる過ごして夕食後、孝太に『なんだか知らないけど、そろそろ許してやれば？ アシユール、かなりヘコんでて可哀相だよ』などと諭されてしまった。弟に、諭されてしまった。……弟に！

でもわかってる。日本語を話せないアシユールだから、私から行かなきゃいけないのはわかってるけど、今さらどんな顔でアシユールの前に立てばいいのやら。

姉ちゃんにも孝太の真っ直ぐさと素直さが少しでもあればね。

いじけた気持ちでそんなことを思った。

アシユールと仲違い（のようなもの）をして三日目。

つまり自分の非も認めて反省をしつつ謝れない一日を過ごした日（ほんと情けない）の翌日。

私は縁側で思いつきり不貞寝をしていた。

もうなんか、噛み痕やら爪痕を隠そうとしていたよりもドツボな気がして、起きてるなんて無理！

起きてる分だけ気まずい思いでいるとか、精神的に無理！

そんな子供っぽい考えで現実逃避気味に昼寝をすとか、私ってどれだけ子供なんだろうか。

自分に呆れながらも爆睡してどれくらい経った頃か、不意に背後の扇風機の風が遮られた気配がした。

ついで、ふわりと漂う、

ピーチ、臭……？

微睡みから抜け出せずにいる私の鼻に届いたのは、何とも乙女色な甘い香りだった。

三十三夏 意地っ張りの弊害（後書き）

次話、やっとアシユール登場。

## 三十四夏 どちらが先か

瑞々しく甘い、桃の香りがする。  
美味しそうな香り。

あ、涎出そう……。

私は口の中に溜まってきた唾液を飲み下しながら、寝返りを打った。

眠くて上手く目が開けられない。

お昼寝は駄目だ。一度寝入ると中々起きられない。私、朝は弱くないのにお昼寝だけは寝起きの悪いんだ。

それでもどうにか朦朧とする意識のまま薄っすらと目を開けた。

首振りにしてあった扇風機の前を遮る影がある。

まあ予想はしていたけど、美味そうな香りを漂わせるのはアシュールだった。皮を剥いた桃のように白いあの腕はアシュール以外にいない。……じゅる。

というか、箱ごと置き去りにしていたシート、使ってくれてたのか……。

やっぱり変なところで律儀だなあ、とか思ってしまう。

扇風機の前でしゃがみ込み、こちらを見下ろしているらしいアシュールは微動だにせず、ただそこにいる。

私の様子を窺うような気配がある。起こしていいのか、起こさないべきなのか迷っているみたいだった。

たぶん、

謝りに、来たんだろうなあ……。

ぼんやりする頭でもそれはすぐにわかった。

大半は私が悪いのに。

丸二日近くも避けてしまったのに。

日本語喋れないアシユールじゃなくて、私が行かなきゃいけないのに。

ゆっくりと瞬きをしながら、あまり働かない脳と身体を叱咤する。結局、アシユールの方が私なんかより何倍も大人で、喧嘩なんだか何なんだかわからないこの状況でも、言葉だって自由じゃないのに、先に謝りに来てくれた。

お昼寝をしているときの私が脳も態度も色々無防備になることを見計らって来た感じがするのは、なんとなく引っかけたけど……。

たぶん、孝太あたりがまた入れ知恵したんだろう。

あいつは私が怒ると、怒りが治まりかけた頃のお昼寝タイムを見計らって謝りに来る。そうすると寝惚けているのも手伝って、私も素直に孝太を許すし、孝太も面と向かって謝りにくいこともぼんやりしている私が相手ならすんなり謝れるという寸法だ。

一瞬、アシユールに弱点を知られてしまったようで焦りが湧いたけど、それでもアシユールが自分から謝りに来てくれたのを突っ撥ねるつもりはなかった。

なかなか持ち上がらない瞼を必死に押し上げながら、てんてんと目の前の床を叩く。

アシユールが視界の端で小さく首を傾げている。

それでも何度か同じ動作を繰り返すと、アシユールは躊躇いがちにゆっくりと私の前に横になった。

意図した通り視線の高さが同じになって満足する。

流石に寝転がったまま謝るのじゃ格好がつかない。でも相手も横

になっていれば問題ないよね、とか自分に都合よく解釈しておく。  
けど、あー、眠い……。

必死に意識を保ちつつアシユールを見るけど、ぼやけていてヤツ  
がどんな顔をしているのかよくわからない。

……遠すぎるのか。

そう思った私はアシユールの胸元を引っ掴み、寝惚けた私が出せ  
る渾身の力で引き寄せた。

「……！」

うん、近くなった。

でもなんか……やっぱりぼやけて見えない。

というか、視界いっぱい群青が広がっているような……。

まあいいや、このまま話そう。

アシユールの表情を確認できないのは、この二日散々考えていた  
ことを口にしようと思っている私には心許無かったけど、引き寄せ  
ても駄目なら仕方ないから諦めた。眠気を我慢することで精一杯だ。

「……あのさ」

「……」

随分掠れた声が出た。

まあ、寝起きだから仕方ない。……というかまだ起きてないか  
ら許して。

「最初は、アシユールがわたしのことずっと……笑っておもしろ  
がってたんだと思って、……だから腹が立ったの」

口調がすごくゆっくりになってしまっているのには気づいていた  
けどどうしようもなく。

アシユールが根気良く聞いてくれているだろうと信じて続けることにする。

「なんか変なふんいきになったのも、くやしくて恥ずかしかったし……」

怒りが湧いた瞬間は、この二つに対する感情が前面に出ていた。でも一晩置いて考えてたらわかったんだよね。

「だけど、本当にいやだったのは、あしゅ……アシユールが、わたしを押し倒して触ったことだった」

ああ、これだと誤解を与えそうだなあ……。

実際、掴みっぱなしだったアシユールの胸元から、アシユールの身体が少し強張ったのが伝わってきた。

ちよつと傷つけちゃっただろうか。

アシユールに触られて気持ち悪かったとかではないんだけど……。

私は必死に微睡みに沈みそうになる頭を回転させる。

少しもごもごしてから、また口を開いた。

「……えーとき、冗談で、ああいう……ことをしちゃ、だめだとおもっ」

「……」

我ながらもつとはつきりはきはき喋れないもんかとは思っ。

しかし眠すぎて……。これはある意味拷問だよ。頑張ってるよ私。

「女の子のからだを……同意なしにさわるのは、こっちではせくしやるはや……セクハラって、言うの」

「……」



「……男の人にしたら冗談でも、女の子がいやだとかんじたら、それは犯罪になるんだよ」

言えば、目の前の群青が少し大きくなった気がした。

驚いているのかもしれない。アシュールの世界では、そういうのを犯罪とすることはないのかもしれないな。

でも。

「私がどうかじゃなく、犯罪というのを別にしても、あしゅには……」

まずい、うまく口が回らなくなってきたかも。  
だけどちゃんと伝えなくちゃいけない。

「あしゅーるには、女の子をいたずらに傷つける可能性があることを、してほしくない……」

ああもう、伝わってるんだろうか。  
脈絡とか、大丈夫なんだろうか。

こんな真面目な話、本当はきちんと目が覚めているときにすべきなものもわかってるのに、でも意識がはつきりしているときに話すのもどことなく気恥ずかしくて、だからできればこの場で理解してくれたいと思う。

「アシュールはもう身内みたいなものだ、わたしはおもってるから……、だから勝手だけど、冗談ですまないかもしれないことをアシュが不用意にしたことがショックだったの……。アシュ……。アシュールはちゃんと女の子の弱さをわかってると思うけど、女の子に恥をかかせるようなこととしてほしくないよ……」

「……」

言い終えてホッとしつつ目の前を見ると、今度は群青がぎゅっと凝縮した気がする。

何だろうな、よく見えないけど、喜んでる……のかな？

でもそんな要素のある言葉じゃなかった気がするんだけど……。

それとも渋い顔？

迷惑がってるとか。

うーん、よく見えない……。

まあ、いいか。悪い反応じゃないことを祈ろう。だって、眠すぎで目が閉じそう……。

だけどまだまだ言わなくちゃいけないことはあるから、私はもう一度意識を引つ張り上げる。

素直になれない私に先に歩み寄ってくれたのはアシユールだから、謝罪だけは私がしつかり口にしなくちゃ駄目だよな。

「でもね、わたしも不用意だったから、それに気づかせようともしてくれたんだよね、ごめんね……」

「……！」

群青が広がって、それから少ししてふっと口元に風がくる。次いで、ゆっくり鼻先を縦に何かが擦っていった。

あれだ。アシユールの鼻、だと思う。

今私、さり気なく鼻の高さを自慢されたよね？

いや頷いてくれたのはわかったけど、いちいち鼻の高さなんて自慢しなくてもいいのに！ どうせ私の鼻は低いですよ。

ムツとしたけど、ここでまたキレるわけにもいかない。

私は眉を寄せつつ続けた。

「あとね、……、あー……、冷たい態度とって、ごめんね」

これは一番大人気なかったというか、丸つきり子供の態度で申し訳なかったと思う。

できれば忘れてほしいけど、……根に持たれたらどうしよう。って自業自得か、うん……。甘んじて受けます。

「それと、おととい、朝からばかみたいにまとわりついて、ごめん。うつとうしかったでしょ……？」

今度は私の鼻先を横に掠っていく、アシユールの鼻。

だからいちいち返事の途中で鼻の高さを自慢しないでよ、まった

く。  
でもそんなことよりまだ私が謝らなくちゃいけないことがあるんだよね……。

「……あの、かみ付いたり引つかいたりしたのも、ごめんなさい……」

必死に隠そうとしていた事実だけど、もうバレているのはわかっているし、実際ちよつとやり過ぎなくらいに強くしてしまったのも事実だから、謝っておく。

うん、この際、謝れるものは全部謝って、帳消しにしてもらおう。なんて、都合のいいことを思った。

ああでも、眠気が半端ない……。

もうそろそろ駄目かも……。

そうだ、あれだけは謝っておこう、結構気になっていたんだよね。というか、今も気になってるし。

「……あとその匂い、全然合っていないのにつかわせて、……ごめん……」

でもおいしそう……。

心の中で思ったはずなんだけど、声に出ていたのか、プツと至近距離で笑われた。……ちよつと睡かかったけど！とか悔し紛れに思ってみる。実際はかかってないけど。

もう限界だ。

もついいかな。

結構ちゃんと言いたいことは言えたからいいよね……。

襲いくる睡魔に抵抗できず眠りに落ちる瞬間、鼻先を何か柔らかいものが掠めた気がした。

こいつ、今度は何を自慢したんだ……？

確かめる余裕もなく、私の意識は夢の中へと沈んでいった。

拍手お礼小話 一（前書き）

後書きにオマケ。

## 拍手お礼小話 一

【裏小ラウンド、チャリ練！】

「アシユールー！ 腰が引けてるよーっ！」  
「……………」

只今、アシユールは自転車の猛特訓中です。  
ほんとヤツは負けず嫌いだよな。

元の世界に帰っちゃったら使えない技術（？）なのにね。

アシユールは初めて見る自転車に驚いて、一度乗って難しいとわかると不満顔で教えて欲しいと言って来た。もちろん言葉に出したわけじゃないけどな？ 目がモノを言うから、あの人。

仕方なく、ほんとーに仕方なく、優しい私はアシユールの自転車練習に付き合っただけだ。

「こらー！ 簡単に足ついたら進まないでしょー！」  
「……………」

ま、実は結構楽しんでますけど、私。

「真っ直ぐ前見て…………何やってんの！ 余所見しちゃ駄目だったら！ ハンドルには体重を掛けないで、手は添えるだけ！」  
「……………」

必要以上に声を上げながら、スパルタクスも真っ青なくらい大変厳

しく指導しております、私。

なんか、日ごろの鬱憤が解消されるよね。人はこれを八つ当たりという。あは。

でも何かこう、いつも隙の無いアシユールが危なっかしく苦戦している様子は眺めていて気分がいい。……性格悪い？ 望むところですよ誰も気にしない問題ない。

「おうおう、すっかり漕ぎなよー？」

「……………」

内心ニヤニヤしながら、表面上は厳めしい顔を作って指導する。つい口調がおかしくなってしまうがこちらでも全く気にしない。あはは、フラフラしちゃって！ 笑いを堪えるのも大変だつつうの。あ。転びそうになった。ははははは ケホッ……ははは！

「こらー！ やる気あるのかー！ そんなんじゃ歩く人に追い越されるぞー！」

「……………」

そう言った途端、私が立っているところから少し先の方まで一人で漕いでいっていたアシユールが、何故か急にぴたりと止まった。おい何しているのだ早く続けたまえよ。私の楽しみを奪う気か。

訝しく思っていたら、自転車降りたアシユールがぐるりとＵターンしてこちらに戻ってくる。自転車が玩具のようにまるで重さなんてありません、みたいな感じで翻り、アシユールがそれに乗らずに引っ張ってくる。

諦めたのか？ それとも何処か怪我したとか？ 見たところ派手に転んだりしてなさそうだったけど……。

ちよっとだけ不安になりつつ黙ってアシユールの動向を見守った。

んん？

……。

あれ。

何か……

……お怒り、

かしら？

私は自転車を引っ張りながら徐々に近づいて来るアシュールが放つ異様な気配を感じた。

アシュールの周りにゆらりと陽炎のような揺らぎが……。

あ。

何か

ちょー嫌な予感。

自転車を引きながらゆっくり近づいて来るアシュール。不覚にも一歩後ずさる私。

いや不覚とか言っていないで逃げた方が良くない？ ヤバイなんか悪寒が半端無い。

俯き加減のアシュールが不気味すぎる。ヤツの周囲に妙に凩いだ空気が流れているような……。



だがしかし余計な矜持（ええただの対抗心ですが何か）から簡単に逃げ出すことも出来ず、アシユールがそれなりに近くまで来た頃（まだ十分に距離はあるけどね）にそつと声を掛けてみた。

「あー、……アシユール？　どうかした？」

ただアシユールは答えず、そのまま少し進んでから、スッと俯けていた顔を上げた。

「！！」

うわあ！

怖っ！

ちょー笑顔とか、怖っ！！

爽やか過ぎて怖いなんてあるんだねっ！！

ああでも目が据わってるし……！

身の危険を感じた私はひくりと唇の端が引き攣るのを感じ、弾かれたように身を翻した。

これはあれです逃げるが勝ちというやつ……！

走り出した直後、背後でガシャンと自転車の倒れる音がした。おいおい私の自転車だよそれは壊れるじゃないか！　ってそんなことよりも問題は……。

強まる嫌な予感に振り返ると。

「ぎゃー！ー！　ちょ、アシユール追いかけて来ないでーっ！！」

「フツ――――。――――？」

アシユールが何か言ったけど何て言ったかさっぱりわからない！  
最初に鼻で笑ったのはわかった！　だがどうでもいい！　とにかく追いかけてくるなー！！！！

必死に走った私だけど、足が長く、しかも鍛えられてるっぽいアシユールに敵うはずもなく。あえなく撃沈。

「ッ！　ちょ、待つ、ハア、ま、待った……！　スト、ップ！　いち、いち、いちじていしっ！」

観念した私は立ち止まって振り返り、両手を前に翳して、ちょー笑顔なアシユールを制止する。

私ってば息切れ半端無い。もはや自分が話してる言葉が何語かもわかりません。誰か翻訳機、いや酸素！

ぜえはあと肩で息をする私を見つめ、アシユールは一応私の必死の制止に応えて止まった。

……随分涼しげな顔でいらっしますね。息が上がってすらいな  
いってどんなだよ。むしろ私の体力が底辺的な？類を見ないほど貧弱的な？いやそんな莫迦な。それでも小学生の頃はリレーの……ってどうでもいいわ！

足がガクガクいつている私とは対照的になんと煌くほどに端麗なアシユールの立ち姿。立つてただけで喧嘩を売れるって素晴らしい能力ですねそんな無駄な能力捨ててしまえ！　軽く殺意が湧きつつ今は喧嘩を買う余裕がないので、まあとにかく話し合おうじゃないか、気に障ったのなら謝るから、と内心考えながら（喋れないから）

見上げると、

「……………」

「ッひゃああああああわわわわわわわ！」

目が合ったヤツは一瞬笑みを深くした。たらりとこめかみを伝う汗を感じる間もなく、アシユールはいきなり体勢を沈めたかと思うと、突進するようにして私を抱え、唐突に走り出した。しかもかなりの高速で！ あばばばば目の前の景色が異常な速さで流れていく！

「待つーーーーーあああ！」

「待つて」と言おうとしたけど叫びに侵食されました。日本語喪失。アシユールは私をお姫様抱っこが崩れたような形 自分の左の肩から右の腰にかけて斜めに私を抱えて（俵担ぎじゃないだけましののか！？どうなんだ！？）走るアシユール。これで全力疾走とか……う、嘘でしょーーーーっ！！？

「ちよつ、と、とま、と、とま、とま、と……！」

トマトがどうした私ー！

自分で突っ込みつつ、あまりの速さと恐怖でまともにしゃべれない。やっぱり日本語喪失。誰かこの莫迦止めて！

これって何の嫌がらせ？ 私が「歩く人に追い越される」とか言ってたから？ いやそうだろうね、うん。チャリなどいらん、走れば速い！的な？ 何それどんな思考回路？ こんなことでキレるなんてなんて心の狭い男っ！

そう思った瞬間、私の考えが伝わったのか、ぐんつとアシユールが

スピードを上げた。本気で莫迦でしょこの人————！  
揺れる身体と恐怖を抑えるために必死にアシュールの首を締め上げる私。いやだって、落ちそうで怖いんだもん！ 実際は結構安定感があるけど、でも精神的に不安定だから——！

「と、とまとまと、と、止まれ莫迦————っ——！」

やっと言えた……！

かなり舌が危険なことになりつつ叫ぶと、その必死な声が功を奏したのかアシュールは徐々に速度を落として止まった。

そして私を抱えたまま地面に座り込むと、そのままぱったりと仰向けに倒れこんだ。

マジで、ありえん……。

腰から下に力が入らず、暫くは立ち上がれそうにない。

どうしてくれるんだよ腰が抜けるとか初めての体験だこのやるー！アシュールは仰向けになって、流石に上がった息を整えている。そりゃあ人一人を抱えて全力疾走すればね。

アシュールの上に私が乗っかっている状態なので私の身体がアシュールの呼吸と一緒に上下する。お互いの心臓がどくどくとうるさい。重労働を強いられている心臓を休憩させてあげたいけど、休ませたら死ぬから我慢する。しっかり働いてね私の心臓！

しかしアシュール、……君は何故そんなに顔が満足そうなのか。

もう怒る気力もわかず、私たちは二人して道のと真ん中で暫くの間ぶっ倒れていたのだった。



拍手お礼小話 一（後書き）

「……なあ、アレ、孝太んとこのガイジンじゃね？」

「お、ホントだ。あの金髪は孝太んとこにほーむすてい來てるヤツだ」

「ええ？ どこ……」

「っつーかアレ、何やってんの？ 倒れてるけど……」

「上にお前の姉ちゃん乗っかってねえ？」

「……！」

「具合悪いのかな？」

「いや、起き上がったぞ。姉ちゃんの方」

「……」

「あ、馬乗りになった」

「いやアレは騎jy……ぐっ」

「お前は沈めばいいよ。……孝太聞いてるかあ？」

「お、おう、聞いているけど、俺は何も見ていないぞ……！」

「「は？」」

「お、俺は先に帰るから！ じゃあなっ」

「あ、おい！」

「……」

「……」

「なあ、孝太んちって反対方向じゃね？」

「孝太はジュンジョウ少年なのよ」

「はあ、まあいいけど。それよりあのガイジン大丈夫かね？ 首ガクガクされてるけど」

「よくわかんないけど楽しそうだからいいんじゃない？」

「……だな」  
「うん」  
「とりあえず帰るか」  
「うん」  
「……孝太は？」  
「知らね」  
「……」

### 三十五夏 忘れていたけど訪問者

「……」

じーつと背中に視線を感じる。

だがしかし私は振り返らずに負けじと別の意味でじーつとしていた。

今はお昼寝中です。

まだ寝てないけど、気持ち的には寝ています。

「……………」

まだ視線を感じる。

だがしかし（略）

いい加減背中に穴が開くかもしれないと思った頃、やっと背後の気配が消えた。

私は深く息を吐き、もぞもぞと身体を動かして本格的に寝る体勢をつくる。

背後からジト目で見つめてきていた正体は分かりきっていた。金髪の異世界人、アシュールだ。

お母さんから買い物頼まれていたのは聞こえていたから、たぶん私にも付き合わせようとしていたんだろうけど私はそれを寝た振りでもやり過ごした。

仲直りしたはずじゃないのか、って？

したよ。仲直り。



ちゃんと謝ったし、アシユールも私の言ったことを受け止め、謝罪も受け入れてくれたと思う。

二日に渡った気まずい空気は間違いなくあれで払拭された。

私は引き摺るのが嫌な性質だしアシユールもそうだったようで、お昼寝から目覚めた頃にはお互い普通に接してた。気のせいじゃなければアシユールはご機嫌な様子だったけど、喧嘩中の私の態度を考えれば当たり前のことだよな。

じゃあどうして今でもアシユールの存在をスルーしているのか、と聞かれれば、学習したから、と答えるほかない。

あの色々と思い出したくない恥ずかしい喧嘩から数日。私はアシユールと少しだけ距離を置いて接している。

あの喧嘩で私はかなり反省したんだ。

アシユールの行動を煽ったのは私で、そしてアシユールが簡単に煽られたというか調子に乗ったのも、私の所為。

会ってから幾日もしていないのにわざわざ川やらの一件で二人の距離感がおかしなことになっていて、会って間もない他人としての適正な距離というものがわからなくなっていた所為だと気づいたの。

何だかんだとお互いを構いすぎていたと思うし、アシユールの故郷がそうなのかもしれないとヤツがスキンシップ過多なのも特に気にせず、こんなものかと私が受け入れていたのも悪かったんだよな。だから少し冷静になって、会って三・四日の他人同士の接し方について考えてみたのだ。

どう考えても、川で相手を突然突き落とすのはアウト。街から何時間も手を繋いで帰宅もアウト。途中アイスを分け与えたりしたこともあったけど、あれもアウトだ。

その後も色々アウトのオンパレードで、これが野球なら私はボロ負け状態でした。

わざわざ事件で崩壊したアシユールと私の間の壁。これをもう一度

建て直す必要があると私は思った。

また同じ間違いを繰り返して気まずい思いをしないように、今度から適度な距離を保って必要以上にお互いを構わないように。それが円滑な人間関係を形成するに違いない。

とか、私もない頭を振り絞って考えたわけです。アシユールと上手く付き合っていけるように。

なのでこの数日はアシユールが何かに私を引っ張り込もうとするのを三割方スルーしている。

まあ七割ほどスルーを失敗しているんだけど、まあちょうどいい塩梅なのでは、とも思うのでよしとしている。

そんなわけで、今日も今日とてアシユールが『買い物行こうぜ』オーラを発していたのを鮮やかにスルーしてやったわけですが。

私は寝ようと思っているのに、何故か妙に居心地の悪さを感じて寝付けないでいた。

夏の熱気の所為だけじゃなくじりじりする。

原因はたぶんアシユールだ。

きつと今のヤツは心持ち重い足取りで玄関に向かっていているんだろ  
うなあ、という予想が簡単にできて、それが私の居た堪れなさに繋がっているんだ。

仲直り直後から少し距離を置くことにしていたけど、あれから数日経って今ではこの行動をもう一度考え直しかけているという……。ブレブレですね、私……。

だってさ、アシユールの行動をスルーすると、あの人すぐく肩を落とすんだよ！

何でか知らないけど、全身で『がっかり』を表現するんだよ！嫌がらせ！？

眉尻下げて困惑気味の銀河が向けられる度に良心の呵責に苛まれるなんて、意味がわからない！

これが適正な距離です。とばかりに私は自分の部屋へ引っ込んだりするんだけど、喧嘩していたときのように背中をアシユールの視線が追ってくるのがわかって、何か悪いことをしているみたいなんだよね。

うーん、上手くいかないなあ……。

私は縁側で横になりながら、薄っすらと目を開けて考える。

近すぎるのがまずいんだと思ったんだけど、アシユールにしてみたら私の態度は喧嘩中のときのように余所余所しく感じるんだろうか。

会って間もない人間同士の丁度いい距離について、一度講釈を垂れた方がいいのかな……。

ガシヨンッ

うつらうつら考えていたら、アシユールが去ったであろう廊下の方から不審な音が聞こえて、意識が浮上した。びっくりして上体を起こす。

『　　つ、　　！？　　』

何か叫び声？ 怒鳴り声？ みたいなのが聞こえる。

台所で水仕事をしているお母さんは気づいていないみたいで、でも気になった私は仕方なく身体を起こした。

まだ完全に眠ってしまう前だったから割とスムーズに身体が動く。少し早足で廊下を行くと、まだ玄関のたたきにも降りていないアシユールの背中が見えた。

ついでにアシュールが手にしたあのくすんだ水色のエコバッグも見えて、あれは本当にアシュールの見た目に合わないから今度どうにかしよう、なんてどうでもいいことが頭を過ぎる。

玄関を前に立ち止まるアシュールを不審に思いながら近づき、背後から顔を出して玄関を見た私は思わず声を上げた。

「……………壱樹、何してんの？」

三十五夏 忘れていたけど訪問者（後書き）

あの人<sup>が</sup>やつと登場。

アシュールよりもちょっとだけ足の短いあの人です。笑

## 三十六花 いつかの再現

「杏樹、何してんの？」

アシユールの背後から玄関を覗くと、壁と玄関戸に手をついてバランスを崩した身体を支える背の高い男　幼馴染の杏樹がいた。物凄く腰が引けていてかなり情けない格好になっているけど、まあ杏樹の情けない姿なんて今さらなので気にしない。二十年近く一緒に過ごしていればちよつと口には出せないような恥ずかしい場面もお互い見ているし知っているものだよね。

とは言いながらも冷めた目を向けてしまふのは仕方ないと思う。外人見ただけでへっぴり腰とか笑っちゃうって。ぷぷ。

いつかの自分をすっかり棚に上げて内心笑いながらアシユールの後ろから顔を出したら、杏樹はハッと我に返ったようにこちらを見た。

……なんだろう、すごく「こっち見るな」と言いたい。

「こっち見ないでよ」

あ、言っちゃった。

「~~~~~!」

杏樹は暫く口をパクパクした後、体勢を立て直して慌てたように高速で手招いてきた。

うわあ……、この構図、物凄くデジャヴじゃないでしょうか。

二週間ほど前、壱樹の場所には私がいて、私の場所には孝太がいたんだっただ。

あのときの自分を見せられているようで、ちょっと不快感が……。あ、でも壱樹の手招きは私のようなアメリカなやつじゃないよ？ 下から上へじゃなく、上から下へのやつです。純和風な感じのうむ、アメリカンは壱樹にはまだ早いから納得。

二週間前に思考を飛ばしながら壱樹の手首がブンブンしているのを黙って見ていたら、さらに速さが増した。手首千切れそうだけど大丈夫？

もうちよつと放置しようかと思ったけど、壱樹があまりに必死な形相なので『面倒くさいな』とは思いつつ近づいた。

「っ、痛いっ！」

私の動きの鈍さに焦れたらしい壱樹に、まだ二メートル近く距離があつたのに腕を思いつきり引つ張られた。肩の関節グキツつていったよ！

引き寄せられてすぐに肩に腕を回されぎゅうぎゅうと締め付けられてさらに痛い！

なのに悲鳴はどうでもいいとばかりに無視された。こんなところまで無駄にシンクロしているとか不愉快以外の何ものでもない。壱樹めどうしてくれよう。

「っおい、むっ、あのイキモノは何だ！？」

火責め水責め土責め肉責めのどれがいいかは選ばせてやってもいい、と心優しい私が考えていることには気づかず、壱樹はアシュールに背を向ける形で私の耳元に言葉を投げ込んできた。

かなり動揺しているらしく、全然声を潜められてない。これじゃあ密着して耳と口の間の手を添えてる意味が全くないじゃないの。壱樹は内緒話の正しいやり方を小学校から学び直して来るべきだと思う。

というかどうでもいいけど、

「壱樹、近い暑い痛い」

思い切り鬱陶しそうに言っただけでした。今は夏だよ、勘弁して！

って、何コレまたしてもデジャヴ。

姉弟と幼馴染は似るものの？全然嬉しくないけど！

「おい、いーからとにかくアイツは何者だ！？」

「……。えー？ 何者だろうなあ？」

今、ちよつとだけ孝太の気持ちがあった。

説明とか面倒。そして壱樹のテンションが非常に鬱陶しい。加えて近い暑い痛いので四重苦！

「『えー？』 っておまつ……おわっ！？」

妙な悲鳴が聞こえて急に肩の圧迫感がなくなった。

四重苦が一気に解消されて驚きながら振り返ると、放置プレイだったあのお人がなんだか怖い顔で壱樹の腕を掴んで、

「……………」

「いだだだだだ！！」

いや、掴むどころか捻り上げておりました。わーお。バイオレンス。



「……で？ この金髪怪力野郎は何者だつて？」

壱樹が不貞腐れ気味に聞いてくる。

現在地は我が家の居間です。

あの後、男相手だからか容赦ないアシユールをなんとか宥めて壱樹を家の中に招き入れた。

アシユールはこれまたデジャヴも甚だしく、買い物中断して一緒に居間に戻っている。

幼馴染である壱樹は家族のようなものとはいえ一緒に住んでるわけでもないし、アシユールには買い物に行ってもらって壱樹に軽く説明するだけでもよかったんだけど、何故かヤツは残るという意思を曲げなかった。壱樹と同じでアシユールも壱樹のことが気になるのかな？ 大したやつじゃないのにな。

「……………」

私が説明する前にアシユールが何か言った。

もちろん何を言ったかはさっぱりわからない。

しかし何故かアシユールが喧嘩腰に見えるのは……私の気のせい？ 服を買いに行ったときの威圧感が若干洩れているのは気のせいじゃない気がする。

壱樹も感じたのか、怯むことはなかったようだけど不機嫌さは増したようで眉間の皺が深くなった。

壱樹は別に短気じゃないはずなんだけど、何故かアシユールへの印象は悪いっぽい。気に入らない、という内心がありありと表情に

出ちゃってる。

……まあ、出会って数分で腕を捻り上げられて好印象を抱いていたら、それは間違いなくエムの人ってことになっちゃうから、吉樹が喜んでなくてよかったけど。

ああ、そんなことより紹介と説明をさっさと済ませなきゃだった！

「あー、こちらはアシユール、アシユール・ヒヤ……なんだっけ？」

「……………」

「……。うん、アシユール・ヒヤなんとかさん、です」

「……お前いま聞き取れなかったんだろ」

「一部が分かってれば十分でしょ」

「……………」

「……………」

だって、アシユールの名字なんて初日にちろっと聞いたただけだよ？ 覚えられなくて当然だと思う。カタカナ苦手なんだよそれに誰も名字で呼ばないし！

アシユールが言い直してくれたけど、生憎発音がネイティブ過ぎて日本語に変換できなかった。お父さんたち、どうやって名字を聞き取ったんだ……？

「それで？ こんな田舎に留学生とか言っ気か？」

「いや、言わない。アシユールは二週間くらい前に庭に落ちてきたんだって」

「……………」

「……………」

「 莫迦言つな? 」

……。

なんで疑問形?

三十六花 いつかの再現（後書き）

“肉責め”表記は仕様です。

血縁と腐れ縁は恐ろしいものです。

三十七夏 仔犬が一匹騒いでおります。(前書き)

大変お待たせして申し訳ありませんでした。

更新に間が開いてしまったので、以下、簡易あらすじ。

- ・仲直りしたけど六花がアシユールから距離をおく。
- ・アシユールしょぼーん。
- ・壱樹が無様に帰省。
- ・六花の四重苦をアシユールが救う。容赦なく。
- ・相次ぐデジャヴの中、アシユールについて説明開始。

こんなところです。

ではどーぞ！

### 三十七夏 仔犬が一匹騒いでおります。

「大体言いたいことはわかった」

一通りアシユールについて説明すると、壱樹は眉を顰めつつ言った。

その表情はまだ釈然としていない、って気持ちが露わだったけど、まあ仕方ない。私だって始めは信じられなかったもんね。

もしかしたら壱樹の頭の中では今、『お盆で久しぶりに帰省したら幼馴染の家族が得たいの知れない外国人に洗脳されてた、こりゃあ俺がなんとかしなければ！』とかいう無駄に正義感溢れる考えが浮かんできているのかも。

玄関先であれだけデジャヴを引き起こしたんだから、ありえないとは言いきれない。斯く言う私も、最初は“私だけは冷静に”“万一何かあったら家族を守らねば”とか、今にして思えば恥ずかしいようなことを考えていたものだ。

口ではわかった、と言ったものの、壱樹は腕を組み、渋い顔で私とアシユールを交互に見ながら、何か考え込んでしまった。

壱樹の目がアシユールのところで止まると、一瞬品定めするように眇められる。

そしてまた私を見て、何かを訴えるように片眉が上がったりする。  
……………。

なんだろうな、この構図。

冷静に考えるとすごく微妙じゃない？

一見したら、突然外国人のカレシを連れて来た娘と明らかに認め

ていない父、みたいな。勘弁してください。

内心嘆息している私の一方でアシユールといえば、説明しているときからずっと、どことなくつまらなさそうな顔をして私の隣に座っている。自分に関することだというのに。

今もちらりと横目でアシユールを見れば、ヤツの視線は壱樹の顔から少しだけずれているのがわかった。

私が帰省直後にお父さんから説明を受けていたときはキリッとしていたというか、姿勢を正して真摯な態度をとっていたのに、今は集中していない、っていうのがなんとなくだけ伝わってくる。

いやすぐわかりづらい違いなんだけどね？

姿勢自体は今だってド突きたくなるくらい奇麗だし表情も引き締まっているように見えるんだけど……、何ていうの？ 身が入っていないっていうの？ 心ここにあらず？ もしくは目がうつろ？

……そこまではいらないか。

うーん……、あ！

そうだ、聞いている振り、って言えば一番近いかな？

真面目な顔してとりあえず座ってるだけ、って感じ。

下手をしたら、今話し掛けても反応とか返って来ないんじゃないの、と思ってしまう。

まあ、アシユールにしたら自分がここに居候することになった経緯の説明を聞くのは二度目だし、内心では飽き飽きしているのかもしれないけど。

でもさ、説明聞くのが嫌ならさつきそのまま買物に行けばよかったんだよね。行かせようとした私によくわからない笑顔を寄越して居座ったのはアシユールだっていうのに、結局つまんなそうにするとか何がしたいのか。

そんなことを思いながらじりとアシユールを見つめていたら、視線に気づいたらしいアシユールがずっとこちらを向いて小さく首を傾げた。

私の呆れを含んだ目とアシユールの目が合わさる。

「……………」  
「」

私の無言から何かを読み取ったらしいアシユールは、ついで軽く目を瞠った。……何故そこで驚く？

アシユールの驚きのツボが私にはさっぱりわからない。

そういえば二人で街に買い物に行ったときも、アシユールがこんな顔をしたときがあったな。

うーん……。

まあいいか。

考えたところでアシユールが何を感じて何に驚いているかなんてわからないしね。

『ねえ、今からでも買い物行ったら？』

とにかくアシユールの意識がこちらに向いたようなので、びつくり顔のままのヤツに向かって小声で促してみた。

一応ね、気を利かせてあげたんだよ、私なりに。

壱樹は私たちから視線を外しはしたけどまだなんか思案してるみたいだし、顔合わせくらいにはなっただろうから、もう無理にこの場にいらなくてもいいかな、って。

私たちにとつては家族みたいな壱樹だけど、言ってもお隣さんであつて一緒に住んでいるわけじゃないし、アシユールにすれば直接関わりのない人、っていう括りだろうから。

あと、出会いのことを考えると、なんとなく壱樹もアシユールもお互いにあんまりいい印象は抱いてないんじゃないかな、っていう。うん、つまり、事前に衝突を避けようという事なかれ主義を発揮しているわけです、私。純日本人なもので。



「……」  
『ただいまーっ、あ！』

アシユールが何か言いかけたとき、玄関から元気な声が聞こえた。  
うるさい。孝太だ。うるさい。

私が眉を潜めていると、バタバタとけたたましい足音をさせたあと、汗で額に髪を貼り付けた孝太が勢いよく居間の扉を開けた。

「イツキ兄、おかえりっ！」

玄関からの突撃は壱樹の靴を見つけてテンションが上がった所為らしい。

その騒々しさに、まだ何やら考え込んでいた壱樹も思考を中断して“おかえり”の先を越されたのに苦笑しながら振り返った。

「おー孝太、ただいま。んで、おかえり。元気そうだな」

「うん、イツキ兄もな！」

……なんていうか、いつものことながら、壱樹の前での孝太は犬を思わせる。千切れんばかりの尻尾が見えるようだ。その尻尾はきつとくるりとカールしているに違いない。柴犬っぽく。わん。

壱樹は小さい頃にお父さんを事故で亡くして母子家庭の一人っ子だからか、孝太のことを本当の弟みたいに可愛がってきた。孝太が生まれたときなんて、よくうちに入り浸っていたくらいだ。

そのお陰で孝太は絶大な壱樹っ子に育ってしまったわけだ。実の姉を差し置いて。

壱樹が県外の大学へ進学すると決まったときの孝太のしよぼくれ具合は半端なかった。私？ 私の進路が決まったときはニヤついてたよ、孝太め。あ。思い出したら腹立ってきた。後で孝太の鉛筆一本残らずへし折ってこようかな。ついでにシャーペンの芯も。

「イツキ兄、あとでサッカー付き合つてよ！」

たった今帰つて来たばかりだっていうのに何を言っているんだ。勉強をしなさいよ。

「いいけど、その前に勉強見てやる。お前来年の春には受験だろ」

壱樹が当然のことを言ったら、孝太は「えーっ！」とか言いながらも嬉しそうな顔をした。何その輝く笑顔。お姉様の帰宅時にそんな顔してましたっけ？ むしろ“おかえり”の言葉もなかったよね？ ……額に拳を叩き込みたい。

私は孝太の喜びっぷりに目を眇めつつ、盛大に溜息を吐いてから腰を上げた。

この場に漂っていた微妙な空気が壊れたのはある意味、孝太のお陰だ。便乗して解散しようという魂胆である。壱樹への説明も終わっていたし、別にいいよね。

ということで、アシユールの腕を引いて買い物に送り出そうとしていたんだけど……、

「あれ？ あ！ イツキ兄、アツシュのこと聞いた！？」

目ざとく私たちに目をとめた孝太が、私の手からアシユールの腕をぶん取って壱樹にキラキラした目を向けた。さながら自慢のコレクションを飼い主に見せびらかして得意気に胸を張る犬のように。

「お、おお……」

飼い主は若干引いているようですけどね。

「そうだ、アツシユも一緒にサッカーやろうよ！ イツキ兄、アツシユってすごいんだよ！ 最初サッカーなんて知らなかったのに、教えたらあつという間に覚えるしドリブルも上手いし！ 決まる軌道が見えてるみたいにシュートもゴールに吸い込まれるんだ！ あ、でも、浮き球は取れないから大きいパスは駄目だよ。アツシユに何度『浮き球は胸でトラップするといいよ』って言っても、なんでか知らないけどアシユールってば、ボールが上から飛んでくると払い落としちゃうんだよね」

え。何それ面白い。

矢継ぎ早で口を挟めなかったけど、思わぬところでアシユールの弱点を発見しちゃった。

思わず孝太の大袈裟な身振りを見ながらニヤついてしまったら、そんな私に気づいたアシユールに軽く睨まれた。

でも今の私は寛大だよ。だから、今度サッカーしていると見に行くな、ってにつこり笑ってあげたら、アシユールの目が呆れたような目に変わった。痛い子を見る目とも言う。でも今の私は寛（略）。

「ああそうだ！ アツシユの服は見た？ こつちに着たときのアツシユの服とかちょーすごいよ！ 剣もあつてね！ 今はアツシユの部屋 あ、アツシユの部屋って客間なんだけど、そこにあるはずなんだ。

アツシユ、イツキ兄にも見せてあげていい？ 今どこにある？」

「孝太、わかった、わかったからちよつと落ち着け」

ごもつとも。

大好きな幼馴染のお兄ちゃんが久しぶりに帰って来たことで孝太は大興奮で、周りは完全に置いてきぼりだ。

アシユールという不可思議とも言える存在が、余計に孝太の興奮度を急上昇させているような気もしたけど、それでも壱樹の制止で孝太はぴたりと口と動きを止めた。飼い主に従順で何より。わん。

「サッカー云々はまあいいんだけどさ。……あー、アシユール・ヒヤなんとかさん？　って、今は客間に泊まってるみたいだけど」  
「アシユール・ヒヤカスバーラだよ、イツキ兄」  
「ああ、うん。ヒヤなんとかさんね」

……ちよつと、同レベルじゃないの。人のこと馬鹿にしておいて。

「俺から一つ提案なんだけど、アシユールさんとやら、今からでもこいつらん家<sup>ち</sup>じゃなくて俺ん家に移動しないか？」

「えっ」

「……………」

「……………」

「イツキ兄、なんで？」

……………ごもつとも。

三十七夏 仔犬が一匹騒いでおります。(後書き)

季節柄、かなり更新ペースが落ちています。  
そこそこ雪国でモチベーションがorz  
でも頑張ります！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8012v/>

---

異世界からホームステイ？

2012年1月8日23時46分発行